飯山市埋蔵文化財調査報告　第16集

長野県飯山市

KAMABUCHI KITAGOUDO SITE

釜渕・北顔戸 遺跡

1988・3

飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第16集

長野県飯山市

KAMABUCHI KITAGOUDO SITE

釜渕・北顔戸 遺跡

1988・3

飯山市教育委員会

刊行にあたって

飯山市内には埋蔵文化財包蔵地として約400箇所の遺跡が確認されております。約２万年の太古より連綿と営みが続けられ今日の飯山市へと発展してきました。

飯山市教育委員会では、これら祖先の残した貴重な文化遺産を後世に残すべく文化財の保護を進めております。

今回の発掘調査は、農村総合モデル事業の一環として行われた圃場整備事業に伴うもので、県立飯山南高等学校教諭の高橋桂先生に団長をお願いして緊急発掘調査を実施しました。

調査によって、縄文時代・弥生時代・平安時代・中世の各期に亘る遺構・遺物が出土し、原始・古代の外様平がより明らかとなりました。特に、中世の祭祀遺構と思われる場所より出土した鳥形や木簡は、中世民間信仰を知る上で極めて貴重な資料を提供いたしました。また、多数の木製品は当時の木工技術の高度さに改めて驚いた次第です。

この報告書が学術報告書として活用されるとともに、市民の方々に広く親しまれ、飯山市の埋蔵文化財に対する関心と愛着の念が一層深められるよう祈念いたします。

最後になりましたが、御協力いただいた市民の方々、並び文化庁、県文化課をはじめ関係各位に厚く御礼申しあげます。

飯山市教育委員会

教育長　浦　野　昌　夫

例　　言

1　本書は、農村総合モデル事業の一環で行った顔戸地区圃場整備事業に伴う、埋蔵文化財釜渕遺跡・北顔戸遺跡の緊急発掘調査報告書である。なお、北顔戸遺跡については当初顔戸第５遺跡としたものを新たに独立させたものである。

2　釜渕遺跡は飯山市大字寿字江下地籍に、北顔戸遺跡は同寿字小原地籍にそれぞれ位置する。

3　調査は、飯山市の委託金並びに国庫補助事業補助金を受け、飯山市教育委員会が事業主体となって実施したものである。

4　発掘調査は、昭和62年５月11日より６月18日まで行った。調査にかかる組織は第２章第１節に記した。
整理作業は、高橋調査団長指導のもとに調査員全員があたった。なお、図版作成については石黒京子の協力を得た。

5　本書の執筆は、調査員が分担して行い高橋調査団長が総括した。なお、文責は目次に記した。

6　調査から報告書作成にあたっては下記の方々に格別なる御指導を得た。記して感謝申し上げます。

（五十音・敬称略）

浅田員由（愛知県陶磁資料館）　芦部公一（県文化課）　綾村宏（奈良国立文化財研究所）　太田喜幸（県文化課）　河原純之（文化庁）　木下正史（奈良国立文化財研究所）　小林秀夫（県文化課）　坂井秀弥（新潟県文化行政課）　笹沢浩（県文化課）　田川幸生（県埋蔵文化財センター）　竹内一徳（丸子町公民館）　竹内順一（五島美術館）　広瀬昭弘（国分寺市教委）　仲野泰裕（愛知県陶磁資料館）　野澤則幸（名古屋市見晴台考古資料館）　平出紀男（名古屋市見晴台考古資料館）　松澤芳宏（日本考古学協会会員）　水野正好（奈良大学）　宮下健司（県史刊行会）　矢島宏雄（更埴市教委）

7　本書の編集は望月が行った。

8　出土遺物・実測図は飯山市教育委員会で保管している。

目　　次

序
例　言

第1編　釜渕遺跡

第Ⅰ章　環　境 …… 1
第1節　遺跡の位置と自然環境 …… (田村　況城) ‥ 1
第2節　歴史的環境 …… (常盤井智行) ‥ 4
第Ⅱ章　経　過 …… (望月　静雄) ‥ 9
第1節　調査に至るまでの経過 …… 9
第2節　調査経過 …… 10
第3節　調査概要 …… 11
1．調査の方法　2．調査区の概要
第Ⅲ章　遺　構 …… (望月　静雄) ‥ 14
第1節　掘立柱建物 …… 14
第2節　土　壙 …… 14
第3節　その他の遺構 …… 25
第Ⅳ章　遺　物 …… 26
第1節　縄文時代 …… (望月　静雄) ‥ 26
1．土　器　2．石　器
第2節　弥生時代 …… (常盤井智行) ‥ 31
1．土　器　2．小　括
第3節　平安時代 …… (常盤井智行) ‥ 37
1．土　器　2．小　括
第4節　中　世 …… (望月　静雄) ‥ 41
1．陶磁器　2．木製品　3．銭　貨　4．小　括
第Ⅴ章　総　括 …… (高橋　桂) ‥ 59

第2編　北顔戸遺跡

第Ⅰ章　遺跡の概要 …… (望月　静雄) ‥ 61
第1節　遺跡の位置 …… 61
第2節　歴史的環境 …… 61
第Ⅱ章　調　査 …… 63
第1節　経　過 …… (望月　静雄) ‥ 63
第2節　遺　物 …… (常盤井智行) ‥ 63
1．A地区出土遺物　2．B地区出土遺物
第Ⅲ章　ま と め …… (常盤井智行) ‥ 68

挿　図　目　次

釜　渕　遺　跡

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 2
第３図　釜渕遺跡付近の積雪量 …… 3
第４図　周辺遺跡分布図（１：25,000）…… 5
第５図　グリット設定図（Ｉ区）…… 11
第６図　調査区（１：1,000）…… 13
第７図　Ｉ区遺構全体図（１：160）…… 15
第８図　ＳＫ１・２実測図（１：20）…… 17
第９図　遺構実測図１（１：100）…… 18
第10図　遺構実測図２（１：100）…… 19
第11図　遺構実測図３（１：100）…… 20
第12図　遺構実測図４（１：100）…… 21
第13図　ＳＫ４・５遺構　遺物分布図（１：40）…… 22
第14図　ＳＫ６（祭祀遺構）　遺物分布図（１：40）…… 23
第15図　ＳＫ７・８遺構　遺物分布図（１：40・１：20）…… 24
第16図　縄文土器拓影図１（１：３）…… 27
第17図　縄文土器拓影図２（１：３）…… 28
第18図　石器実測図１（１：３）…… 29
第19図　石器実測図２（１：３）…… 30
第20図　ＳＫ４出土弥生式土器（１：４）…… 32
第21図　包含層出土弥生式土器（１：４）…… 34
第22図　平安時代の土器（１：３）…… 39
第23図　中世の遺物１　中国陶磁・古瀬戸　（１：３）…… 41
第24図　中世の遺物２　珠洲系陶器１　（１：４）…… 43
第25図　中世の遺物３　珠洲系陶器２　（１：４）…… 44
第26図　中世の遺物４　木製品　（１：２）…… 45
第27図　中世の遺物５　杭１　（１：２）…… 47
第28図　中世の遺物６　杭２　（１：３）…… 48
第29図　中世の遺物７　柱根１　（１：６）…… 49
第30図　中世の遺物８　柱根２　（１：６）…… 50
第31図　中世の遺物９　柱根３　（１：６）…… 51
第32図　中世の遺物10　柱根４　（１：６）…… 52
第33図　中世の遺物11　柱根５　（１：６）…… 53
第34図　中世の遺物12　柱根６　（１：６）…… 54
第35図　中世の遺物13　漆器椀　（１：２）…… 55
第36図　銭貨拓影図（１：１）…… 55
第37図　中世陶磁および平安時代遺物分布図 …… 56

北　顔　戸　遺　跡

第38図　調査区（１：1,000）…… 62
第39図　出土遺物１（１：３）…… 65
第40図　出土遺物２（１：４）…… 66
第41図　出土遺物３（１：４）…… 67

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 7
第２表　飯山地方の弥生土器編年表 …… 36
第３表　飯山地方土師器杯　法量比較表 …… 40
第４表　出土古銭一覧表 …… 56

図　版　目　次

図版一　1　遺跡付近の航空写真
二　2　遠　景
3　近　景
三　4　調査開始式
5　Ｉ区調査風景
6　II区調査風景
四　7　打製石斧出土状態
8　打製石斧出土状態
9　漆椀出土状態
10　木簡状木製品出土状態
11　柱根出土状態
12　Ｐ44礎板出土状態
五　13　遺　構
14　ＳＢ２
六　15　ＳＫ１
16　ＳＫ２
17　ＳＫ３
七　ＳＫ４（弥生）
18　遺物出土状態
19　遺物出土状態
20　遺物出土状態
八　ＳＫ５（平　安）
21　遺物出土状態
22　遺物出土状態
23　調査風景
九　ＳＫ６（中世）
24　鳥形・不明木製品出土状態
25　鳥形出土状態
26　木製品出土状態
27　木簡出土状態
28　漆椀出土状態
29　杭打ち込み状態
十　ＳＫ７（中世）
30　遺　構
31　珠洲系陶器片・太型蛤刃石斧出土状態
32　小形磨製石斧出土状態
十一　33　ＳＫ８（中世）珠洲系陶器(鉢)出土状態
34　ＳＫ８　遺物出土状態
35　ＳＫ９（中世）
十二　36　遺構全体図
十三　37　遺構全体図
十四　38　打製石斧
39　打製・磨製石器
十五　40　ＳＫ４出土弥生式土器

十六　41　遺構外出土弥生式土器
十七　42　平安時代の土器
十八　43　平安時代の陶器
　　44　中世の中国陶磁
　　45　古瀬戸
十九　46　珠洲系陶器（甕・壺）
　　47　珠洲系陶器（片口鉢）
二十　48　珠洲系陶器（片口鉢）
二十一　49　ＳＫ６出土木簡
二十二　50　ＳＫ６出土漆器椀
　　51　26Ｅ出土漆器椀
二十三　52　ＳＫ６出土鳥形
　　53　ＳＫ６出土木製品
　　54　木製品
　　55　曲　物
二十四　56　ＳＫ６出土　杭ほか
二十五　57　ＳＫ６出土　杭
　　58　木製品
　　59　木製品
　　60　木製品
二十六　61　ＳＫ８出土木製品
　　62　ＳＫ６・８出土種子
二十七　63　柱　根
二十八　64　柱　根
二十九　65　柱　根
三十　66　柱　根
三十一　67　柱　根
　　68　銭　貨
三十二　69　調査スナップ
三十三　　北顔戸遺跡
　　70　遠　景
　　71　近　景
三十四　72　Ａ地区（弥生式土器）
　　73　Ｂ地区（弥生式土器）
　　74　Ｂ地区（土師器）
三十五　75　Ｂ地区（平安時代の土器）
　　76　Ｂ地区（須恵器長頸壺）
　　77　Ｂ地区（土師器甕）

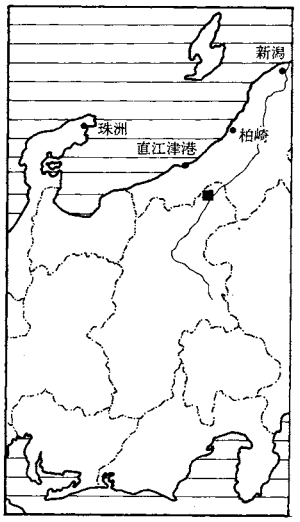
第１編　釜渕遺跡

第Ⅰ章　環　　境

第１節　遺跡の位置と自然環境

千曲川流域において県内最下流に飯山盆地がある。この飯山盆地は、中央を北流する千曲川によって東西に二分され、東側の平地を木島平と呼んでいる。西側の平地は川と平行して走る長峰丘陵（416ｍ）によってさらに二分され、丘陵の東側を常盤平、西側を外様平と呼んでいる。外様平は東西1.5km～２km、南北約８kmの平地である。

釜渕遺跡は、この外様平のほゞ中央西側に位置し、黒岩山（938ｍ）の東麓に広がる顔戸地区・飯山市大字寿字江下・釜渕地籍に存在する。



第１図　遺跡の位置

外様平の西側には斑尾山（1382ｍ）から延々北北東に信越を分かって走る標高1000ｍ内外の関田山脈が聳えている。この関田山脈は、褶曲運動や火山活動などによって出来た山脈であり、第三紀層の崩壊物が推積して出来た旧期洪積層や、火山活動によって吹き出した安山岩の崩壊転落したものなどの地層から出来ている。その後山口横川断層など数次の断層活動により山の東側が滑落し急峻な斜面を形成している。遺跡のある顔戸地籍の北西に聳える黒岩山などは、あたかも石の屏風を建てたようである。この様に外様平の西側の山は東斜面が急で、平地と650ｍ内外の標高差を持っている。山脈から発する川は標高1000ｍの山地から、350ｍ内外の平地へ一気に流れ下るため、浸蝕作用が強く、崩落などもあって、土砂を山麓に大量に運搬し、いたる所に小扇状地を形成している。その最大なものは中条滝沢川扇状地である。大雨や春の雪融け水などの流入被害を防ぐため両岸に提防を築いてきた結果、今では天井川の様相を呈するに至っている。

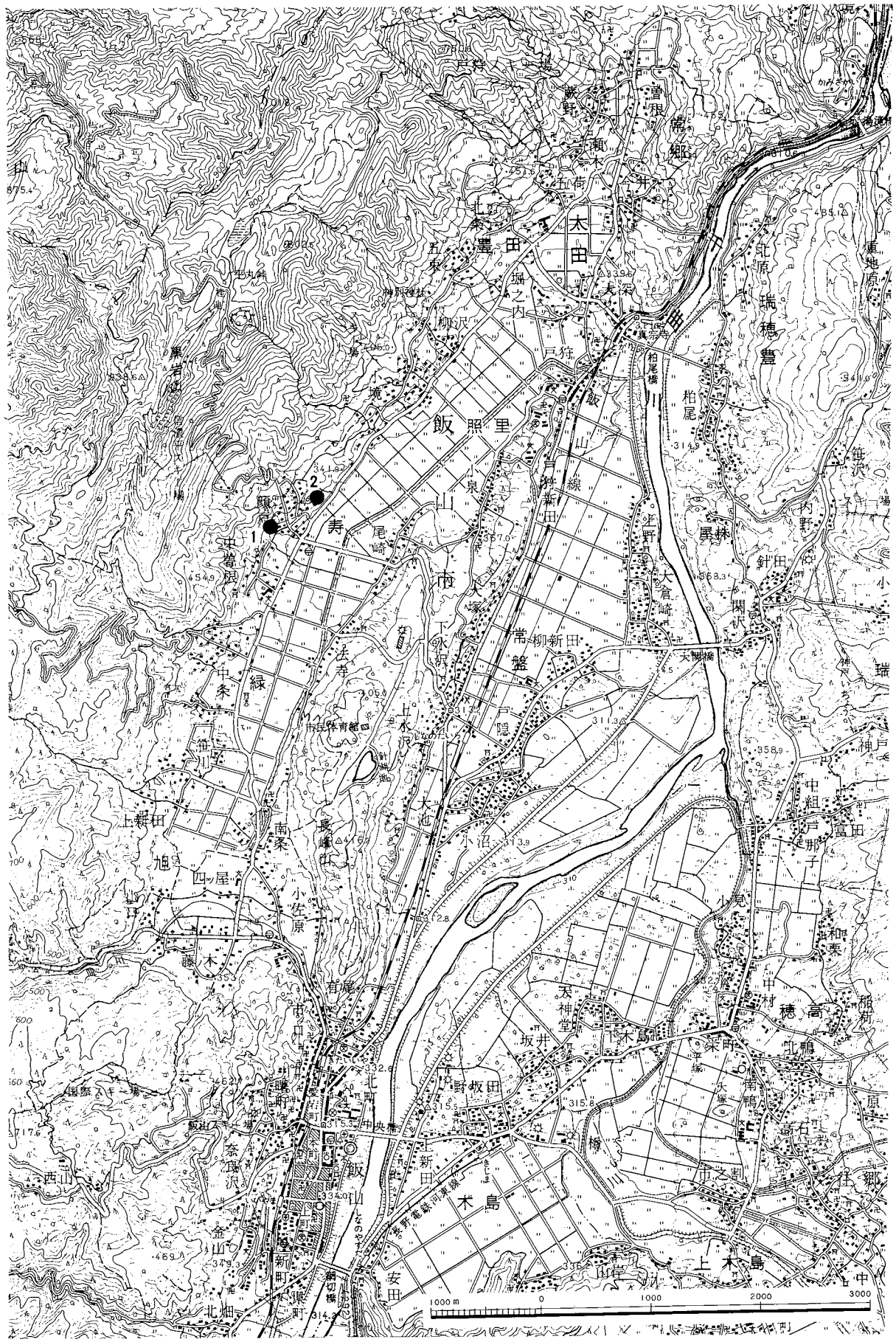
遺跡のある顔戸地籍の、北西に聳える黒岩山の頂上付近は安山岩が露出し、すこぶる急峻な斜面を持っているが山から流れ下ちる川はない。しかしその山麓には、豊富な湧水が三ヶ所あり、通年を通して安定した水利に恵まれている。

釜渕遺跡（第２図１）は、この恵まれた湧水が合流して流れ下る沢筋にあり、平地と接する所に位置しており、生活環境は非常に恵まれた地形である。

北顔戸遺跡（第２図２）は、飯山市大字寿字小原地籍にあり、釜渕遺跡から北東へ顔戸の集落をはさんで約500ｍの位置にある。このあたりは、長橋川の扇状地上である。長橋川は、黒岩山扇林（918ｍ）あたりに源を発し、急峻な斜面を一気に流れ下る川であるが、春の融雪時のみ流れる川である。黒岩山は冬期間４～５ｍの積雪があるので、これが春先一気に融け出して流れ下る様はものすごく、山腹に推積した土砂を山崩れを供って平地に運搬することは容易である。最近においても、昭和22年初春に大規模の山崩れがあり集落内に押出している。長橋川扇状地はこうして初春、雪融け時期に活発に形成されたものと思われる。北側には中世城館址の顔戸館が存在している。

なお、顔戸地区より越後の平丸に至る平丸峠が存在し、今ではほとんど交流はないが、近世においては物質の交流が盛んであったことが記録に残されている。

外様平の冬の気候は、一言にして言えば裏日本型である。冬が訪れると、大陸は急に冷却して厳しい寒さとなる。東アジアの中でもシベリアには世界の極寒と言われる所がある位に非常に寒い。そこでシベリアを中心として非常に寒冷な気団が発生し、それが太平洋方面に向って流れ出して来る。これが冬の季節風で、一般には北西風となる。この季節風は元来乾燥した大陸の内部から吹いて来るのであるから水分が乏しいのであるが、途中日本海上を吹きぬけてくる間に多量の水蒸気を供給され、日本に上陸して、山脈によって上昇され、裏日本に雨や雪を降らせる様になる。

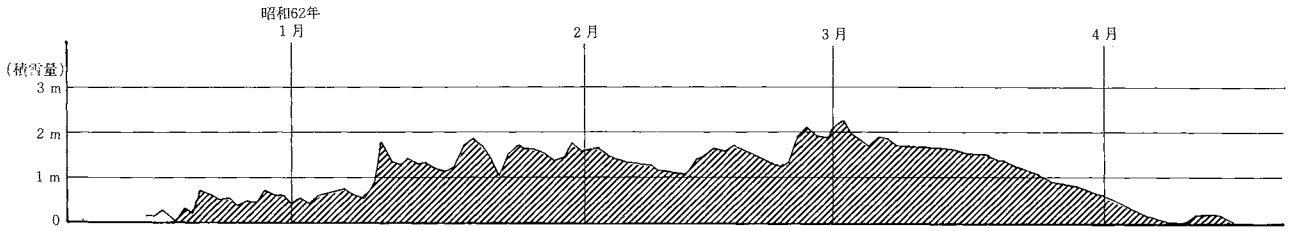


第２図　遺跡位置図（1.釜渕遺跡 2.北顔戸遺跡）　1：50,000

飯山盆地（外様平）の背梁山脈である関田山脈は、高さ1000m内外で浅い山なので、裏日本に吹きつける季節風がこの山脈を越えて吹き下すために、当地方は湿度の高い雪が降り、深雪地帯となる。飯山地方の積雪量を言い表わす言葉に「一里一尺」という言葉があり、南から北に向って一里進むと一尺雪が多くなることを意味している。東西的にはこの差が一段と強く常盤平から西に向って半里進むと一尺雪が多くなると言われる程である。屋根の雪下しの回数を例にとって見ると、外様平西側山麓側の顔戸地区が5回ならば、東側の尾崎（おさき）地区では3回で済むという具合である。この様に冬の降雪量は、せまい外様平でもかなりの差があるのである。

次に夏の気候は内陸盆地型であり、夏の日盛りには高温となり、4月～9月までは雨が少なく乾燥する。特に4、5月は雪消えと同時に著しく乾燥する時期で、しばしばフェーン現象が起り火災発生の時期でもある。

この様に外様平の気候は、冬は裏日本型で北西季節風によって降雪(雨)量が多く曇天の日が多い。春4月から秋10月ごろまでは降雨量が少なく内陸盆地型の気候であり両者の特色を持っているのである。



第3図　釜渕遺跡付近の積雪量（信濃平観光開発株式会社調）

参考文献

外様村史　1957

第２節　歴史的環境

ここでは、釜渕遺跡のある顔戸を中心とした外様平の歴史的環境を、考古学的遺跡・遺物をもとに述べることとする。（第４図・第１表）。

先土器時代　人間が外様平に姿を現したのは今のところ、約２万年前の先土器時代のことと推測される。柳原地区南条の東源寺遺跡や、針湖池、長峰遺跡、尾崎南遺跡、大塚遺跡などの長峰丘陵を中心とした各所で、彼らの使用したと思われる刃器や彫器などの石器がみつかっている。関田山脈も彼らのフィールドとして山の幸・川の幸を求めて頻繁に歩きまわっていたにちがいない。

縄文時代　人々が煮炊きのできる器「土器」と、よりすばしこい獲物が採れる弓矢を発明した時代で、縄目の文様がある土器が多いので縄文時代と呼ばれている。

外様平で最も古い縄文時代の遺跡は、今の柳原公民館のある台地上の小佐原遺跡で、縄文時代草創期の土器や石器が出土している。

縄文時代前期には岡峰遺跡がある。岡峰遺跡は、今の青少年ホームのある所で、昭和50年、51年に照丘高校教諭（当時）小林幹男・児玉卓文氏および同校生徒による発掘が行われ、少量ではあるが縄文前期の有尾式土器が出土している。

縄文時代中期は、柳沢Ａ遺跡・顔戸道下遺跡・島遺跡、笹川遺跡・別府原遺跡と、関田山脈東麓に点々と遺跡がみられる。顔戸道下遺跡は、昭和27年に神田五六氏によって発掘された遺跡で、現足立誓治氏宅と県道飯山曽根線との間の畑地に位置し、住居跡１棟と、中期後葉の土器深鉢、猪・鹿などの骨片が出土している。

縄文時代後・晩期は、柳沢Ａ遺跡・顔戸南木ノ下遺跡・顔戸第５遺跡・当釜渕遺跡がある。顔戸南木ノ下遺跡は顔戸蓮華寺境内を中心とする遺跡で、縄文晩期のほぼ完形の浅鉢などが出土しており、遺物は蓮華寺に保管されている。

弥生時代　弥生時代は、大陸から稲作が伝来した時代で、日本人が米を作り始めた時代である。飯山地方に稲作が伝えられたのは、きびしい自然条件にはばまれてか、北九州に遅れること 約300年、弥生時代中期中葉のことである。

外様平は飯山で最も早く稲作が始められた所で、岡峰・柳沢Ｂ・小境・押出・旧照里小学校・光明寺前・照丘・大塚・小泉・山崎・西長峰・下林・法寺・水沢や、顔戸北木ノ下遺跡・当釜渕・北顔戸遺跡・柳原鍛冶田・北原遺跡などの弥生時代中期の遺跡が、関田山脈東麓と長峰丘陵上に点々と数多くみつかっている。

続く弥生時代後期になると先の、岡峰・柳沢Ｂ・北顔戸・顔戸北木ノ下・釜渕遺跡や、柳原の鍛冶田・北原遺跡などの関田山脈東麓の遺跡が姿を消すのに代って、鶴屋敷・顔戸南木ノ下・顔戸出口・柳町・尾崎南・東長峰遺跡などの長峰丘陵を中心に新たに遺跡が出現する。

弥生時代の遺跡で発掘された主な遺跡をみてみると、岡峰遺跡では、方形プランの住居跡が第１次調査で48軒が第２次調査で２軒以上が著しく重複してみつかっており、中期後葉の栗林II式および中期末の百瀬式土器が出土している。

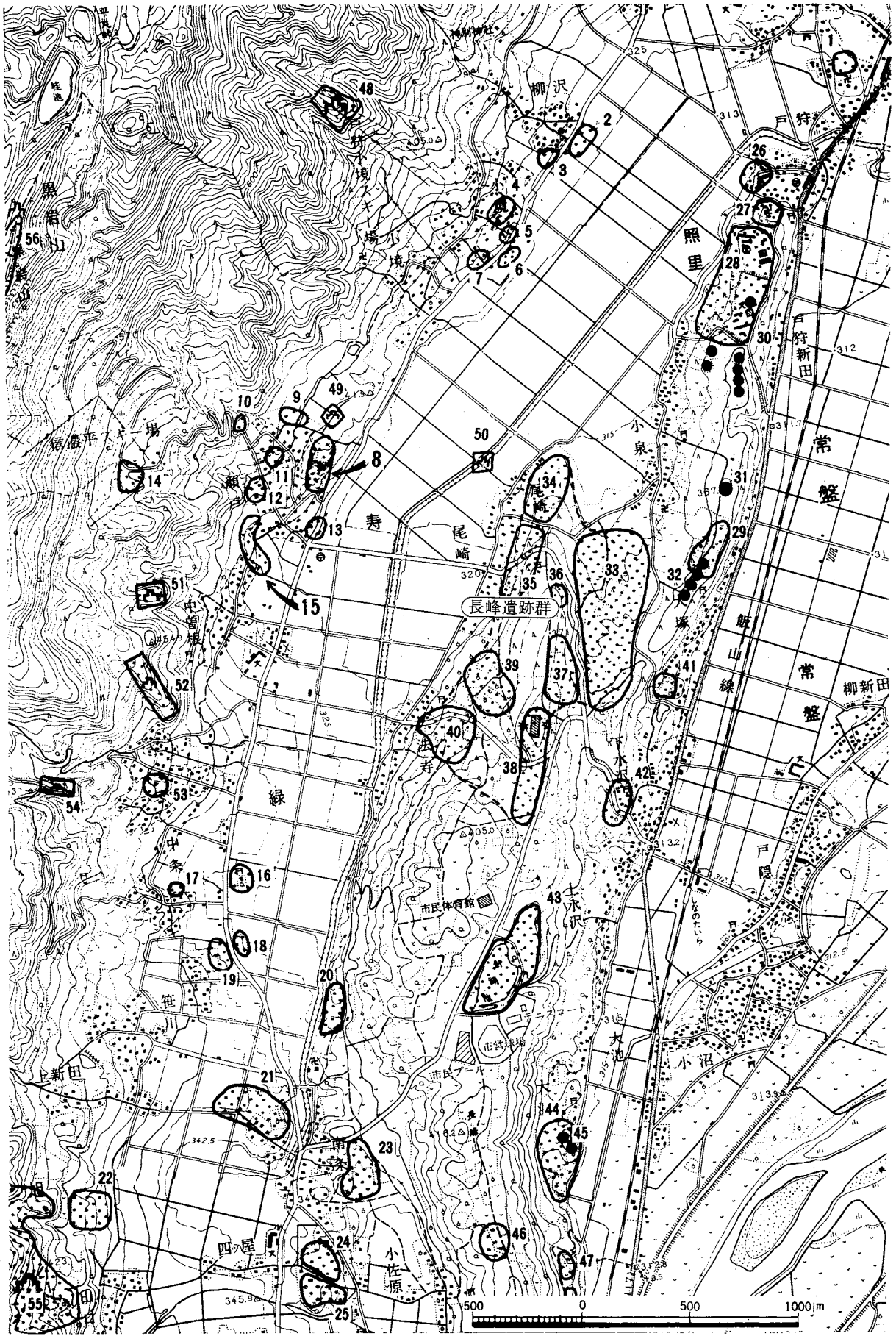
押出遺跡は、栗林式期の土壙と土器が出土しており、飯山で最も古い中期中葉の栗林Ｉ式土器（小境期）が出土している。

照丘遺跡は、現在の照丘高校庭整地の際に発見された遺跡で、竪穴式住居が検出され、中期の土器とともに、注目すべきものとして建築用材と推定される木製品が出土している。

東長峰遺跡は、方形プランの住居跡10軒が検出され、後期箱清水式の土器、鉄器、土製勾玉が出土している。

柳町遺跡は弥生後期の方形プランの住居跡２軒と、それに重複して古墳時代前期の方形プランの住居跡３軒が検出されている。

柳原地区の鍛冶田・北原遺跡は、円形プランと推定される弥生中期の住居跡が検出され、中期後～末の土器が出



第４図　周辺遺跡分布図（１/250000）

土している。

以上の発掘された遺跡を概観すれば、中期には関田山脈東麓および戸狩周辺に中心があり、後期は長峰丘陵に中心が移動するようである。また、住居跡は、中期には円形プランであったが、後期になると方形プランになる傾向がうかがえる。今後の調査でよりくわしく解明されるであろう。いずれにせよ、外様平は飯山地方で最も早く稲作が始められ、かつ集落が集中して営まれた所であり、千曲川本流の洪水を被ることのない安定した地盤と、関田山脈の豊富な源水がその要因であったと思われる。

古墳時代　原則として１人の首長を葬るために応神天皇陵古墳・仁徳天皇陵古墳などの巨大な墳墓が造られた時代を古墳時代と呼んでおり、階級社会が成立し、日本という「国家」が形づくられてゆく時代である。

飯山地方最古の古墳は、今のところ秋津勘助山古墳と推定される。山頂に築かれた全長35ｍの前方後方墳で、その立地・墳形から前期に遡る可能性が指摘されている。

長峰丘陵は飯山でも有数の古墳密集地である。前方後円墳（帆立貝式）有尾古墳、直径40ｍの大円墳大塚茶臼山１号墳などの著名な古墳の他に、直径10ｍ内外の円墳が数多く知られている。しかし、横穴式石室墳でないことが推定される他は、内容の知られているものはなく、測量調査も行われていない。今後の研究課題の１つである。なお、照丘遺跡では前期の方形周溝状遺構が検出されている。

また、尾崎の丸山徳夫氏所有の法寺下林の畑から出土した直刀および管玉・勾玉などの玉類が同氏宅に所蔵されている。かつて古墳があったものと推定されている。

古墳時代の生活跡は、古墳に比べ知られているものは案外少なく、外様平では、小境押出遺跡で前期の土器が採集されている他、柳町遺跡で先の弥生時代の項で述べたように、弥生時代の住居と重複して古墳時代前期の住居跡が検出されている。このように古墳時代の遺跡は、弥生時代の遺跡に比べ極て少ない。今後の発見・調査に期待される。

歴史時代　古墳時代に続く飛鳥・奈良時代以降を歴史時代と総称しておく。

飯山地方では今のところ飛鳥・奈良時代の遺跡は知られていない。あるいは圃場整備等によって消滅したのか、未だ発見されないだけのことなのだろうか、今後の調査・研究にまつところが大きい。

続く平安時代になると再び遺跡が知られるようになる。代表的なものとして当釜渕遺跡の他、柳原の北原・鍛冶田遺跡、温井長者清水遺跡、飯山有尾遺跡、秋津田草川尻遺跡がある。特に北原遺跡は、鍛冶遺構が数多く発見され、鍛冶が行われていたことを物語っており、外様平が高い技術と文化をもった地域であったことが推測される。

なお、これらの平安時代の遺跡はいずれも平安時代中期（９世紀後半～11世紀）を中心とした年代に出現しており、全国各地に「荘園」と呼ばれる私有地が経営される時期にあたる。また、外様平が「常岩の牧」と呼ばれる官営牧場の中心であり、『吾妻鏡』文治２年（1186）３月の条に「常岩牧」がみえることから、外様平の平安時代における開発が、荘園あるいは常岩の牧に関連していた可能性が指摘されている。

中世・近世（鎌倉～江戸時代）の遺跡はこれまで考古学的にはあまり注目されていなかったが、近年ようやく目がむけられるようになった。そして古文書では知ることの少ない庶民の生活や、土器をはじめとする日常品の流通形態などが徐々に明らかにされつつある。

中・近世の代表的な遺跡は、当釜渕遺跡、北顔戸遺跡の他、温井長者清水遺跡、飯山有尾遺跡などがあり、掘立柱建物や、珠洲焼、中国銭、中国製陶磁器などが出土している。

特に今回の釜渕の調査で、永仁四年（1296）銘の呪符木簡が発見されたことや、大量の柱根が出土したこと、漆椀が出土したことなどは全国的にみても極めて注目すべきことである。

また、関田山脈東麓には、小境城・顔戸館・中条城・中条館などが点々と存在し、外様平中央にも尾崎城などが存在している。古文書によれば、外様平には、常岩氏・泉氏・尾崎氏・顔戸氏・中曽根氏などの氏族が盤踞していたことが知られているが、先にあげた城跡や館跡の調査や、釜渕遺跡などの遺跡が発掘調査されることによって、よりくわしく彼らの動向が解明され、また、現在の顔戸・中曽根などの集落の歴史もより鮮明になるものと思われる。

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	時　　代	発掘
1	岡　　峰	縄文(前)・弥生(中)・平安	○
2	柳　沢　A	縄文(中・後)・古墳	
3	柳　沢　B	弥生(中)	
4	鶴　屋　敷	弥生(後)	
5	桜　　沢	平安	○
6	小　　境	弥生(中・後)・平安	
7	押　　出	弥生(中)・古墳(前)	○
8	**北　顔　戸**	縄文(晩)・弥生(中)・平安	○
9	顔　戸　第　5	縄文(晩)	
10	顔戸大天狗	弥生(後)	
11	顔戸北木ノ下※	弥生(中)	
12	顔戸南木ノ下	縄文(晩)・弥生(後)	
13	顔　戸　道　下	縄文(中)	○
14	顔　戸　出　口	弥生(後)	
15	**釜　　渕**	縄文(中・後)・弥生(中)・平安・中世	○
16	布施田神社	平安	
17	島	縄文(中・後)	
18	笹　　川	縄文(中)	
19	別　府　原	縄文(中)・古墳・平安	○
20	正　行　寺　北	縄文(前)・平安	
21	旭町遺跡群北原	縄文(晩)・弥生(中)・平安	○
22	旭町遺跡群鍛冶田	縄文(草)・弥生(中)・平安・中世	○
23	東　源　寺	先土器・平安	
24	鬼　ヶ　峰	弥生(後)・平安	
25	小　佐　原	縄文(草・前・中)・弥生(中・後)	○
26	旧照里小学校	弥生(中)	
27	光　明　寺　前	弥生(中)	○
28	照　　丘	弥生(中・後)・古墳(前)	○
29	大　　塚	先土器・弥生(中・後)・平安・中世・近世	○
30	照里古墳群	円墳８基	
31	茶臼山古墳群	円墳３基・１号墳 径42.5m 高5.5m	
32	大塚古墳群	円墳14基	
33	小　　泉	弥生(中・後)	○
34	柳　　町	弥生(後)・古墳(前)	○
35	山　　崎	弥生(中・後)	○
36	尾　崎　南	先土器・弥生(後)	
37	東　長　峰	弥生(後)	○
38	西　長　峰	弥生(中・後)	○

39	下　　林	弥生(中・後)・古墳	
40	法　　寺	弥生(中・後)	○
41	水　　沢	弥生(中・後)	
42	下　水　沢	平安	
43	針　尾　池	先土器・縄文(前)・弥生(中・後)・平安	
44	お　茶　屋	縄文・弥生(中・後)・土師器？	
45	大池古墳群	円墳２基	
46	長　　峰	先土器	
47	長　者　窪	縄文(前)・弥生(中)・平安	
48	小　境　城	連郭	
49	顔　戸　館	単郭	
50	尾　崎　館	消滅	
51	中小屋城	連郭	
52	中　条　城	複郭	
53	中　条　館	複郭　～安土桃山	
54	馬の峯城	連郭　～戦国	
55	山　口　城	複郭　～安土桃山	
56	黒　岩　城	単郭　戦国	

参考文献①、②、③より作成（Ｓ63．３月現在）

※北木ノ下遺跡は今回新たに確認した遺跡で、堀川龍夫氏所有の畑より弥生中期の土器が採集されており、同氏宅に保管されている。

参考文献

① 飯山市教育委員会　1986　『飯山の遺跡』

② 長野県飯山北高等学校地歴部ＯＢ会　1977　『遺跡分布調査報告Ｉ』

③ 江口善次　1957　『外様村史』

④ 飯山市教育委員会　1980　『長野県飯山市旭町遺跡群鍛冶田』

⑤ 飯山市教育委員会　1985　『長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡Ⅳ』

⑥ 飯山市教育委員会　1980　『長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡調査報告書』

⑦ 信濃史料刊行会　1956　『信濃史料』第１巻上下

⑧ 長野県史刊行会　1982　『長野県史考古資料編全１巻(2)主要遺跡（東北信）』

⑨ 飯山市教育委員会　1976，1977　『岡峰遺跡発掘調査報告書』『岡峰遺跡等２次発掘調査報告書』

⑩ 高橋桂　1962　「飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について」『信濃』14－11

⑪ 松沢芳宏　1983　「飯山・中野地方の前半期古墳文化と提起する諸問題」『信濃』35－３

第II章　経　　過

第１節　調査に至るまでの経過

釜渕遺跡は飯山市大字寿字釜渕に所在し、弥生時代を中心とする遺跡であることで周知されていた。場所は旧外様小学校北の中曽根区北半及び北側の顔戸区に近接する地域であるが、いままで顔戸地籍内まで拡がりを持つとは予想していなかった。

昭和61年、農村総合モデル事業の一環として顔戸地区内において圃場整備事業の計画があがった。

９月４日、県文化課小林・太田両指導主事に来飯をいただき現地協議を行う。その結果、釜渕遺跡と顔戸南木ノ下遺跡の間の地区が対象地区となっていた。水田地帯であるが、一部畑地となっている部分があり、そこで磨耗した土器細片を採集した。またもう一地区は、顔戸館址の南側にあたり、すぐ上方は縄文後期の遺跡として周知されている顔戸第５遺跡（仮称）に近接していた。

10月30日　県教育委員会より、「飯山市釜渕遺跡他の保護について」の通知があり、事前に発掘調査を実施して記録保存を図るようにとの指示を受けた。計画としては、二遺跡で1000㎡以上を調査し、その費用として4,908,000円の予算書が示された。

昭和62年

４月６日　文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出する。

４月21日　顔戸地区圃場整備実行委員会委員と発掘調査について説明会を開催し協力を求める。

４月24日　調査会・調査団の委員の委嘱を行うとともに、顔戸公会堂において調査会を開催する。調査会・調査団の組織は以下のとおりである。

調査会名簿

顧　問	小野沢　静　夫	（飯山市長）
〃	平　井　佐　平	（圃場整備実行委員長）
会　長	浦　野　昌　夫	（飯山市教育長）
副会長	佐　藤　　清	（飯山市教育次長）
委　員	上　原　幸　夫	（飯山市文化財専門委員長）
〃	高　橋　　桂	（飯山市文化財専門委員）
〃	栗　岩　　勇	（顔戸区長）
〃	平　井　　宏	（圃場整備副実行委員長）
〃	足　立　光　延	（顔戸区公民館長）
事務局	小　川　恵　一	（教育委員会社会教育係長）
〃	望　月　静　雄	（教育委員会社会教育係）

調　査　団

団　長	高　橋　　桂	（県立飯山南高等学校教諭）
調査員	望　月　静　雄	（飯山市教育委員会）
〃	常盤井　智　行	（飯山市常盤小沼）

調査員　　田　村　滉　城　（飯山市外様顔戸）

作業協力者（順不同・敬称略）

足立てい　久保田すみ子　足立草苗　久保田ミユキ　栗岩敏子　小林千恵子　足立まさ子　平井ゆきを　栗岩春子　平井澄子　平井京子　北原清子　足立とみの　平井芳　清水カズエ　栗岩とわ　島津千代　佐藤良子　清水重利　上野松雄・市ノ瀬正人（飯山市教育委員会職員）　飯水社会科研究会　高澤秀徳（飯山市公民館）

協力者

石田清和（戸狩郵便局）　丸山一男（飯山市公民館）　岸田文彦（飯山市税務課）　栗岩時雄(飯山市議会議員)　北原隆（顔戸区）　足立商店　山本貞夫・滝沢道代・清水啓子・宮本宣子（飯山市教育委員会）　鈴木三郎助（民宿鈴荘）　顔戸八日会　大島重機　圃場整備実行委員会　清水誠一（外様郵便局）　坪根まどか　青木彰（飯山市公民館外様分館）

第２節　調査経過

調査は昭和62年５月11日より６月18日にかけて実施した。器材搬入・天幕設営などの事前準備は５月７・８両日に行った。

５月11日　午前９時より調査開始式を行い、安全祈願祭を執り行った後、調査方法などの説明を行う。作業員の方は地元の主婦を中心として18名である。20Ｈ区より着手するものの、約15cmで水田床上となり、その下層は地山の黄褐色混礫土層であった。遺物・遺構は確認できなかった。14日には28Ｈグリットまで調査を進めたが、縄文式土器・中世珠洲系陶器片が若干出土したのみで、遺構等の痕跡は認められなかった。そのため、すでに水田にするための土地改変により破壊されているのではないかと懸念された。

17日には28Ｉ区より珠洲系陶器鉢の出土をはじめ、縄文後期土器片が多量に出土しはじめた。土層は南に向って徐々に傾斜を増し、旧地形が谷状地であったことを示している。そのため27～30・Ｈ～Ｋ区の谷状地を調査することにした。遺物はこの旧谷状地に堆積した黒色土層中に包含されており、中世～縄文各時代に亘る遺物が混在して出土した。またこの地区の調査と併行して、周辺地域の試掘調査を実施した。(Ⅱ～Ⅶ区)。しかし、Ⅱ・Ⅲ区で弥生式土器片が若干出土したものの他区ではほとんど遺物はなく、遺構も認められなかった。したがって、27・30・Ｈ～Ｋ区を中心として北側へ調査区を拡張することとした。

５月27日には26Ｂ区において漆椀が単独出土した。付近より縄文後期土器片・打製石斧が出土したが、若干の珠洲系陶器も出土したことから、中世の漆椀と推定した。また同時に柱痕も続々と出土したため中世の建物の存在を予測するに至った。

５月31日には外様公民館等との共催により現地見学会を開催する。

６月１日　27Ｇ区において二個目の漆椀がほぼ完形で出土。付近より杭・種子など多数出土し、翌２日には同一遺構内と考えられる地点より木簡が出土した。

６月６日　奈良国立文化財研究所木下氏・県文化課笹沢指導主事・更埴市教委矢島氏が視察、木製品の保存等について指導を受ける。また、市内松澤芳宏氏・県埋文センター田川氏が来跡、それぞれ指導をいただく。

６月７日　30Ｇ区Ｐ42より礎板出土。また29Ｈ区検出のＳＫ７は当初縄文期と考えていたが壙底より珠洲系陶器鉢片が出土し、中世の堅穴遺構であることが判明する。翌８日は北側をさらに拡張するためバックホーを投入。Ｙ～Ｈ・20～24区。

６月10日　市教育委員会視察。この頃までは全調査区の精査に入る。

６月12日　木簡・漆椀出土遺構（ＳＫ６）の精査によって鳥形木製品を検出する。

６月13日　文化庁河原主任調査官来跡、指導を受ける。

６月14日からは、確認遺構の未掘部分の掘り下げ及び、全体測量に入る。18日には全地区を完掘し、全体写真の撮影を行う。総面積は約1500㎡である。

また19日～23日まで柱根の取り上げを行い、一点ずつ水の入ったビニール袋に入れ調査室に搬入した。

整理作業は他の遺跡調査もあったため10月中旬より実施した。多量の木製品の管理も大変で水槽に水漬けにし、定期的に水を入替えた。遺物の洗浄・注記などは調査員２・３人で行い、同時に木製品の写真撮影を行った。水漬けのため撮影には時間がかかったが、11月20日頃までに完了した。11月下旬からは遺物の接合・復元・実測作業にとりかかったが、12月中旬より１月末まで県スキー大会週間の準備・大会のため全面的休止を余儀なくされた。２月に入り、調査員３名により実測・トレース・写真撮影などを精力的に行う。３月下旬に至りようやく図版が完成、同時に原稿も一週間ほどで仕上げた。

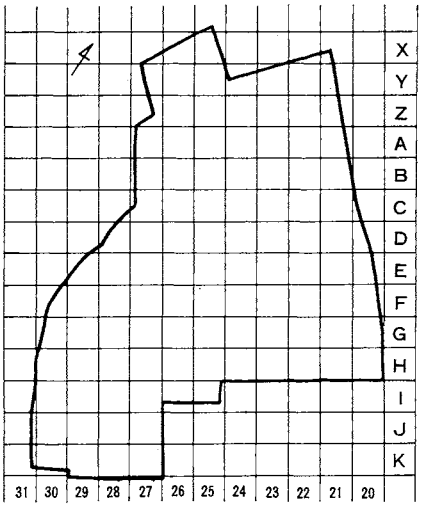
第３節　調査概要

１．調査の方法

(1)　調査区の設定（第５図・第６図）

調査区の設定にあたり、事前に対象区域内を踏査し、任意に試掘を行ったが水田のため明確な範囲は把握できなかった。ただ調査区北側（Ｉ区）において一部の畑地で土師器片を採集でき、この付近を中心に調査することとした。３×３ｍグリットを１列（Ｈライン）設定、番号を後の拡張を考慮して20より付した。結果的に座標軸の第三象限を使用し、Ｘ軸を20～、Ｙ軸をＸ～となった。なお呼称はＸ－20グリット等とすべきであったが、当初より20Ｘ等と呼称していたためそのまま踏襲することにした。

また、遺跡の拡がりを把えるため他地区において７箇所の調査区を設けた。II・III区は同グリットで設定したが、他は地区は水田の形状にあわせ任意に設定した。



第５図　グリット設定図（Ｉ区）

(2)　発掘方法

遺跡の範囲が不明確のため、まず遺跡の拡がりを把えることを第１目的とした。前項で触れたとおり、３ｍの１本トレンチ（Ｈライン）から着手することとした。

また、遺物の取り上げについては、検出面まではグリット一括とし、まとまって検出された場合は分布図・レベルの記録作成を行う。さらに遺構が検出された場合はセクションの観察、分布図等を1/20で作成することとした。ある程度遺跡の拡がりを把握できた時点で、出来る限り全面調査を行うこととした。結果的には500㎡以上調査予定としていた３倍の1500㎡を調査したが、遺跡範囲及び面的な調査は遺跡のごく一部であろうと思われる。

２．調査区の概要（第６図）

(1)　Ｉ区

今回の調査の中心となった地区である。本地区は東・南に向って傾斜しており、水田が階段上に並んでいる。層序は水田耕作土約15cm下が黄褐色粘土層の基盤および青白色粘土質層の基盤となる層であった。ただし南側の28～30・Ｉ～Ｋ区付近は旧谷状地であり、30Ｋ区南壁では耕作土下層は約100cmの黒色土層が堆積している。逆に調査区上方の20Ｘ付近は田直しにより基盤まで削平されていた。

検出された遺構は、掘立柱建物６、土壙（小竪穴含）９、その他溝状遺構などがある。柱穴が多数検出されているが、これは縄文・弥生・平安・中世の各時期の遺構が後世の地形改変に伴い破壊を受けたものと考えられる。

(2)　II区・III区

調査対象地区の南端に位置する。従来の釜渕遺跡の範囲に近接する地区であり、付近の深掘りしたゴミ穴より弥

生式土器片が出土していた。層序は北側が約30cmで基盤の黄褐色粘土層に到達するものの、南側では150cm以上の黒色土が堆積している。遺物は弥生式土器片が出土したが層としてまとまった出土はない。遺構についても検出されなかった。

(3) Ⅳ区

本地区はバックホーによって土質調査を行った。1.5mの深さまで調査したが、グライ土壌が続き生活面は認められなかった。

(4) Ⅴ～Ⅶ区

対象地区の斜面上部で、本地区より上部は急峻な山地となる。比較的地盤の安定した地区であるが地山面はかなり急であった。珠洲系陶器片が少量出土したが、遺構は確認されなかった。

(5) Ⅷ区

Ⅰ区より比高差3m上位に位置する。西側に向って傾斜している。珠洲系陶器などの中世遺物が若干出土したが遺構は明確でなかった。

以上、釜渕遺跡の全調査地区について概述してきた。縄文時代～中世の生活の拠点となった場所はⅠ区を含めた周辺と推定される。

第6図　調 査 区 （1：1000）

第Ⅲ章　遺　　構

Ⅰ区における遺構の検出は、傾斜地の水田地帯ということで階段状に地形改変が加えられており、多くの遺構がこれによって削平されていた。最も破壊を受けていたのは20～24ラインで、特に20～24・Ｘ～Ｃ区は耕作土の下はグライ土壌となっており、地山面がかなり削平されたことを示している。なお30Ｋ区からほぼ北へ向って26Ｂ区に至る間は、旧谷状地と思われ黒色土が厚く堆積している。

このように遺構の検出状況は必ずしも良好ではなかったが、現時点で整理された遺構について触れてゆくこととする。

第１節　掘立柱建物

ＳＢ１（第10図）

20・21ＧＨ区にある梁行２間(3.8ｍ）×桁行２軒（4.48ｍ）の掘立柱建物である。柱間間隔は梁行が 1.36ｍ・2.48ｍ、桁行は2.20～2.28ｍである。ピットの深さは一様ではないが平均約40cmを測る。

東側の桁行中央ピットより木製品（第28図15）が底面より出土している。

ＳＢ２（第10図）

20・21ＧＨ区にある梁行１間（4.11ｍ）×桁行４間（11.5ｍ）で、北側に廂が付く可能性がある。柱間寸法は桁行が2.12～2.36ｍである。本建物に附属するかどうか不明であるが、周囲に多数の柱穴が存在する。本建物とした柱穴は深さ平均30cmで、60cmに達する柱穴もある。柱穴覆土は、暗黄褐色土層でほぼ一様である。

ＳＢ３（第11図）

24～26・Ｂ～Ｄ区に位置する。２軒（3.32～3.6ｍ）×２軒(4.0ｍ)で、柱間寸法は梁行が2.0ｍ、桁行は 2.6ｍである。西側は柱の配列がはっきりしない。柱穴深さの平均は30cm。

柱根はＰ15・Ｐ22・Ｐ23・Ｐ17・Ｐ18・Ｐ26で計６本出土している。

ＳＢ４（第11図）

25・26ＺＡ区に位置する。調査区内において最も上段にある建物である。２軒（3.32～3.6ｍ）×２軒（1.6～1.8ｍ）で、柱穴の配列は悪い。

柱根は３本検出されている。建物内にも柱根を有するピットが存在しているが、おそらく建替えなどによるものと考えられる。

ＳＢ５（第９図）

28・29Ｆ～Ｈ区にある。１軒(3.4ｍ）×４軒（6.92ｍ）の建物で、柱穴がＳＫ７の壁を切って構築される。桁行の柱間寸法は1.32～1.88ｍでほぼ対応する。

柱根は６本検出されている。下端付近に切り込みを入れた例があり特徴的である。

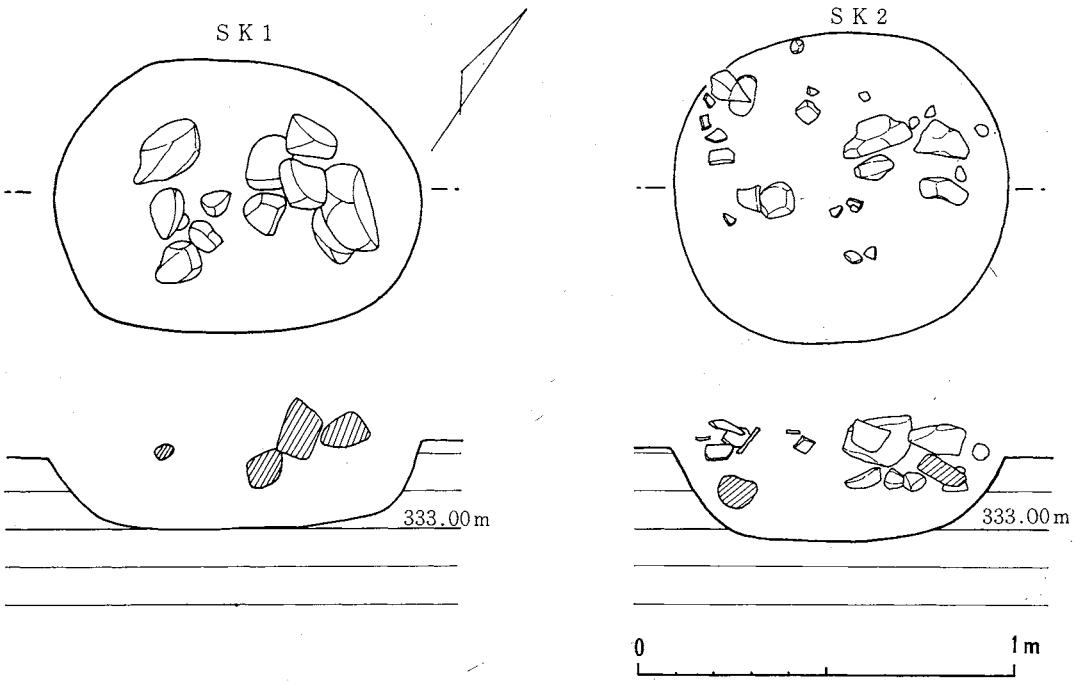
ＳＢ６（第９図）

27～29ＪＫに位置する。全体を検出できなかったが２軒(4.2ｍ）×４軒以上と思われる。柱間寸法は梁行が2.0～2.1ｍ、桁行は1.32～1.76ｍである。以上、６軒の掘立柱建物は中世に位置づけられる。

第２節　土　　壙

土壙は９基検出されているが、土壙と呼べるのはＳＫ１～３で、他は竪穴遺構とした方が妥当である。時期的には出土遺物によりＳＫ１・２が縄文時代、ＳＫ４は弥生時代、ＳＫ５は平安時代、ＳＫ３・６～９は中世にそれぞ

第７図　Ⅰ区遺構全体図　（１：160）



第８図　ＳＫ１・ＳＫ２実測図（１：20）

れ位置づけられる。

ＳＫ１（第８図）

25・26Ｂ区に位置する。97×73cmの楕円形プランを呈し、深さ35cmを測る。確認時に周辺より多数縄文後期土器片が出土している。壙内より幼児頭大の石が約10点出土したが、特別に配石された状態ではなかった。

ＳＫ２（第８図）

26Ｃ区に位置する。82×88cmのほぼ円形なプランで、深さは30cmを測る。壙内より縄文後期土器片・礫が出土している。

ＳＫ３（第12図））

23Ｃ区に位置する。90×82cmの楕円形プランを呈す。深さは85cmを測り、断面は鍋底状を呈す。壙内にはほぼ土壙が埋まる大きさの大石が入っており、周囲には小礫が土壙との隙間を埋めるようにぎっしりと入っていた。

なお小礫に珠洲系陶器片が混入しており中世期の遺構と考えた。

ＳＫ４（第11・13図））

水田の段差によって切られ、また平安期土壙ＳＫ５によって一部切られている。一辺580cmを測る。住居址とも考えたが、床面が軟弱であること、プランが不定形であること等により住壙址以外の遺構であろうと予測している。覆土および底面より多くの弥生中期土器片が出土している。完成品が少ないが、これは水田造成時に破壊されたものと思われる。むしろ水田区画の端にあったためかろうじて残存したと解釈した方が妥当であろう。

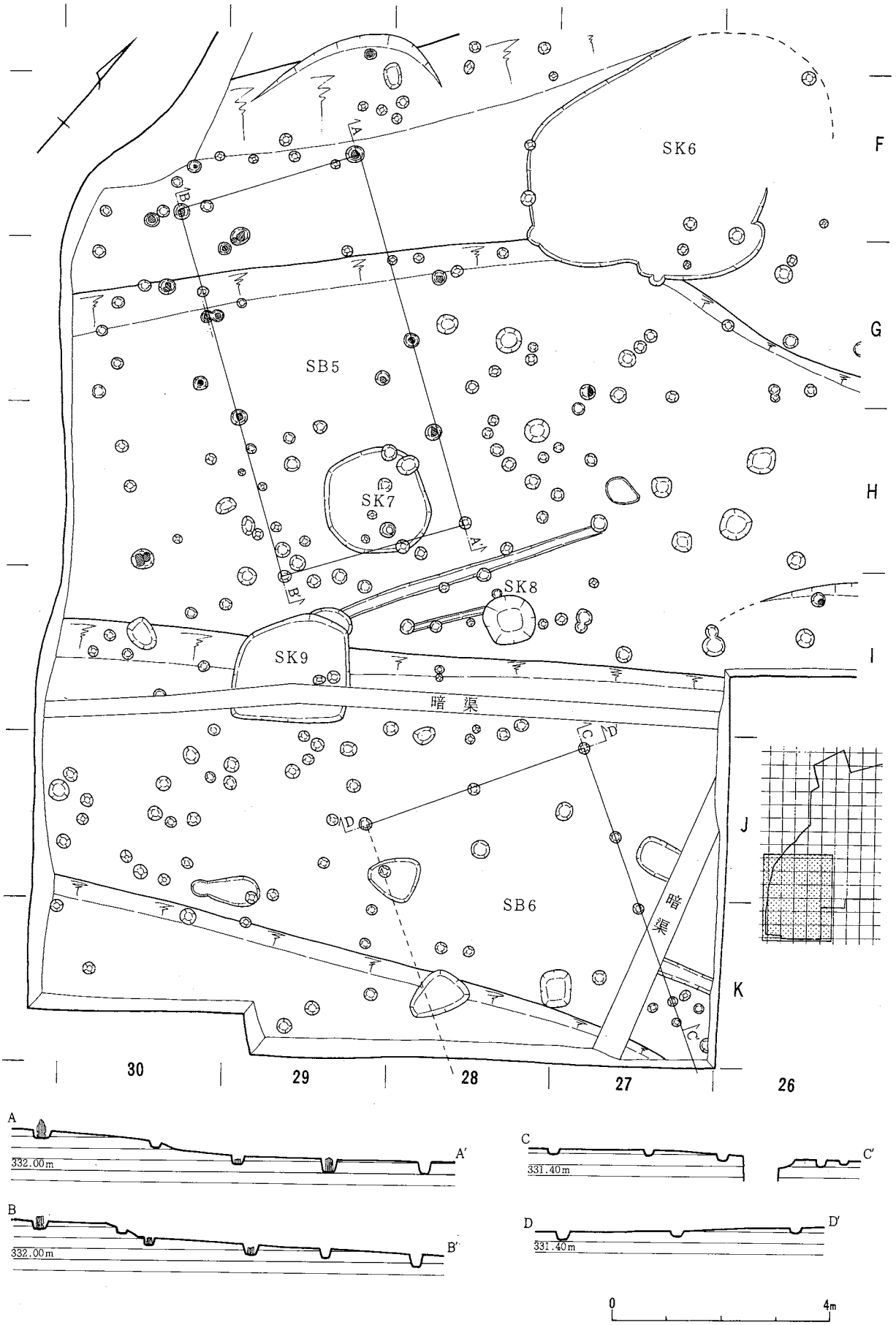
（遺物は、多くがそのまま潰された状態で出土している。）

ＳＫ５（11・13図）

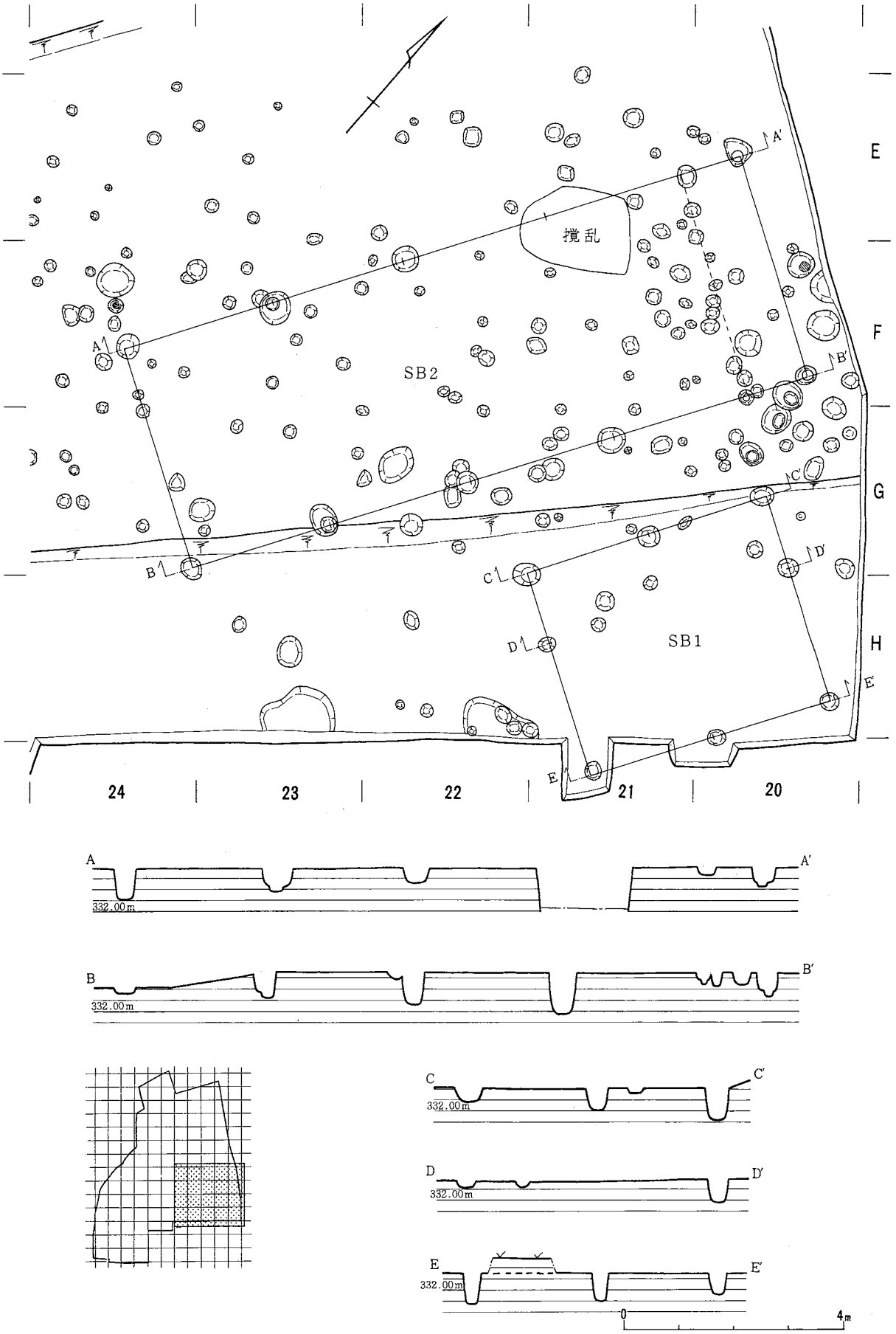
24・25Ｄ区に位置し、ＳＫ４を切る。198×180cmの不定形な隅丸方形プランを呈す。断面はすり鉢状を呈し、扁平な大石は地山面に入っている。壙内には人頭大の礫から小礫まで多く含まれているが、比較的遺存率の高い椀を中心に遺物が出土している。平安期。

ＳＫ６（祭祀遺構）（第14図）

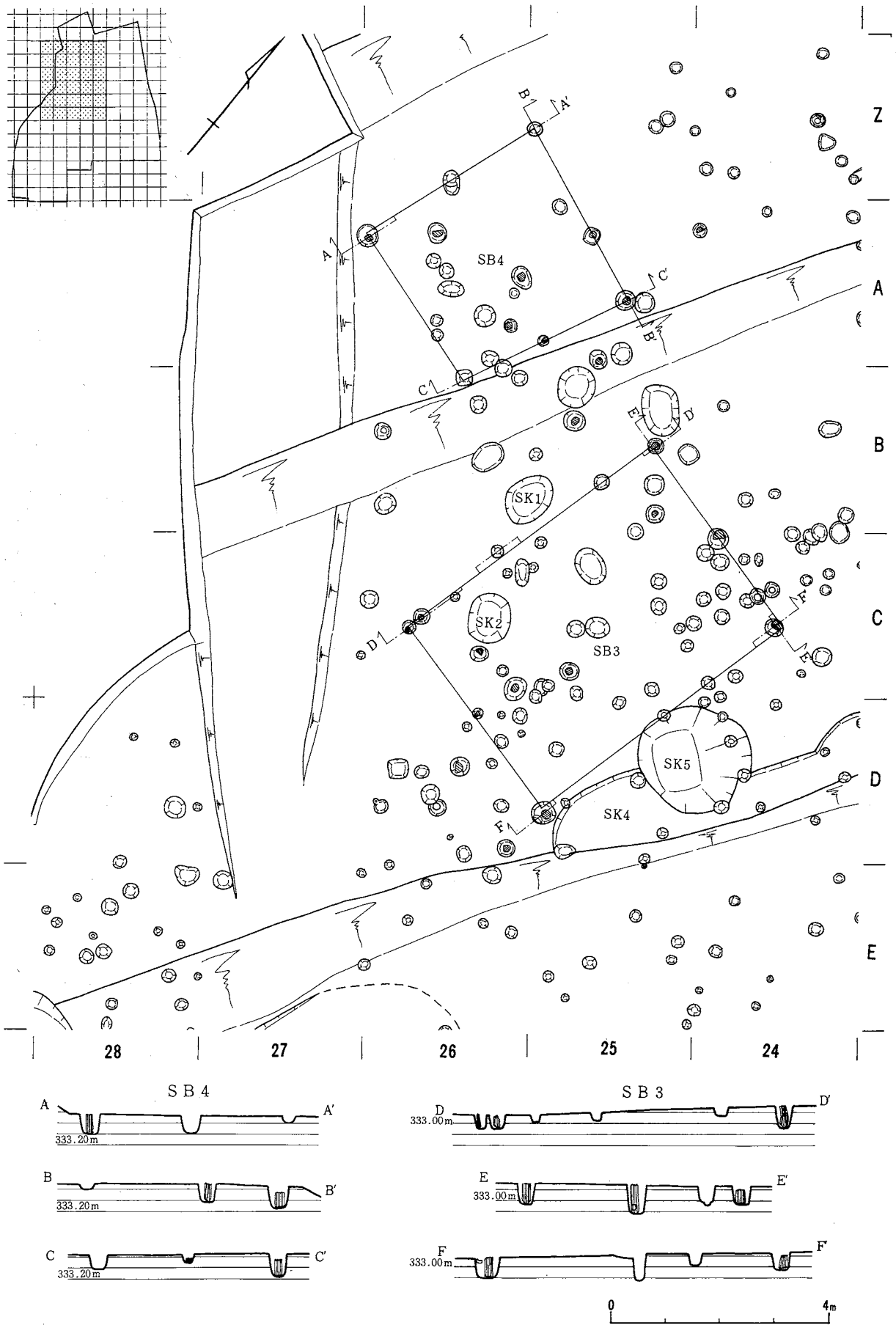
26～28Ｆ・Ｄ区に位置する。水田区画の端部にかろうじて残っていたもので、西側は比高差2mで上位水田、南東側は比高差１ｍで下位水田となっていた。プランは500×400cmの楕円形プランを呈するものと思われる。西側は直線的な形態を示し、および南側は比較的立ち上がりが明確である。東・北側は削平されたためかプランは明確でな



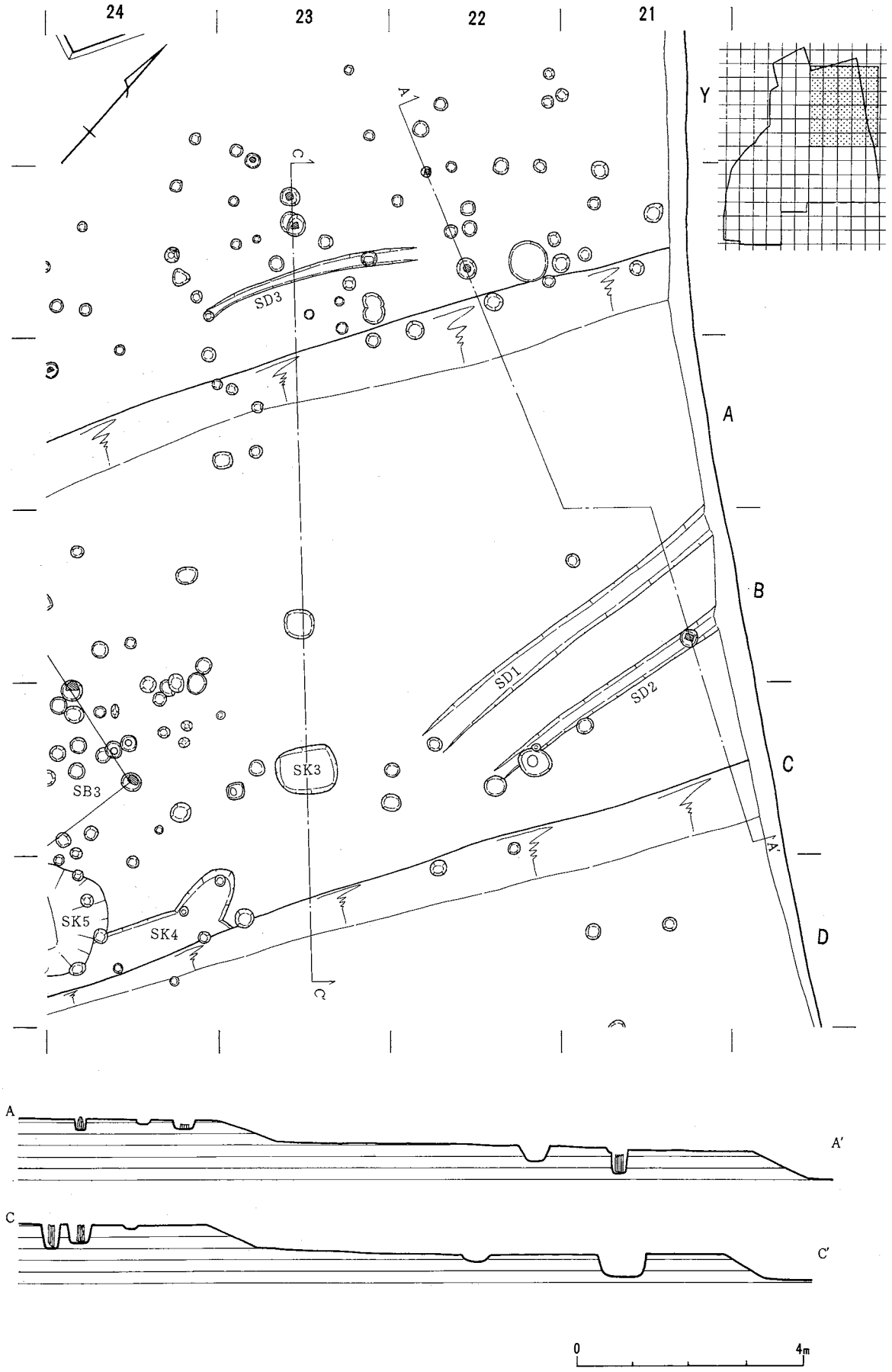
第９図　遺構実測図１　（１：100）



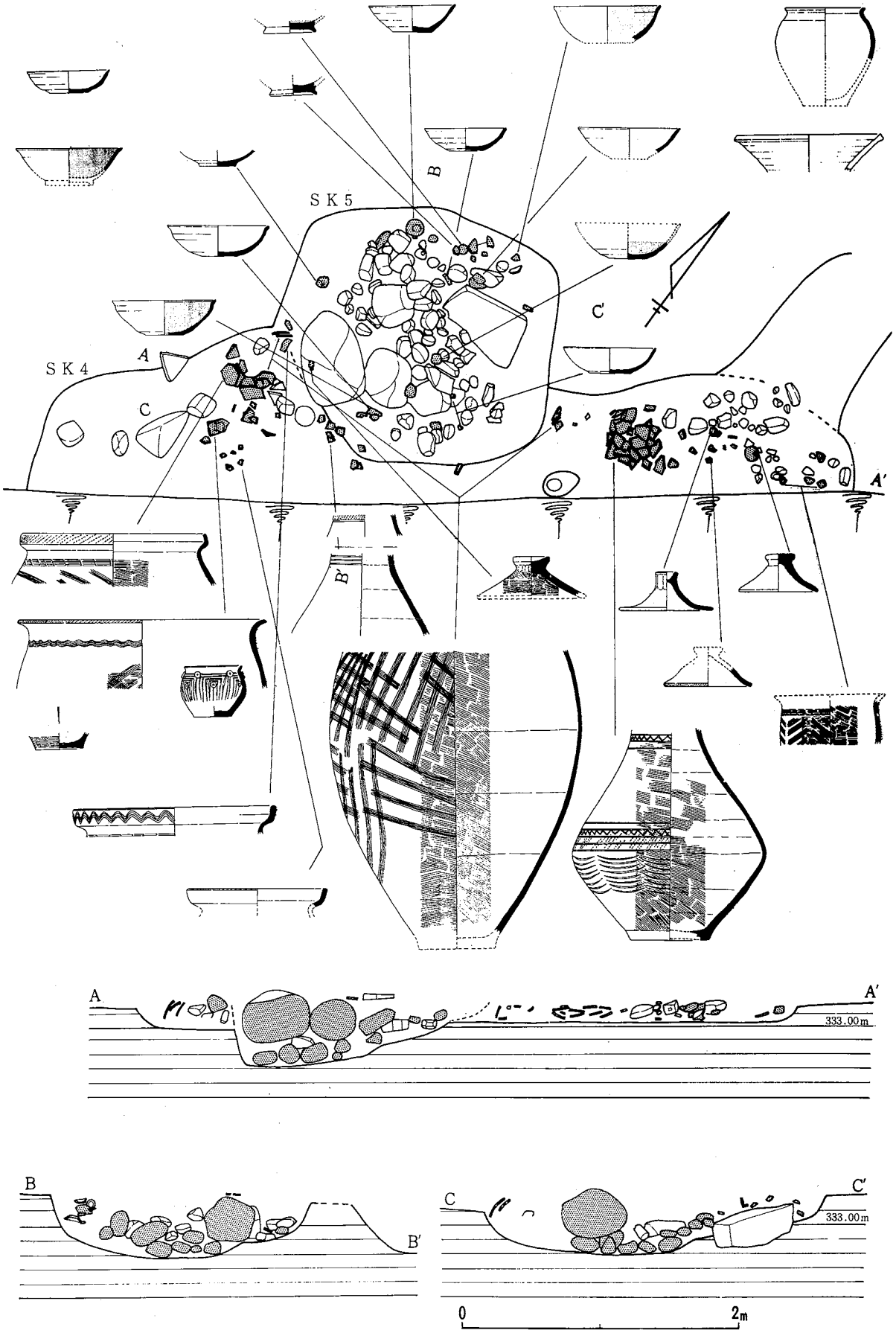
第10図　遺構実測図２　（１：100）



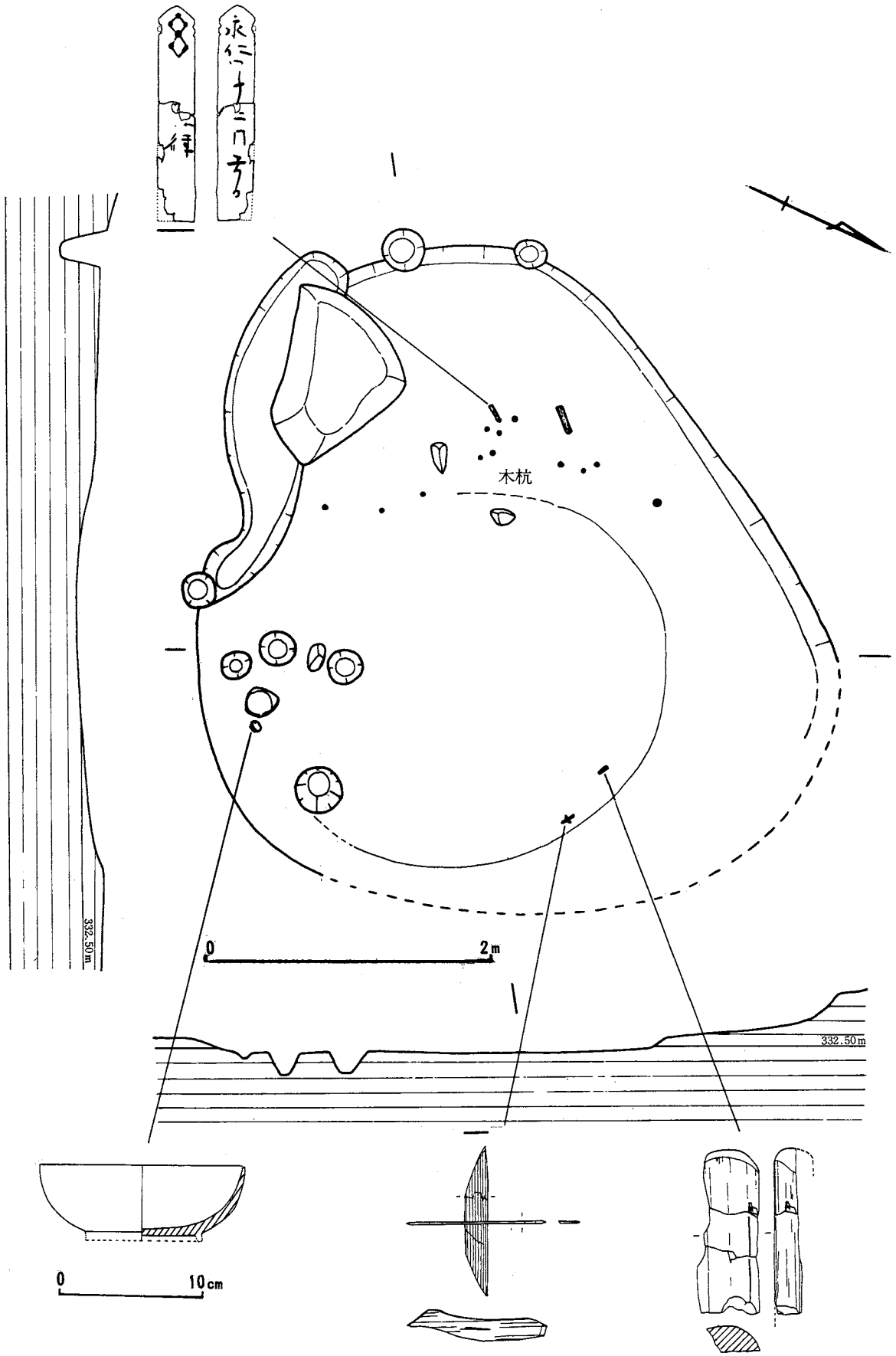
第11図　遺構実測図３　（１：100）



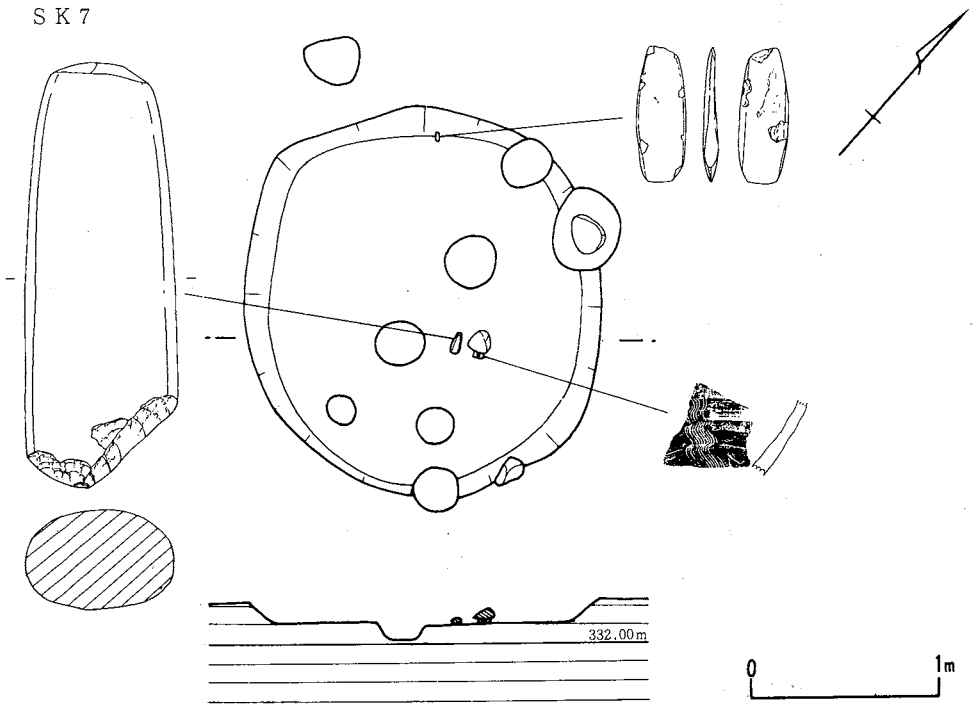
第12図　遺構実測図４　（１：100）

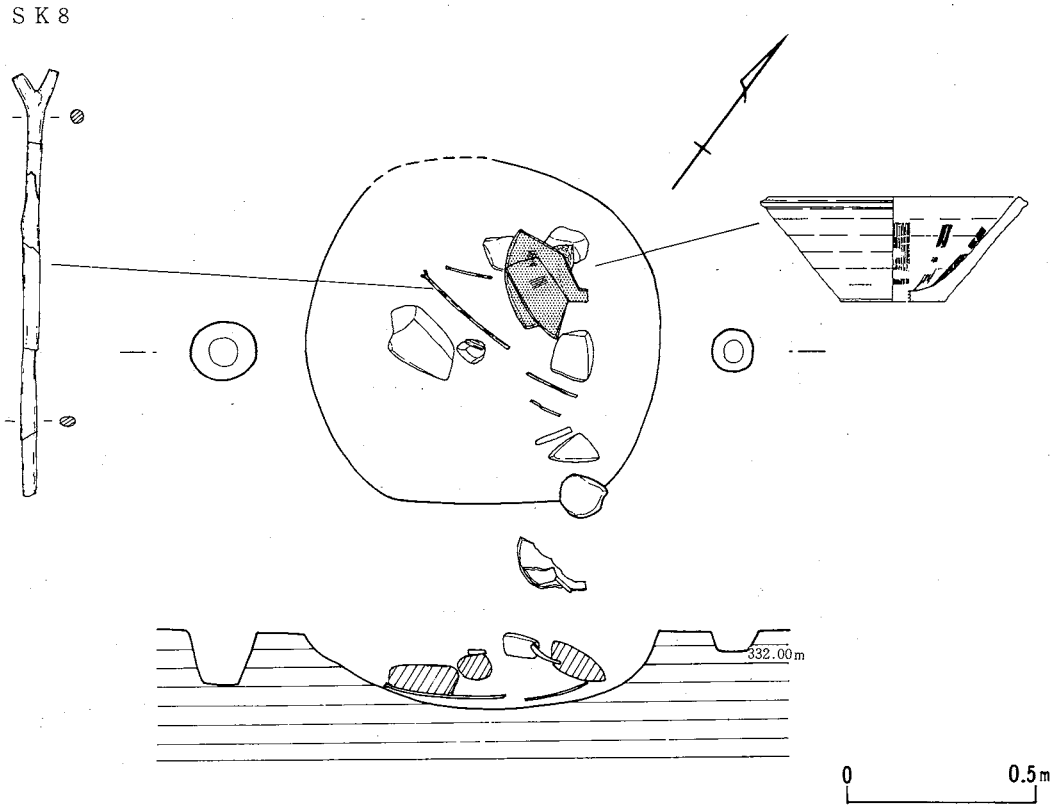


第13図　ＳＫ４・５遺構　遺物分布図（１：40）



第14図　ＳＫ６（祭祀遺構）遺物分布図　（１：40）





第15図　ＳＫ７・８ 遺構・遺物分布図　（１：40）・（１：20）

い。なお、南側の大石は地山面に入っており、搬入されたものではない。柱穴は７ヶ所認められるものの、不規則な配列である。遺物は南側に呪符木簡が頭部を擴内に向けてほぼ水平に出土。木簡上位の面は「永仁４年□月□日」である。木簡の擴内側（東）は杭が12本以上擴底に打ち込まれている。東壁側には鳥形および製品名不明の木製品が擴底に接して出土。南側には幼児頭大の扁平な礫に接して漆椀が出土している。また、梅と思われる種子が擴内全域から出土している。擴底は軟弱である。

ＳＫ７（第15図）

28・29Ｈ区に位置する。200×190cmのほぼ円形なプランを呈す。深さは約15cmで擴底は平担である。

出土遺物は覆土より縄文後期土器・小形磨製石斧が、擴底より太型蛤刃石斧・珠洲系陶器が擴底より出土したため中世以降と考えておきたい。

ＳＫ８（第15図）

28Ｉ区に位置する。188×180cmの円形プランを呈し、深さ45cmを測る。断面はすり鉢状を呈す。擴底には薄く砂が敷いてあった。

遺物は上位より珠洲系陶器のすり鉢が、擴底より木製品が少量出土した。

ＳＫ９（第９図）

29Ｉ区に位置する。104×90cmの不正方形を呈す。一部暗渠によって破壊されているが深さ約35cmを測る。擴底にはピットが２ヶ所近接して堀り込まれているが、中より柱状の木片がわずかに出土した。

遺物は木片の他珠洲系陶器片が出土している。

第３節　その他の遺構

掘立柱建物・土擴の他、溝状遺構などが検出されている。また他にも多くの遺構があるが整理されていないのでここでは省略する。

ＳＤ１（第12図）

22・21Ｂ・Ｃ区に位置する。幅約48cm、深さ25cmで、長さは調査区外へ延びているため不明であるが６ｍ確認している。

本遺構より元祐通寶が１枚出土している。

ＳＤ２（第12図）

22・21Ｂ・Ｃ区にあり、ＳＤ１の東側90cmにほぼ平行して延びる。深さは５～15cmである。底面および壁を切って４ヶ所のピットが認められる。このうち擴中央のＰ27内より芯持ちの丸太材が出土している。

その他の遺物では青磁碗片（第23図４）が出土している。

ＳＤ３（第12図）

23・24Ｚ区にあり、長さ3.8ｍまで確認できる。幅20cm、深さ８cmで、ピットが２ヶ所堀り込まれている。

付近より弥生中期土器破片が出土している。

第Ⅳ章　遺　　物

はじめに

調査によって出土した遺物には、縄文時代・弥生時代・平安時代・中世の各期に属する遺物が出土した。量的に最も多いのは縄文式土器であるが、遺構等は破壊されて大部分は不明となっており旧谷状地と思われる黒色土の包含層よりまとまって出土したものが中心である。弥生時代に属する遺物もＳＫ４以外は旧谷状地の出土であり、遺構はほとんど削滅している。平安時代遺物も同様で、ＳＫ５以外は谷状地の出土。

中世の遺物は比較的遺構に伴っており、生活址の中心部分よりの出土と思われる。

以下に各時代毎にその概要を説明する。

第１節　縄文時代

遺物収納箱で10箱程度出土した。本稿では時間的制約から未整理となっており、一部の土器・石器について説明しておきたい。（第16～19図)。

１．土　　器（第16・17図）

(1)　称名寺様式（第16図１～20）

本遺跡から得られた称名寺様式に比定される土器群はいずれも小破片であり、その文様モチーフの全体を知ることのできるものはない。

口縁部が波状口縁を呈し、微隆起文と円形の列点文に画された枠状の口縁部文様帯を持ち、その下部より「Ｊ」字状文の反転により、「Ｊ」字状文内に縄文が施文される類が多い。

１は、口縁部から胴部に至る部分で、波状口縁を呈し、胴部がくびれ下半が張る深鉢形の器形となるものと思われる。口縁部は無文帯となり、その下に微隆起文に画された列点文が配される。さらにその下位は「Ｊ」字状文の反転により「Ｊ」字状文内に縄文が施文される。

２、３は１と同一個体と思われ、口縁部が無文帯＋微隆起文に画された円形列点文で、その下位には沈線によって画された縄文施文が行われている。本個体は胎土・焼成ともに良好・堅緻である。

４～６・８・９は同一個体と考えられ、１～３と同様な文様モチーフを構成すると思われる。

10～20は胴部破片で、称名寺様式独特の様々な文様モチーフが施文される。

(2)　三十稲葉様式（第16図21～33・第17図34～36）

新潟県長岡市関原町三十稲葉遺跡出土土器を標式としている。

本遺跡出土例は、各種刺突文が施文される。21は口縁部で無文帯の下位に瓜形文が施される。22は小橋状把手を付し口頸部は無文である。その下位には花弁状の刺突文が配される。23は頸部に隆帯をめぐらし刻目が施される。24は同様に頸部に隆帯をめぐらし列点が施される。25～33は各種瓜形文が施される胴部破片である。

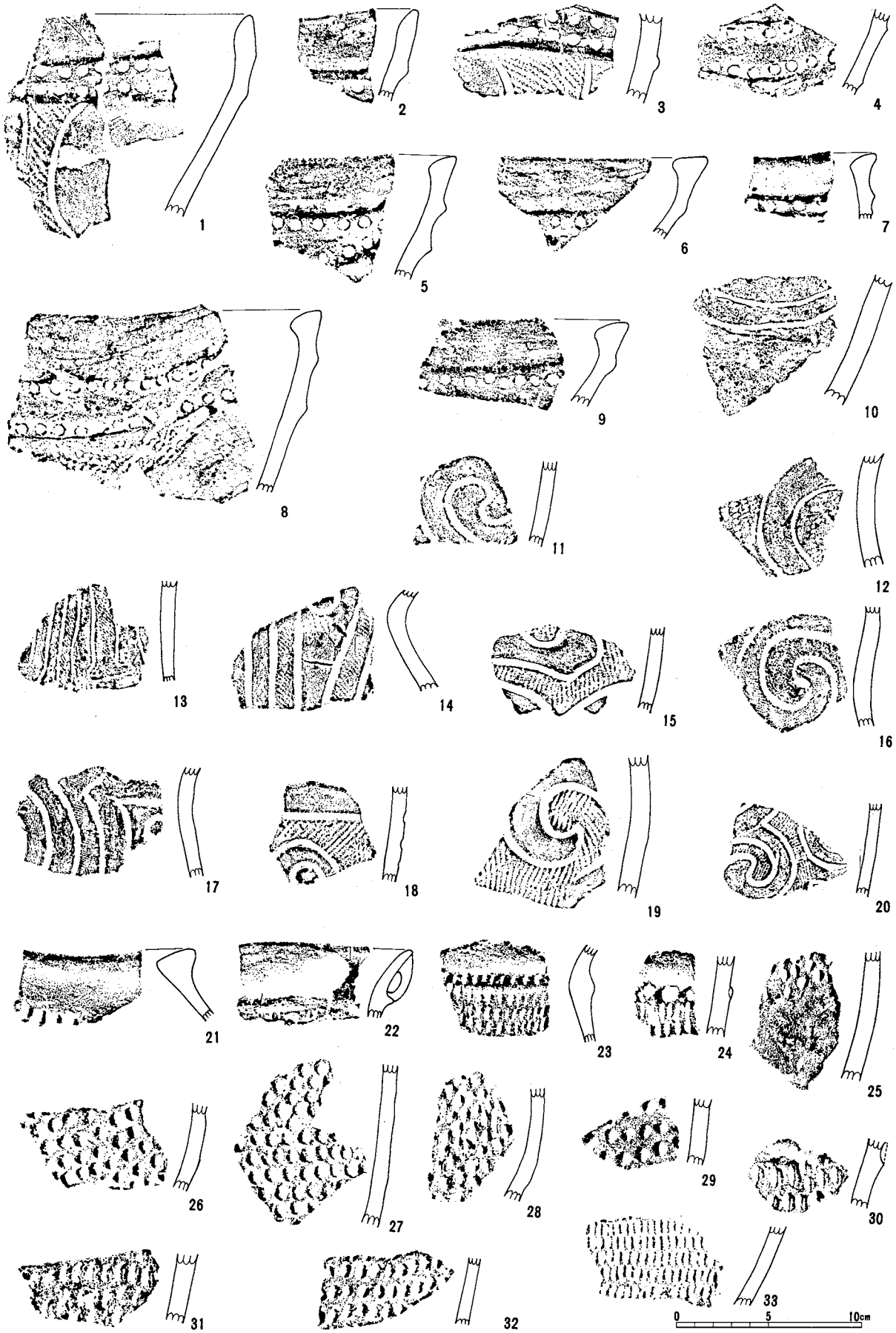
第17図34～36は胴部に曲線の条痕文を施す例で、後期中葉の三仏生様式に入る可能性もある。胎土焼成は悪い。

(3)　堀ノ内様式（第17図37～40）

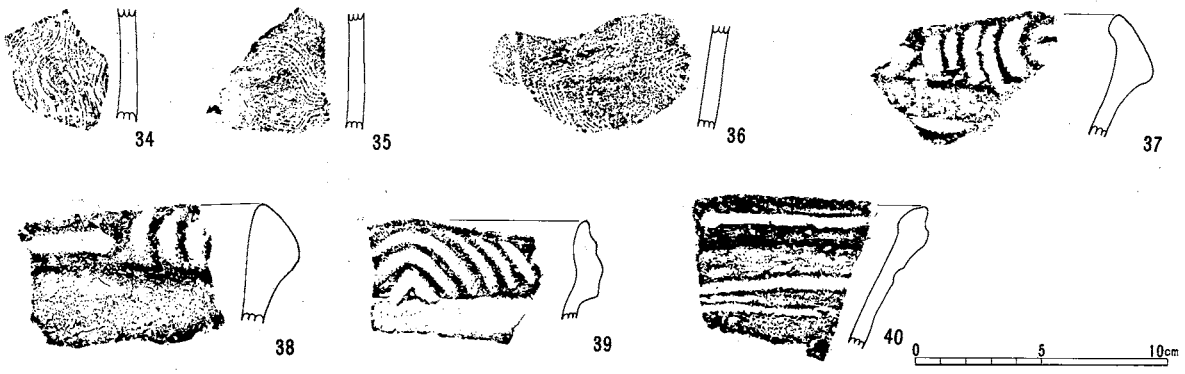
数量的には多く出土している。

いずれも口縁部分で、「八字状」「Ｃ字状」の文様を施す例(37～39)で、焼成は悪い。40は太い沈線で口縁部文様帯を構成している。

本調査によって得られた資料は、数量的にも多く北信濃北半地域における後期初頭～前葉における良好な資料を提供している。本報告では時間的制約から一部を公表したにすぎなく、今後さらに整理を行い報告したいと考えて



第16図　縄文土器拓影図１　（１：３）



第17図　縄文土器拓影図２　（１：３）

いる。

２．石　　器（第18・19図　図版十四・十五）

調査によって検出された石器は、打製石斧・磨製石斧・石皿・砥石等であり種類は比較的少ない。また本稿では便宜上縄文時代の項へ一括して報告するが、すべて当該時期に属するものでなく、弥生時代以降に属する石器も存在している。これは遺構外遺物が後世の構築あるいは田直しなどによって各時期が混在して出土したため、明確に所属時期を決定し得ないという理由にもよる。

(1)　打製石斧（第18図）

多くは安山岩系の剥片を素材として作出している。１は分胴形に似た形態を示し、第１次剥離面も丁寧に二次加工を施している。２・３は縦長剥片にほとんど二次加工を施さず、刃部を簡単に作出して仕上げている。４～７は刃部の部分が半磨製になっている。使用によるものと思われる。５が弥生時代の遺構（ＳＫ４）より出土しているので、この類は弥生時代の所産と考えて良いのかもしれない。９～11は小形品であるが、打製石斧の範囲に入るものと思われる。形態からすれば縄文時代の所産と考えられる。

(2)　打製石器（第19図12～14）

剥片が多く出土しているが、特徴的なもののみ３点図示した。12は刃器状の剥片であるが、先土器時代の石器とは考えにくい。13は横長の剥片で鋭利な刃部を持つ。14は縦長剥片である。これらの不定形な剥片石器は飯山地方においては弥生中期の遺跡より出土することが多い。これは、縄文的石器製作技術のシステムが崩れ、画一的な石器製作が行われなくなった現象として理解したい。

(3)　磨製石斧（第19図15～19）

15は弥生中期の太型蛤刃石斧で、ＳＫ７の壙底より珠洲系陶器片とともに出土したものである。中世に至って別な用途として再利用されたのであろうか。刃部が破損している。16は28Ｈ区出土で、太型蛤刃石斧の胴部である。17は29Ｈ区出土。18は長さ4.3cmの小形扁平片刃石斧である。小さいながら実に精巧にできており、研磨もゆきとどいている。弥生中期の所産であろう。27Ｈ区出土。19はＳＫ７上層よりの出土である。一部に剥落部分があるものの丁寧な作りである。現存長７cm。縄文後期の所産であろう。

(4)　くぼみ石（第19図20）

たまご形の一面に浅い凹を有するもので、くぼみ石としてよいのか躊躇する。

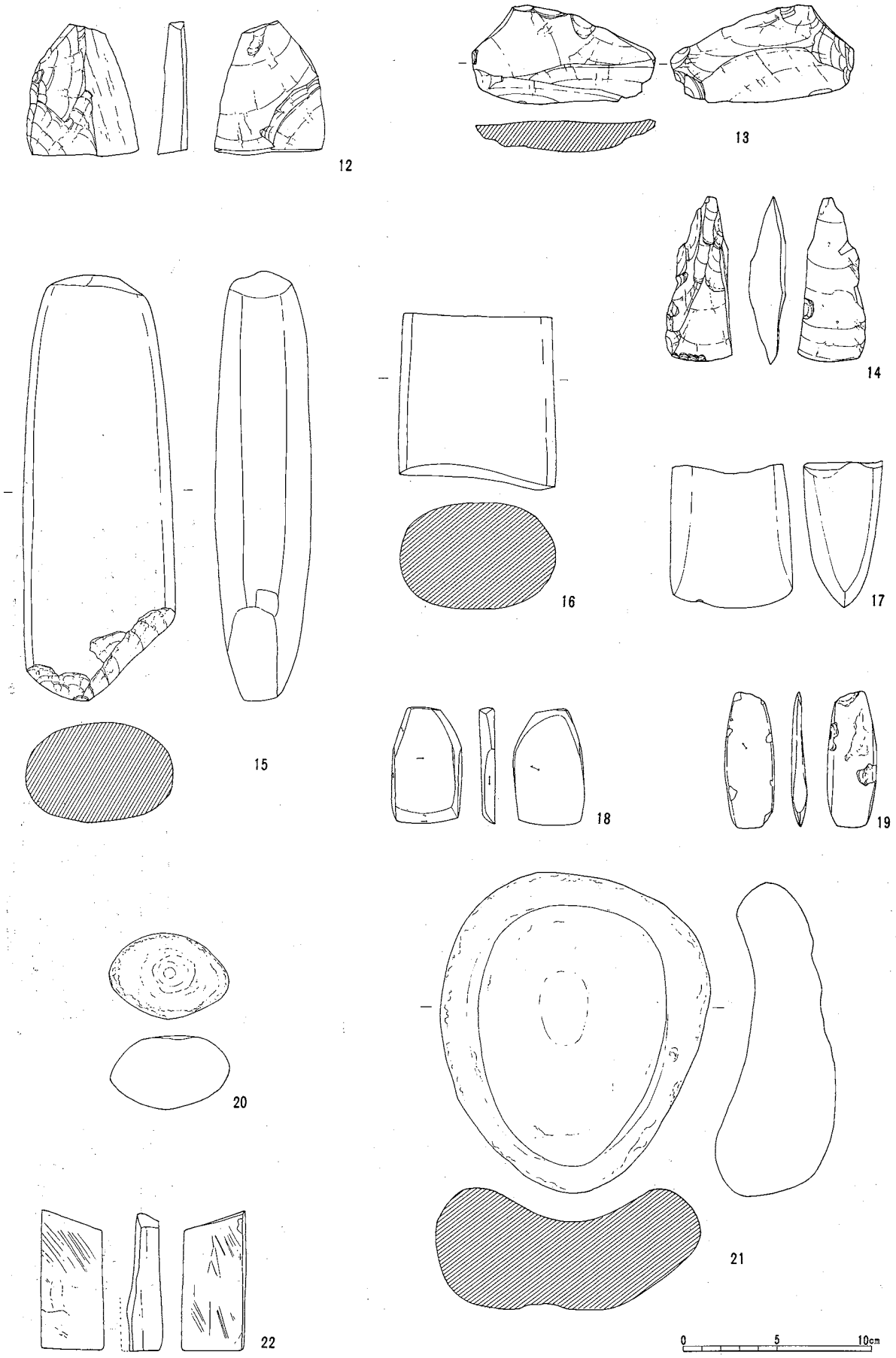
(5)　石皿（第19図21）

Ｐ25区内の出土で柱のおさえとして転用されたものと考えられる。裏面にも若干のくぼみが数ヶ所あり、石皿・蜂の巣石の二用途に用いられたものであろう。縄文期。

(6)　砥石（第19図22）

表裏面に線条痕が認められる。仕上砥であろう。平安時代以降と思われる。

第18図　石器実測図１　（１：３）



第19図　石器実測図２　（１：３）

第２節　弥生時代

１．土　器（第20・21図、図版十五・十六）

弥生土器は、ＳＫ４からまとまって出土したほかに、調査地区内含層（黒色土層）より小破片が少量（コンテナ１箱）出土している。

(1)　ＳＫ４出土弥生土器（第20図）

ＳＫ４は弥生時代の土器だまりで、平安時代の土壙ＳＫ５に切られているが、ＳＫ５から出土した弥生土器（11・16）もここに含めておいた。また、ＳＫ５の底から石鏃が１点出土しているが、土器洗浄の段階で粉失している。

ＳＫ４出土弥生土器は、図化できるものはすべて図化し、図示した。

壺（１～３）　１は口縁部をのぞいてほぼ定形である。下ぶくれの胴部から長く立ちあがる頸部をもつ。頸部にヘラ描直線文を数条（残っているのは３条）めぐらせ、その間に鋸歯文を入れる。胴部中央には縄文を施した後に直線文を５条めぐらせ、上から２段目に鋸歯文を入れる。胴部中央下半には孤状文を８～９本重ねたものを12単位めぐらす。調整は円外面ともにハケ。灰白色を呈し、胎土は砂を含まない。胴中央の相対する２ヶ所に黒斑がある。現存高30.0cm。

２・３は頸部片で、いずれもヘラ描直線文をめぐらし、３は縄文を施す。２・３ともに内外面とも磨滅がはげしく調整不明。２は灰白色を呈し、黒斑があり、胎土に砂を多く含む。３は淡褐色を呈し、

ミニチュア甕（４）　ミニチュア甕４は完形品でＳＫ４府面より出土した。胴部下半に１ヶ所故意に穴をあけたと思われる（Killing）所がある。胴部に「コ」の字重ね文を６単位めぐらし、その間に円形浮文を配する。「コ」の字重ね文は几帳面でなくかなり雑に描かれている。調整は内外面ともにナデ。暗灰色を呈し、胎土に砂を含む。口径8.2cm、高さ7.2cm。

甕（５～10・15・16）　甕は口縁部の形態から、単純に外反するもの（５）と、屈曲して受け口状をなすもの(6・８・９）とがある。屈曲して受け口状をなすものは壺の口縁部とも考えたが、文様・口経・および６と７が同一個体かもしれないという点から甕としておいた。

５は大型の甕で、口縁端面に縄文をめぐらし、頸部に櫛描波状文をめぐらす。内外面とも磨滅がはげしい。外面はハケ、明るい淡橙色を呈し、胎土に砂を多量に含む。口径35.6cm。

６も大型の甕の口縁部で、７と同一個体の可能性がある。口縁外面に縄文を施し、頸部に櫛描簾状文をめぐらし胴部に櫛描平行線文を斜位に施す。調整は、内面はハケ、外面は不明。淡褐色を呈し、胎土に砂を多量に含む。口径26.2cm。

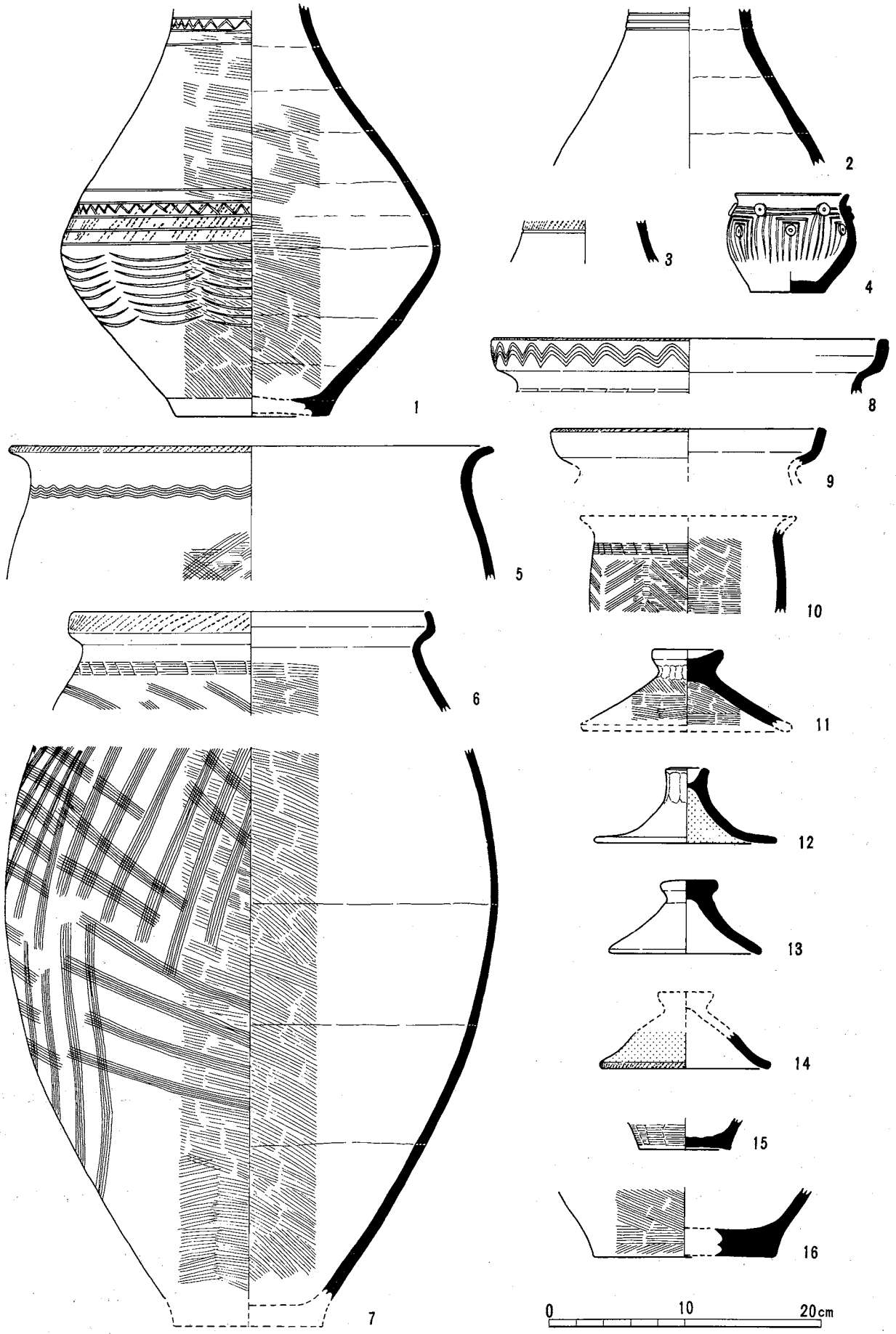
７は大型の甕胴部で、約1/4周が残っている。胴部外面に櫛描平行線文を斜格子状に施す。調整は内外面ともハケ。淡褐色を呈し、胎土に砂を多量に含む。現存高40.0cm。

８・９は受け口状の口縁部をもつもので、ともに口縁端面に縄文をめぐらす。８は口縁部外面に櫛描波状文をめぐらし、頸部に櫛描簾状文を施す。調整は内外面とも横ナデ。茶褐色を呈し、胎土に砂を含む。口径29.0cm。９は調整は円外面とも横ナデ。淡褐色を呈し、胎土に砂を多量に含む。口径20.0cm。

10は小型の甕で、頸部に櫛描簾状文を施し、胴部に櫛描平行線文を交互の斜位でめぐらす。調整は内外面ともにハケ。淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。

15・16は甕の底部で、いずれも調整は、外面はハケ、内面は不明。淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。

蓋（11～14）　蓋は４点あり、11・13はほぼ完形品で、12は残20%、14は口縁部小片である。調整は、11が内外面ともハケ、12はナデあるいはミガキ、13は磨滅がはげしく不明、14はナデあるいはミガキ。いずれも淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。



第20図　ＳＫ４出土弥生式土器　（１：４）

なお、12の内面と、14の外面は赤彩の痕跡がある。また14は口縁端面に縄文をめぐらす。

(2) 包含層出土弥生土器（第21図）

包含層からは、主として調査区南部の黒色土層が厚い所から散在的に出土している。小破片が多いが、断面等の磨滅の著しいものはない。

壺（17～21・37・38）　図示した17～21はいずれも頸部片だが、他に、胴部片で縄文を地文としてその上にヘラ描直線文や孤状文・波状文をめぐらせたものも出土している。

17・18はいずれも頸部に縄文を地文としてその上にヘラ描直線文をめぐらしている。調整は、17は内外面ともにナデで、18は外面にハケを施す。17は淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。18は灰白色を呈し、胎土に砂を含む。

19・20は太いヘラ描直線文をめぐらすもので、19はその間にヘラ刺突文を配する。20は縄文を地文とする。いずれも淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。

21は赤彩の壺で、外面をていねいにミガいている。淡褐色を呈し、胎土に砂を多く含む。

甕（22～29・32～36）　甕は図示したものの他に、胴部外面に櫛描平行線文を斜格子状に施したものなどの破片がある。

甕は口縁部の形態から、単純に外反するもの（22～27）と、屈曲して受け口状になるもの（29）があり、前者はさらに外反するもの（22～26）と、やや内湾するもの（27）がある。

文様は、27をのぞいて他はすべて口縁端面に縄文をめぐらす。口縁部が屈曲して受け口状をなす29は、外面に縄文を地文とし、その上にヘラ描山形重ね文をめぐらす。頸部には、櫛描波状文をめぐらすもの（22）、櫛描簾状文をめぐらすもの（25）と、無文のもの（23・24・26・27）がある。胴部は不連続な櫛描波状文（中部高地型波状文）を施すもの（25）と、「コ」の字重ね文を施すもの（27・28）がある。

調整は、ナデおよびハケで、口縁部は内外面とも横ナデするものが多い。

底部は赤彩のないものを一応甕としておいた（32～36）。

色調は淡褐色～茶褐色を呈し、胎土は砂を含む。

蓋（30・31）　30は薄手で、つまみ中央がへこむ蓋で、調整は内外面ともにハケ、淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。口径13.2cm。

31は、内外面ともにていねいなミガキを施された蓋で、暗灰色を呈し、胎土に砂を含む。口径14.2cm。

なお、蓋のつまみは、図示してないものを含めて、中央がへこむものがほとんどである。

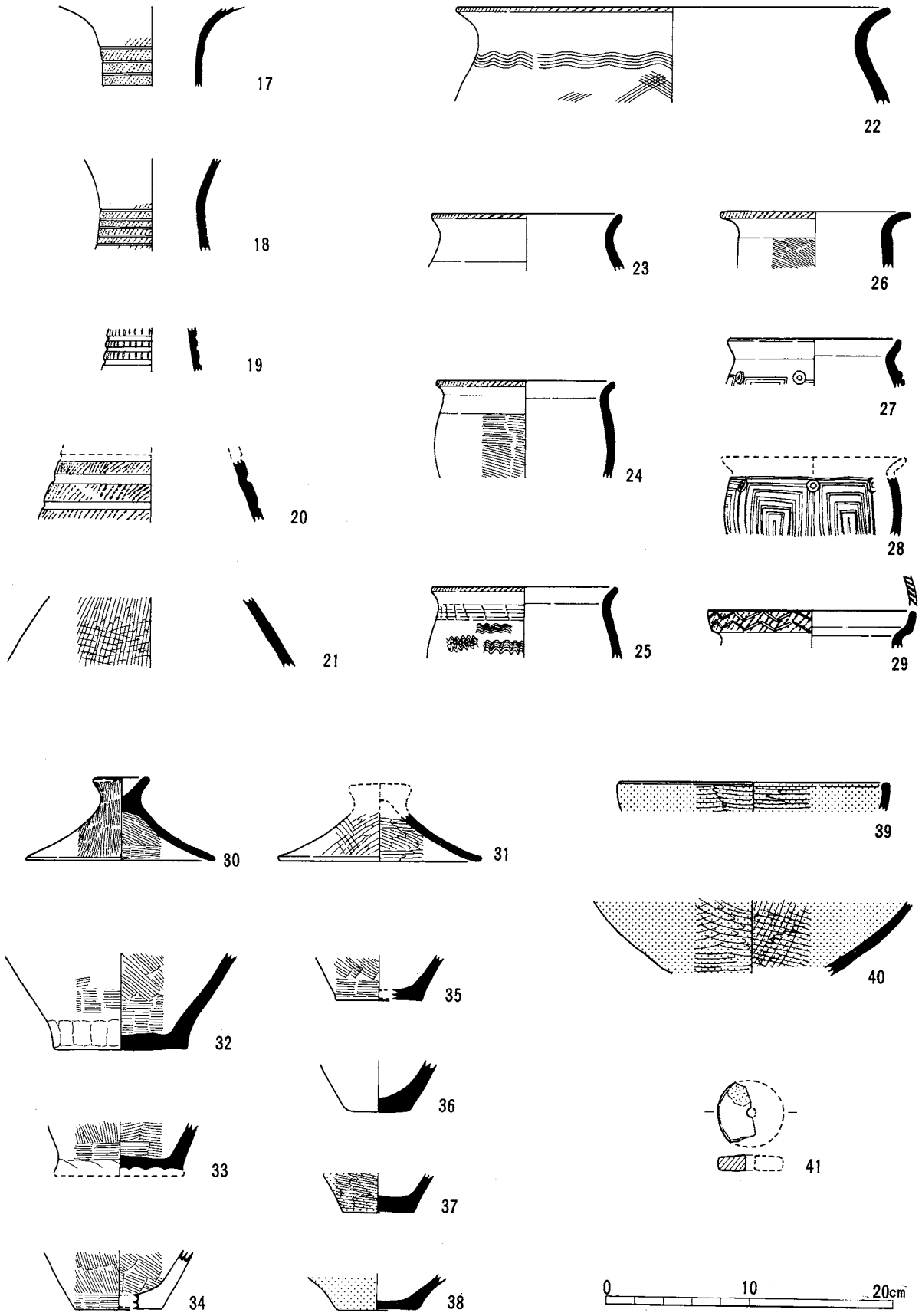
鉢・高杯（39・40）　出土したもので鉢か高杯か明瞭にわかる破片はない。39は口縁部小片、40は体部片である。両者ともに、内外面ともていねいなミガキが施され、赤色塗彩されている。39・40ともに淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。

紡錘車（41）　弥生時代のものとは確定できないが、一応ここに載せておいた。41の１点のみである。円形・扁平の形態のもので、淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。推定直径4.5cm。

２．小　　括　――出土土器の年代――

(1) 千曲川流域および飯山地方の弥生土器編年の概要

松本平を含む千曲川流域の弥生時代中期から後期の土器編年は、笹沢浩氏によって、新諏訪町Ⅲ（荒山）→栗林Ⅰ→栗林Ⅱ→百瀬→吉田→箱清水→御屋敷の編年案が示されている。(注1)（表２参照）。また飯山地方の弥生時代の土器編年も、笹沢編年に基づいて、高橋桂・大田文雄両氏によって、小境→鍛冶田Ｄ地点→鍛冶田Ｃ地点→田草川尻Ⅰ→田草川尻Ⅱの編年案が示されている。(注2) そして両編年の対応は表２に示したとおりであるが、両編年は年代的流れにおいて概ね対応しているものの、極めて画一性の強い箱清水式と田草川尻Ⅱ式がよく対応するのをのぞけば、他はたとえば栗林Ⅱ式土器がイコール鍛冶田Ｄ地点の土器ではなく、両者の間には形態的・技法的（文様）な面などに



第21図　包含層出土弥生式土器　（1：4）

おいて細かな違いがあり、若干の地域差・年代差があることを笹沢・高橋・太田三氏ともに指摘されている。

今、この編年を大づかみにみてみると、中期後半は、中野市栗林遺跡出土土器を指標とする栗林式土器を編年の核とし、その特徴は①壺の形態が下ぶくれ長頸である、②壺におけるヘラないし棒状工具による沈線文（直線文・山形文・波状文・懸垂文など）の盛行、③文様帯の地文として、また口縁端部への縄文の施文、④口縁端部の指オサエの存在、⑤甕口縁部は短く外反し、体部最大径が上位にある、⑥「コ」字重ね文の存在、などがあげられる。

また、後期は、長野市箱清水遺跡出土土器を指標とする箱清水式土器を編年の核としており、その特徴は、①形態・技法とも画一化されていること、②壺は大きく朝顔状に開く口縁部をもち、頸部に櫛描T字文を施す、③高杯・鉢の盛行、④赤色塗彩の盛行、⑤甕における不連続な櫛描波状文（中部高地型櫛描波状文（中部高地型櫛描文）の盛行、などがあげられる。

そしてこの両型式を中期・後期の核としてそれ自体の細分や、両者の間のギャップをうめる形で、中間型式が設定されている。その中間型式は、栗林式のもつ要素（中期的要素）と箱清水式のもつ要素（後期的要素）の多寡によって前後が設定されている。

また、汎日本的な併行間係は、畿内・本海・天流川流域そして関東地方のそれぞれの型式との比較によって推定されている。

飯山地方の編年は、鍛冶田遺跡においてD地区遺物集中箇所の土器群を一括資料として捉え、C地区1号竪穴・2号竪穴の資料と比較・検討して先の編年観が推定され、田草川尻遺跡1・2号住居址出土土器と3号住居址出土土器がそれぞれ田草川尻ⅠとⅡに比定され、先の編年観が推定されている。(注3) そして両遺跡の中では鍛冶田D→鍛冶田Cへの移行はスムーズであり、田草川尻Ⅰ→Ⅱへの移行もスムーズであるが、鍛冶田Cから田草川尻Ⅰへの移行については若干のギャップがあるように思える。今後の資料の増加・研究をまちたい。

(2) 釜渕遺跡出土土器の年代

当遺跡SK4および包含層出弥生土器の特徴を列記すれば、①下ぶくれ長頸の壺の形態、②ヘラ描沈線文の盛行③地文・口縁端部への縄文の施文、④指オサエによる波状口縁が壺・甕ともにみられない、⑤「コ」字重ね文の存在、⑥甕口縁部が短く外反する、⑦中部高地型櫛描文の存在（1点）、⑧赤色塗彩の土器の存在があげられる。

以上の特徴のうち①～⑥は中期的要素であり、⑥・⑦は後期的要素であるが、後期的要素はごく少なく、また⑥・⑦ともに栗林Ⅱ式には出現している。④の指オサエは鍛冶田D地点には認められる。

以上の点から当遺跡出土弥生土器は、栗林Ⅱ式―鍛冶田D地点（中期後葉）の年代が与えられ、④の点で鍛冶田D地点よりやや新しい要素をもつ土器群といえる。

なお、当土器群は、栗林式にみられる懸垂文がないこと、ヘラ描沈線が概して細いことが指摘できる。懸垂文は栗林Ⅱ式に比定される鍛冶田D地点・北原遺跡(注4)でもみられない。地域的特色であろうか。

第２表　　飯山地方の弥生土器編年表

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">畿　　内</th><th>千曲川流域</th><th>飯山地方</th></tr>
<tr><td>前期</td><td colspan="2">第１様式新</td><td>（新諏訪町Ⅰ）</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="5">中期</td><td colspan="2">第２様式</td><td>（新諏訪町Ⅱ）</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">第３様式</td><td>古</td><td>新諏訪町Ⅲ（荒山）</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">新</td><td>栗林Ⅰ</td><td>小境</td></tr>
<tr><td>栗林Ⅱ</td><td>鍛冶田Ｄ地点</td></tr>
<tr><td colspan="2">第４様式</td><td>百瀬</td><td>鍛冶田Ｃ地点</td></tr>
<tr><td rowspan="4">後期</td><td colspan="2" rowspan="2">第５様式</td><td>吉田</td><td>田草川尻Ⅰ</td></tr>
<tr><td>箱清水</td><td>田草川尻Ⅱ</td></tr>
<tr><td colspan="2">―――？―――</td><td>御屋敷</td><td rowspan="2">＋
柳町</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

注１文献 134号23ページ表１　および注２文献より作成

注１　笹沢浩　1977「入門講座・弥生土器―中部高地１～３」『考古学ジャーナル』131･133･134

注２　飯山市教育委員会　1980『長野県飯山市旭町遺跡群―鍛冶田』

注３　飯山市教育委員会　1978『長野県飯山市田草川尻遺跡Ⅱ』

注４　飯山市教育委員会　1985『長野県飯山市旭町遺跡群―北原遺跡Ⅳ』

第３節　平安時代

１．土　　器

平安時代の土器は主にＳＫ５から出土し、他は包含層から少量が散在的に出土している。

(1)　ＳＫ５出土土器（第22図１～15、図版十七）

ＳＫ５からは土師器椀・甕、須恵器壺口縁部が出土している。

土師器椀（１～13）　椀は約30点程あるがすべてロクロ成形されるものである。内面が黒色処理される所謂黒色土器（１～４・12）と、そうでないもの（７～11・13）があり、黒色処理されないものが多い。

形態的には、高台をもつものは図示した２点（12・13）のみで、他はすべて高台をもたないものである。高台をもたないものは、底部をやや突出させるものを含んでいる。なお、１・５・６は口縁が正円をなさずいびつである。

また、体部が内湾し口縁部がやや外反するものが一般的であるが、体部が直線的に立ちあがるもの(７)もある。

法量は、口径14.4～15.0cm、高さ4.5～５cmの大形品（１～５・９）と、口径11.0～13.0cm、高さ3.0～4.0cmの小型品（６～８・10）があり、大型品は内面黒色処理されるものが目立つ。底径は大型が大きく小型品が小さいというわけではなく、全体として4.8～5.8cmである。

成形・調整手法は、底部はすべてロクロ糸切り技法をそのまま残し、ヘラケズリ等は加えられていない。黒色処理されるものはロクロナデの後、内面にヘラミガキを施す。黒色処理のなされないものも、内面にヘラミガキを施したもの（９・13）が若干ある。

高台は外にふんばる短いもので、ロクロ糸切りのあとに貼り付けられる。

色調は、明るい褐色を呈するものが多い。焼成は概して甘く、表面が磨滅しているものが多いが、陶器のように堅く焼きしまっているものも数点ある。胎土は、茶褐色の軟粒を含み、細砂を多く含んでいる。

土師器・甕（14）　１点のみ出土。短く屈曲する口縁部をもつ小型の甕で、ロクロ成形されている。茶褐色を呈し、胎土に茶軟粒および砂を含む。また、外面に多量の煤が付着している。口径11.2cm。

須恵器・壺（15）　１点のみ出土。広口壺の口縁部と推定される。頸部が直線的に立ちあがり、口縁端部を肥厚させ、端面をつくる。内外面ともロクロナデが施され、内面に灰色を呈し、胎土に砂を含む。

(2)　包含層出土土器（第22図16～25、図版十八）

土師器・須恵器・施釉陶器などがある。

土師器・椀（16～25）　包含層出土の土師器椀もすべてロクロ成形のものである。ＳＫ５出土器同様に、内面が黒色処理されるもの（16～19・21）と、黒色処理されないもの（20～25）があり、高台をもつものは少なく、底部はロクロ糸切り痕をそのまま残し、凝高台状を呈するものが多い。

ただ、ＳＫ５出土品に比べて口径・器高ともに小さい傾向があり、口縁が正円をなさないいびつなもの（23）や高い高台をもつもの（22）、体部が直線的に立ちあがる小型の杯状のもの（25）などやや後出的なものが見うけられる。

施釉陶器　いずれも小片のため図示してないが、尾北窯産の可能性がある緑釉陶器椀口縁片２片[注1]、猿投窯黒笹14～90号窯式の灰釉陶器椀１片、同瓶４片、東濃大原２号窯式の灰釉陶器椀２片が出土している。

２．小　　括　―出土土器の年代―

飯山地方の平安時代の土器編年　飯山地方の平安時代の土器の編年作業はまだ途についたばかりであり、良好な資料も少なく、わずかに望月・高橋の編年案が示されているにすぎない[注2]。

望月・高橋は、市内の北原遺跡、鍛冶田遺跡Ａ２号土壙墓・同Ｃ２号土壙墓、長者清水遺跡第１号住居跡の資料をもとに、主に土師器杯形土器の形態・底部調整技法と、共伴する灰釉陶器の年代観から次のように編年されている。

北原（９Ｃ後半～10Ｃ前半）→長者清水・鍛冶田Ａ（10Ｃ後半～11Ｃ代）→鍛冶田Ｃ（11Ｃ代以降）

北原遺跡では、土師器杯(注3)の体部が内湾するもの（Ａ・Ｂ類）が主体的であり、直線的なもの（Ｃ類）は極く少量である。内面黒色処理されるものと、されないものとがあり、黒色処理されるものが多い。底部はロクロ糸切りののち手持ちあるいはロクロヘラ削りが施されるものが主体的である。ロクロ糸切りの須恵器杯、須恵器甕・四耳壺が共伴し、須恵器杯は土師器杯と同程度の量がある。

長者清水遺跡第１号住居跡では、土師器杯の体部が内湾し、底部は手持ちヘラ削りされるものが若干あるものの、糸切り痕をそのまま残すものが主体的である。内面黒色処理されるものと、されないものとがあり、黒色処理されるものが多い。土師器甕・須恵器甕・東濃光ヶ丘Ｉ期および大原２号窯式の灰釉陶器が共伴する。

鍛冶田Ａ２号土壙墓では、土師器杯完形品４点が出土し、体部は内湾ぎみで、底部はロクロ糸切り痕をそのまま残すもののみである。内面黒色処理されるもの３点、されないもの１点である。

鍛冶田Ｃ２号土壙墓では、土師器杯完形品５点が出土し、体部は前３者に比べ直線的となり、底部はロクロ糸切り痕をそのまま残し、全体的な作りも粗雑となる。また、底部がやや突出し、凝高台状を呈すようになる。内面黒色処理されるもの２点、されないもの３点である。

土師器杯の法量は第３表に示したとおりであるが、新しくなるにつれて小さく扁平になる傾向があり、底径も小さくなる傾向がある。

ＳＫ５出土土器の年代　ＳＫ５出土土器の特徴は、①土師器椀はすべてロクロ成形のものである。②土師器椀の形態は、体部が内湾ぎみのものが主体的であるものの、作りが粗雑でいびつなものが多い。③土師器椀の底部調整は行われず、ロクロ糸切り痕をそのまま残すもののみである。④土師器椀の内面が黒色処理されるものと、されないものがあり、されないものの方が多い。⑤土師器椀の法量は（第３表参照）小型品でみると口径は長者清水第１号住居例とほぼ同じだが、器高において、鍛冶田Ｃ２号土壙墓例より小さく、扁平な感じがある。⑥高台をもつ土師器椀が２点ある。⑦須恵器壺を共伴する。⑧当遺跡調査地内でまんべんなく出土する珠洲系陶器を含まない。などの諸点があげられる。

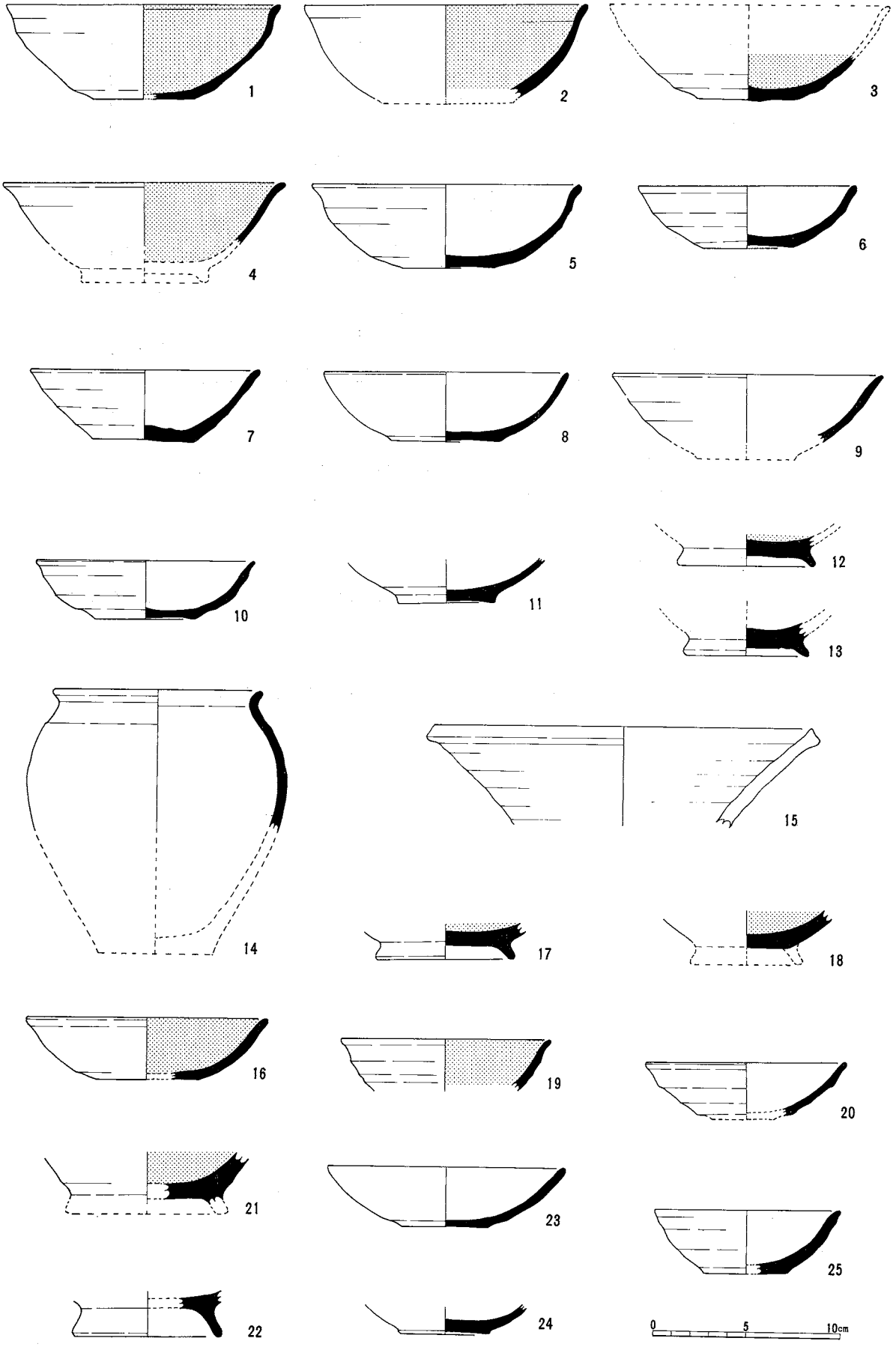
以上の諸点を先の編年観に対応すれば、鍛冶田Ａ２号土壙墓・同Ｃ２号土壙墓出土品の両者の特徴をそなえており、②・④・⑤の特徴はよりＣ２号土壙墓例に近い。従ってここでは一応ＳＫ５出土土器の年代を、鍛冶田Ｃ２号土壙墓併行期（11Ｃ代以降）としておく。

いずれにせよ飯山地方の平安期の土器編年は途についたばかりであり、良好な資料にまつところが大きい。

包含層出土土器の年代　包含層出土土器の中には東海産の施釉陶器が含まれており、尾北産と思われる緑釉陶器は10～11世紀代に比定されており(注4)、灰釉陶器は猿投窯黒笹14～90号窯式と東濃大原２号窯式に比定され、それぞれ10世紀前半、10世紀後半の年代観が与えられている(注5)。

土師器椀についてはＳＫ５出土器と比べると、口径・器高ともに小さく扁平なものが目立ち、また、底部が突出し、底径がいっそう小さくなっている。これらの点はＳＫ４より後出的要素と考えられるので、11世紀代後半以降12世紀に入る可能性も指摘しておく。

従って包含層出土土器は、10・11世紀代を中心とし、一部12世紀にかかる可能性もあると考えている。



第22図　平安時代の土器　1～15：ＳＫ５，16～25：包含層（１：３）白ヌキは須恵器

第３表　飯山地方平安時代土師器杯　法量比較表

遺跡		口径	器高	底径
北原	A類	15.0 以上	5.0 以上	5.0 ～ 6.8 cm
	B類	12.0 ～ 13.5	3.0 ～ 4.5	
	C類	13.3	3.3	
長者清水第１号住居跡	大	14.3		5.3 ～ 6.0
	小	11.7 ～ 13.0	4.1 ～ 5.1	
鍛冶田Ａ２号土壙墓		12.5 ～ 13.5	3.8 ～ 4.5	5.2 ～ 5.8
鍛冶田Ｃ２号土壙墓		12.5 ～ 13.0	3.5 ～ 4.0	4.5 ～ 5.0
釜渕ＳＫ５	大	14.4 ～ 15.0	4.4 ～ 5.2	4.8 ～ 5.8
	小	11.6 ～ 13.0	3.1 ～ 3.9	

注１　緑釉・灰釉陶器については、愛知県陶磁資料館浅田員由・仲野泰裕氏、名古屋市見晴台考古資料館平出紀男氏に鑑定していただいた。

注２　望月静雄・高橋桂　1985　「平安時代の土器編年について」『長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡Ⅳ』飯山市教育委員会

注３　当遺跡で椀としているものと同じ。杯と椀の名称は報告者によって異なり、両者を区別する確たる根拠はない。ここでは報告に従って杯としておく。

注４　注１に同じ。

注５　栖崎彰一・斉藤孝正　1983　『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』愛知県教育委員会

第4節　中　　世

中世の遺物は本遺跡の主体をなすものと考えられるが遺物量はさほど多くない。遺物には陶磁器・木製品・銭貨がある。土師器については中世土師器と頭初考えた埦があるが、検討の結果遺構外出土土師器埦は、中世の土師器として他の陶磁器類と同年代に位置づけられる責極的な証拠はなく、むしろ平安期ＳＫ５出土品例により近いと判断した。したがって、本遺跡出土土器・陶磁器類の中には中世土師器と認定される土器は含まれていない。

また木製品については、多くの製品が中世陶磁器等と伴出し、近世以降の攪乱を受けていない箇所からの出土品であることにより中世の一括品として把握することができた。以下にそれぞれの遺物について説明を加える。

１．陶磁器（第23図、図版十八～二十）

(1)　中国陶磁（第23図１～６、図版十八 44）

白磁・青白磁・青磁がある。全体で11点出土しているが、微小破片が多く図示し得たのは５点である。出土状態については、各グリットより散在的に出土したもので、遺構に伴うものは少ない。

白磁碗（第23図１）　１点のみである。口縁端が外反する器形を呈すが全形は不明である。器壁は非常に薄い。灰味をおびた白乳色を呈す。25Ｄ区出土。

青白磁碗（第23図２）　やはり１点出土している。高台部から体部にかけての破片で、内面底部に沈線様の文様をもつ。外面体部下端から高台部は露呈で、ヘラ削りされる。施釉部分は青みがかった灰白色を呈す。21Ｇ区出土。

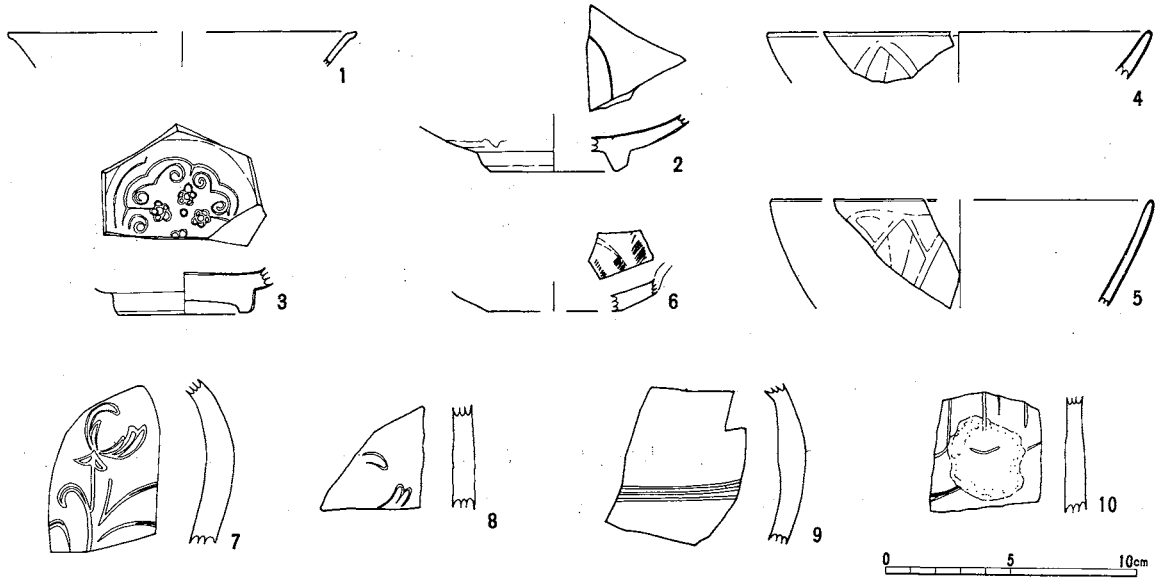
青磁碗（第23図３～５）　３点図示したが、この他にも青磁碗の微小片数点出土している。３は高台部分で、内底に花文が印刻される。(注1)　４・５は蓮弁文碗で、４は薄緑色の釉調、５は青味が強い青白色を呈している。３は27Ｋ、４は21Ｂ、５は30Ｊ区出土。

青磁皿（第23図６）　１点出土した。細片のため器形は不明であるが、体部に至り屈折する器形をとるものと推定される。底部内面に櫛描文が配されている。オリーブ色を呈す。22Ｈ区出土。

(2)　古瀬戸（第23図７～10、図版十八 45）

点数は多くないが古瀬戸が出土している。図示したほかにおろし皿・花瓶・碗が出土しているが、微小のため図示し得なかった。

瓶子（７～10）　７・８は同一個体ではないが、ともに印花文で、花弁文様が同一である。９は３条１単位の櫛



第23図　中世の遺物１　中国陶磁・古瀬戸　（１：３）

描直線文がめぐる。灰釉は不均一で、淡褐色ないしオリーブ色を呈している。7は25G、8は26H、9は29K、10は30H区よりそれぞれ出土している。

(3) 珠洲系陶器（第24・25図、図版十九・二十）

中世に比定される陶磁器の中で最も多いのが珠洲系陶器である。珠洲焼は能登半島の珠洲郡・市を中心として製作された須恵器系の中世陶器である。甕・壺・鉢を基本三種とした民間雑器であるが、その前期段階においては仏器類などの特殊な器形を製作しており、高級な施釉陶器を専門に焼いた瀬戸窯を兼ね合わせた生産体製の未分化な地域窯であったとされている。

本稿では胎土分析の結果待ちであるので、「珠洲系陶器」とするが、基本的には珠洲窯で生産された珠洲焼と考えて記述を進めていきたい。本遺跡では、壺・甕・鉢の三種が出土したが、壺・甕は少量であった。

壺（第24図1～5）　1～3は口縁部分で、器壁はさほど厚くない。ほぼ直立ぎみに立ち上がる形態で、灰白色を呈し、きわめて堅徴である。4・5は胴部破片で、叩き成形の壺丁種（吉岡分類）とされるものである。内面には円形押圧痕が認められる。1は28G、2はSK5、3は28C、4は27H、5は28H区よりそれぞれ出土している。

甕（第24図6～10）　いずれも全体の器形がわかるものはない。6～9は胴部破片で、外面はほぼ水平な叩き目で、内面は円形押圧痕である。10は短く外反する口縁部で、径44cmと推定される。31H区出土。

片口鉢（第24図11～17・第25図）　内面におろし目のあるすり鉢である。全体の器形が判明するものは少ないものの、口縁形態・おろし目など一様でない。

口縁端の形態は内削ぎに面をとるもの（11・14・15）、外削ぎに面をとるもの（12・17）、ほぼ水平に面をとるもの（16）の三形態がある。おろし目は、いわゆる曲線文となるもの（13）および類似するもの（14・15）以外は直線的なおろし目である。底部については確認できるものすべてが静止糸切りである。

11は口径約32cmで、器壁は薄い。口縁端部は内削ぎであり、内面に9本1単位のおろし目で、全体では12条と推定される。青灰色を呈し堅徴である。26D・27D・30I・28H各区より出土し、接合している。

12は口径約31cm、器高13.2cmで、全体の約1/2遺存している。口縁端は丸味をもち、外端が外下方へ引き出され内外面ともにロクロ痕が明瞭である。おろし目は幅2cm、7本1単位で全体では8条と推定される。下半部は使用による磨滅が著しい。青灰色を呈しやや軟質である。SK8出土。

13は胴部破片で、おろし目が櫛目の波状文となっている。淡褐色を呈し、やや軟質である。SK7の壙底より出土。

14は器壁が薄く、口縁端は内削ぎとなっている。内面のおろし目は細密で1単位10本以上である。灰色で堅徴。

15は青灰色を呈し堅徴である。おろし目は太く浅い。

16は口縁端がほぼ水平である。内面のおろし目は、細く深い条線で、20本以上1単位となるものと思われる。灰色で堅徴。

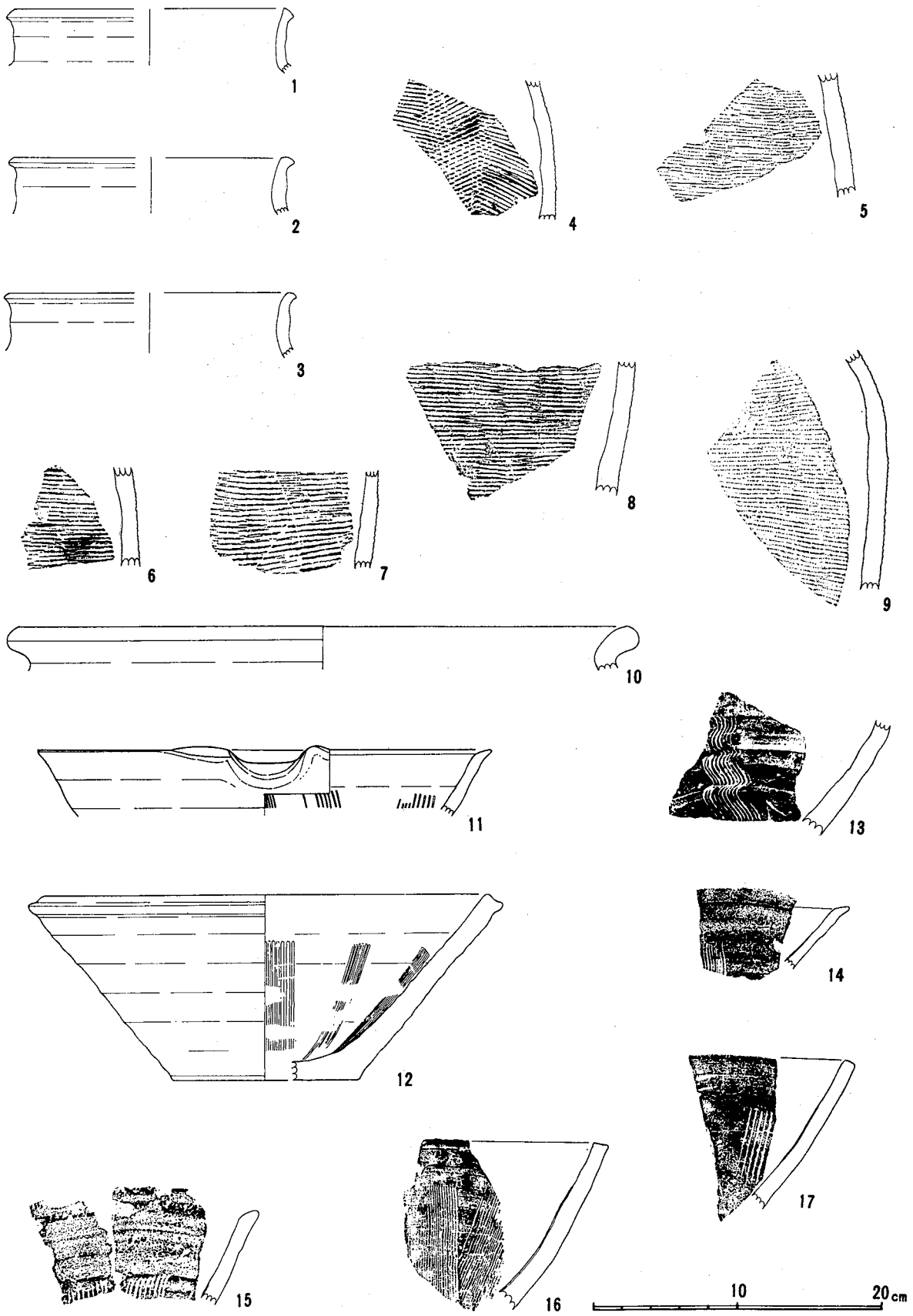
17は口縁端がやや外削ぎの面をもつ。おろし目は条線間隔が広く深い。青灰色を呈し堅徴である。

18～21は底部で、いずれも灰色を呈し堅徴である。18・20は体部が直線的に口縁に至るものと思われ、19はやや内湾ぎみ、21はやや外反する器形を呈するものと思われる。底部にはいずれも静止糸切り痕をとどめる。

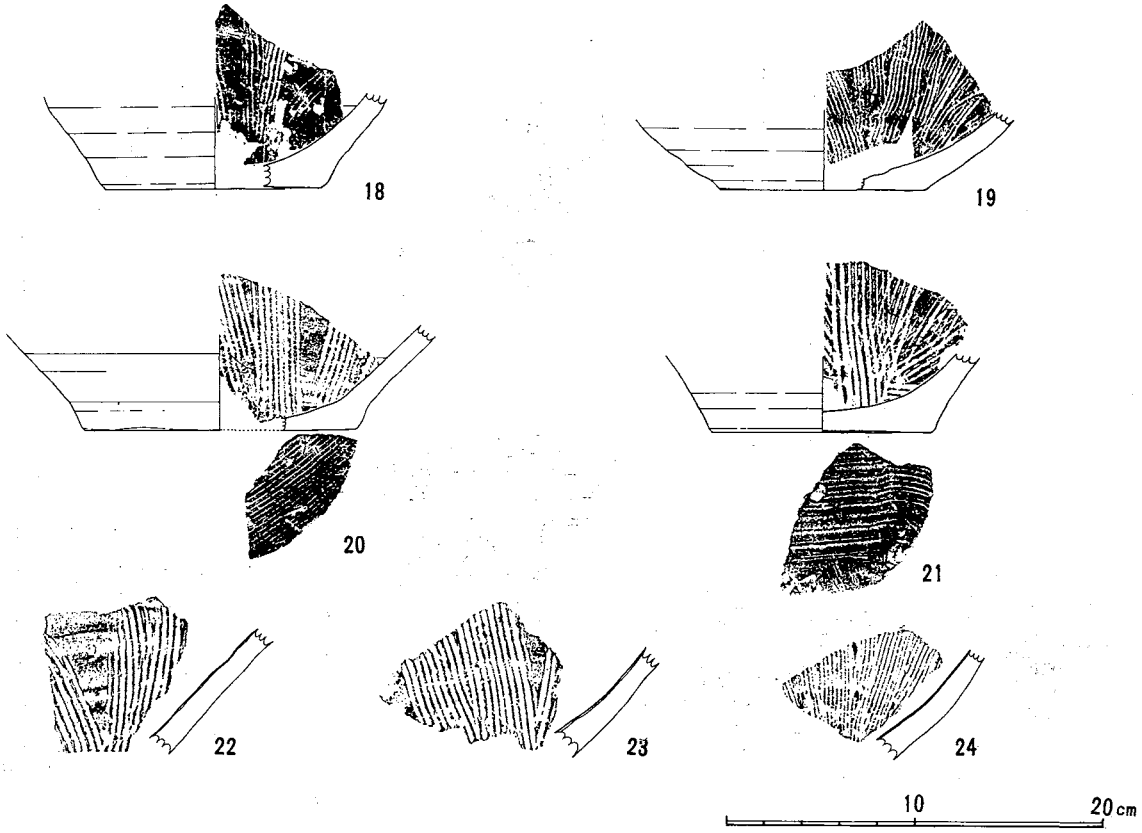
22～24は体部破片で、おろし目が施されている。22は太い条線が、24は細密な条線が密に施される。いずれも灰色を呈し堅徴である。

2．木製品（第26～35図、図版二十一～三十一）

本遺跡出土品で特に注目を集めた遺物に多量の木製品が挙げられる。多くは建築部材の柱根であるが、鳥形・呪符木簡などの宗教的遺物や、曲物・漆椀などの生活用品も出土している。



第24図　中世の遺物２　珠洲系陶器１　（１：４）



第25図　中世の遺物３　珠洲系陶器２　（１：４）

(1)　鳥　形（第26図１、図版二十三 52）

ＳＫ６の小竪穴遺構より、木簡・漆椀などと共に出土したものである。挿し込みの翼をもち、体長9.7cm、翼長10.3cm、厚さ２mmである。翼の挿し込み部分は特に薄く仕上げ、裏面が透けている。体部は頭部を作出するとともに尾部も丁寧に加工して作出している。

(2)　木　簡（第26図２～５、図版二十一）

木簡状の３点を加えて説明する。

２はＳＫ６の小竪穴遺構より出土。全長14.8cm、幅2.5cm、厚さ１ｍを測る。上端は圭頭状をなし、その下の左右に二ヶ所の切り込みを加えている。下端は平端である。

釈　文

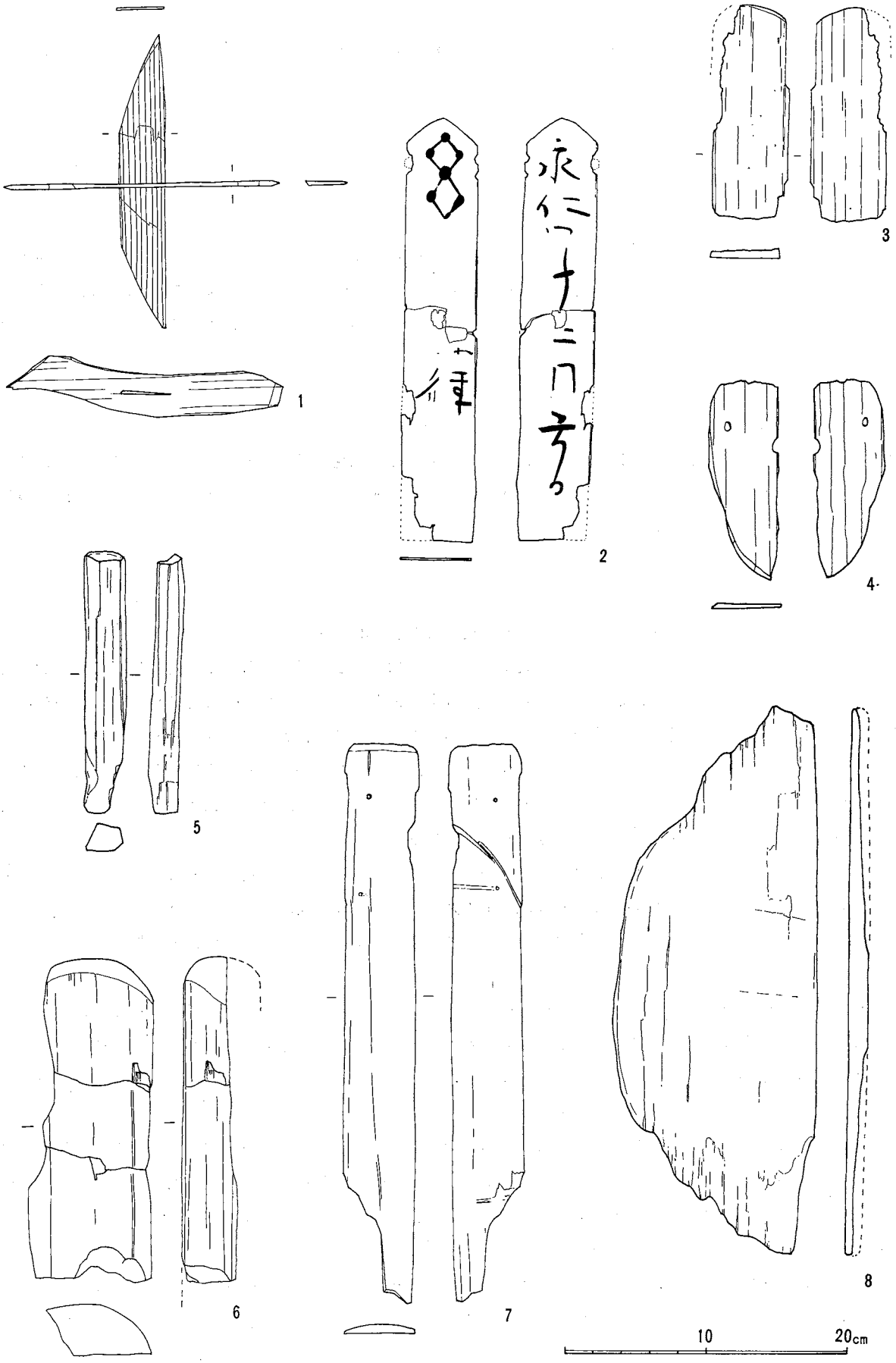
「く符籙　急々如律令」

「永仁四年□月□日」　（注２）

３～５は墨書痕は確認されないものの木簡に類似するため加えた。３は一端が圭頭状を呈している。４は下端が斜断されて尖頭状を呈す。孔と思われる部分があるが意識的なものかどうかはっきりしない。３は29Ｇ区、４は29Ｆ区、５はＳＫ６より出土している。

(3)　ＳＫ６出土不明木製品（第26図６、図版二十三 53）

製品名を特定できないが、ＳＫ６の鳥形に近接して出土したものである。現存長11.2cmを測る。一見すりこぎ棒とも考えられるが、上端側面を観察するに棒状になるとも思われず、遺構の性格を考えるにつけても特殊な製品である可能性も棄てきれない。



第26図　中世の遺物４　木製品　（１：２）

(4) 不明木製品（第26図７）

本例も具体的製品名を特定できない。３ヶ所に木クギ痕が認められることから、箱物の木片とも考えられる。

(5) 曲　物（第26図８、図版二十三 55）

28Ｈ区出土。推定径約21cmで円形底板と考えられる。

(6) 杭（第27図・28図11～13、図版二十四・二十五 57）

すべてＳＫ６の出土で、木簡出土地点の東北側に集中して打ち込まれていたものである。大半は径３cm前後の小枝をそのまま利用し、杭先を尖頭状に仕上げている。なお３・４・10は直接杭先に関係しない部分において、平担な面を作出している点は注意される。また５・７・12は太い木を分割して作り出したものである。12は北端に打ち込まれていたもので、他と比べてずいぶん太い。

(7) 加工痕のある木製品（第28図14～17、図版二十五 58～60）

加工痕のある木製品を一括した。14はＳＫ８底面より出土した、先端が二又に分かれた棒状具である。15はＳＢ１ピット内より出土したものである。16・17は現存する中ほどに両側より切り込みを入れたものであるが、製品名はわからない。16はＰ45、17はＰ44区内の出土である。

(8) 柱根・礎板（第29図～第34図、図版二十七～三十一 67）

調査によって多くの柱根が出土したが、遺存状態の良好な例を中心に図示した。

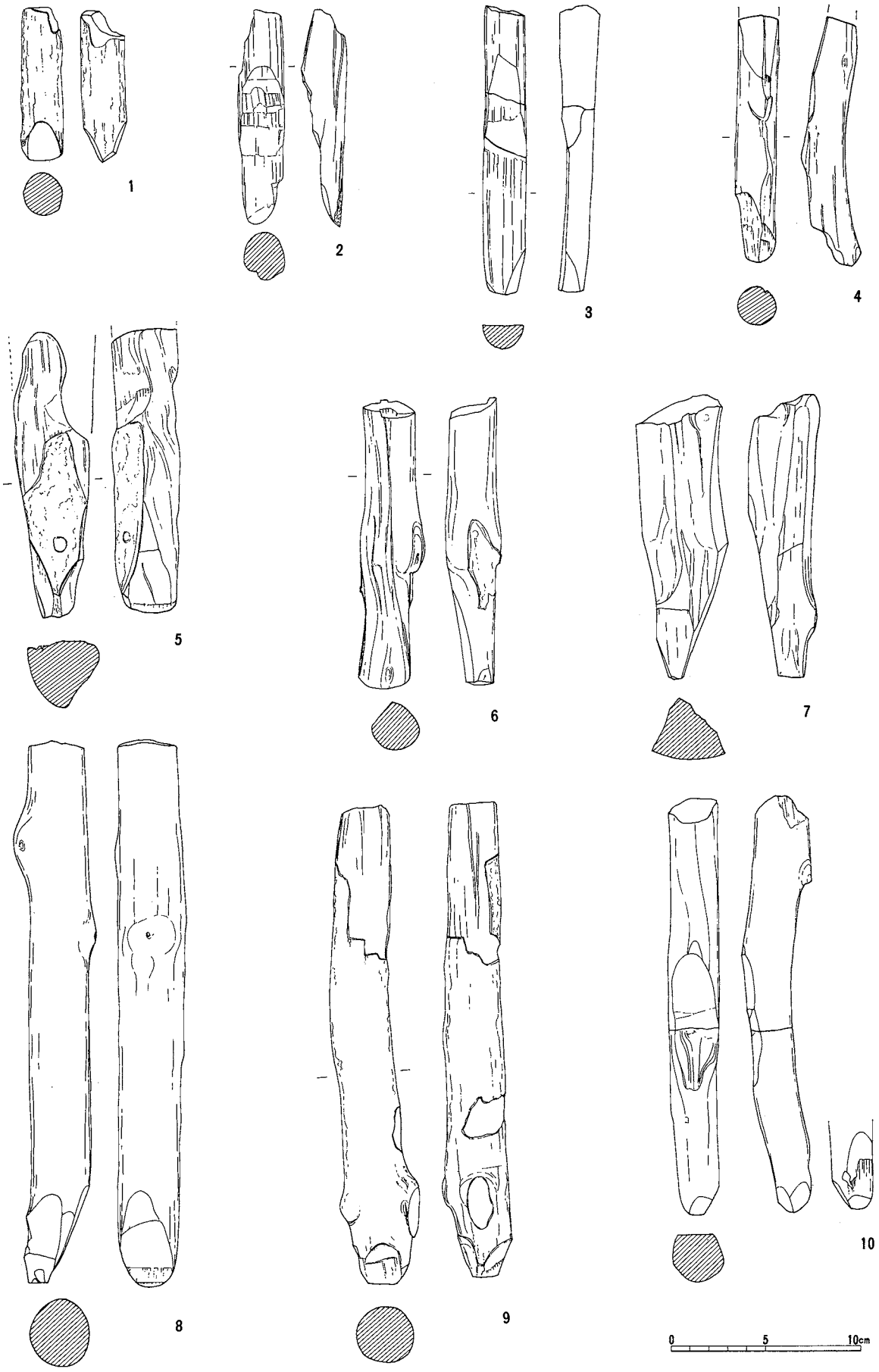
１～７は建物址に含まれない部材であるが、大半は掘立柱建物の柱根と思われる。１は現存長52cmで、22×13cm角の二方柾で面取りされている。底面より30cmおよび22cm上に正面と側面に深さ６cmほどの正方形の孔が穿たれている。２は径15cmの丸太材をそのまま使用している。底面は周囲より削られ尖頭状をなす。底面より12cm上位に全周の約3/4の範囲に切り込みを入れている。３は丸太材をほぼ半割したものである。５は面取りされた部材で、三方より角度をもって底面へ削り込んでいる。そのため底面は尖頭状をなす。底面より14cm上位に一ヶ所の深い切り込みがある。７は７×６cmの角材で、底面はほぼ水平に切断されている。

８～10はＳＢ４の建築部材である。８は二方柾の面取り材で、両側面の削りの角度が異なる。底面より11cm上位に一面を除き切り込みが加えられている。９は径11cmの丸太材をそのまま使用している。底面はほぼ平担に削られている。10は二方柾で17×14cmの多面体を呈している。底面は下方から切り込まれるが、側面形態ではほぼ平担となっている。

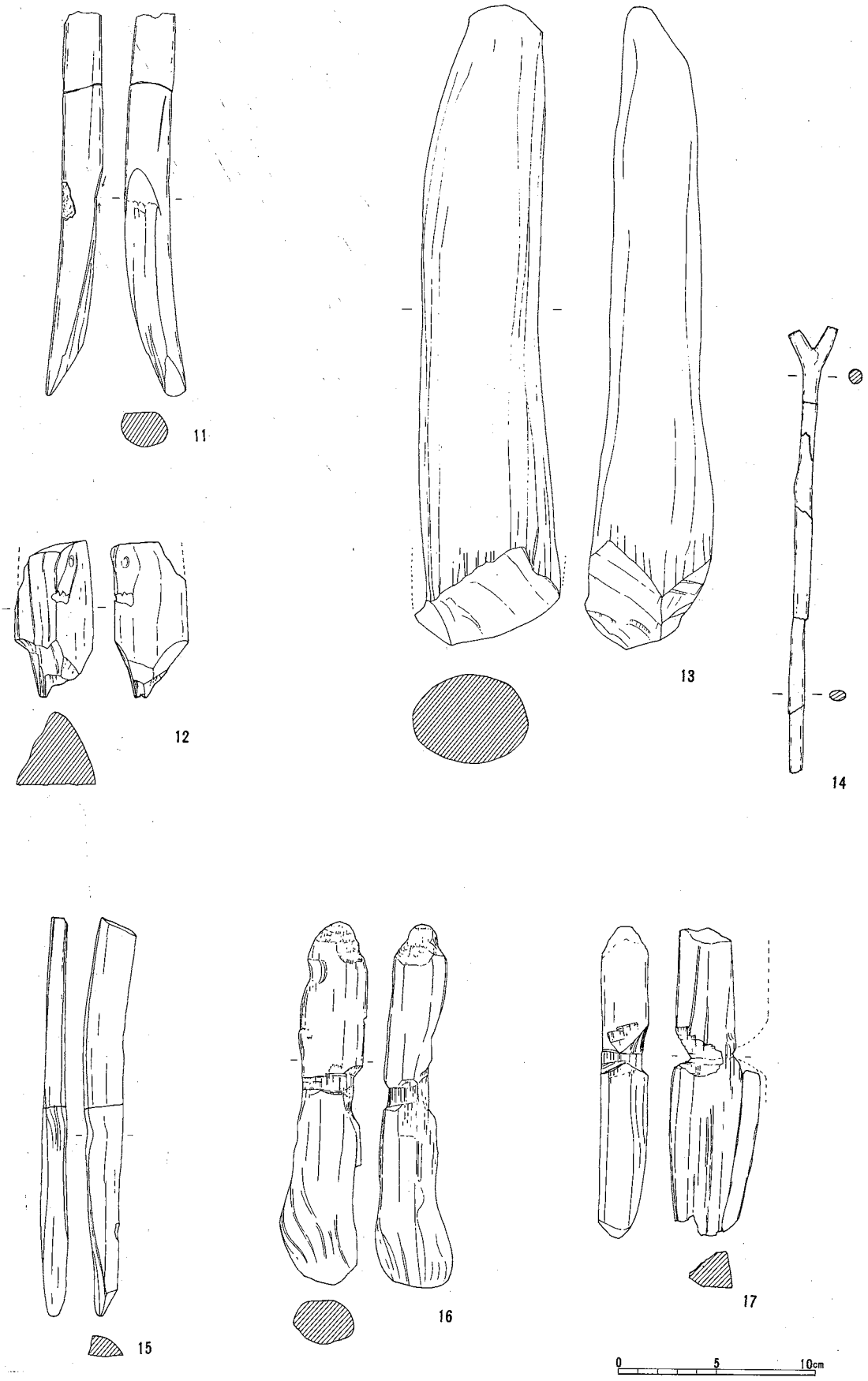
11～14はＳＢ５の建築部材である。11は芯持ち材の丸太を面取りしたもので、底面はほぼ平担に削られている。底面より７cm上位に全周に丁寧な切り込みが加えられる。12は多面体を呈するもので、断面はほぼ長方形である。底面は両端より角度が浅い削り込みで尖頭状の底面となる。13は芯持ちの丸太材と思われる。14は丸太材を三分割したものと思われる。形態は11と同様である。

15は芯持ちの丸太材を面取りしたものである。底面は浅い角度を持って尖頭状を呈する。16は断面三角形を呈し底面より14cm上位に深さ５cmの正方形の孔が穿たれている。17は面取りされた部材で、底面は一方向よりやや角度をもって平担な面となっている。18は手法・形態ともに17に似る。19は芯持ちの丸太材を面取りしたもの。底面はほぼ平担である。

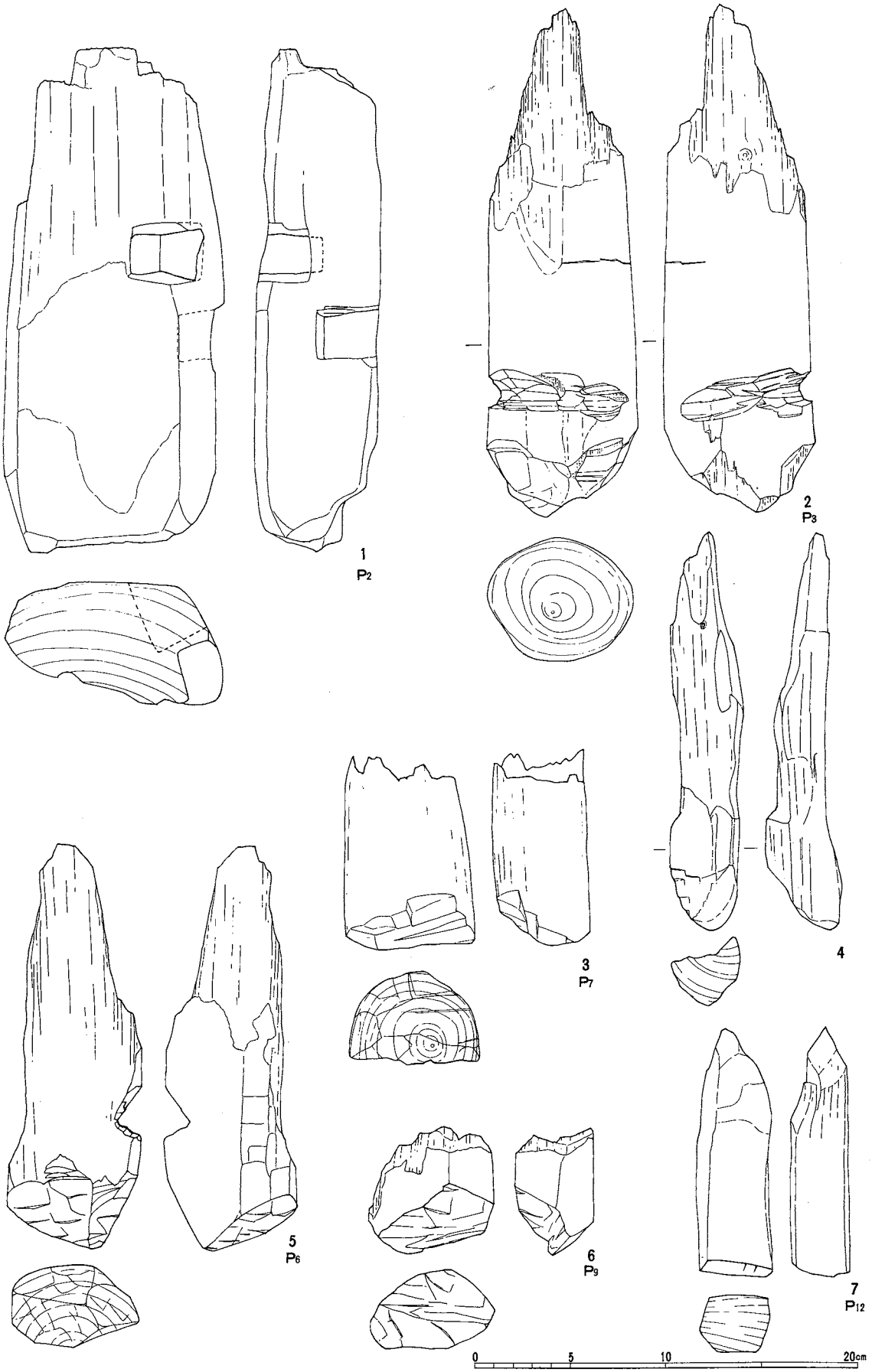
20は芯去り材の多面は斜断されている。21も芯去り材で、ミカン割りしたような部材で多面柱となっている。下端部は切り込みを入れるとともに、入念な加工を施してやや丸味をもった底面となっている。22は芯持ち材で、丸太の一面のみ平担な面取りを行っている。底面はほぼ平担であるが、上位９cmの部位には、一面を除いた丸太部分に切り込みが入念になされている。26は形態・手法ともに21に似る。



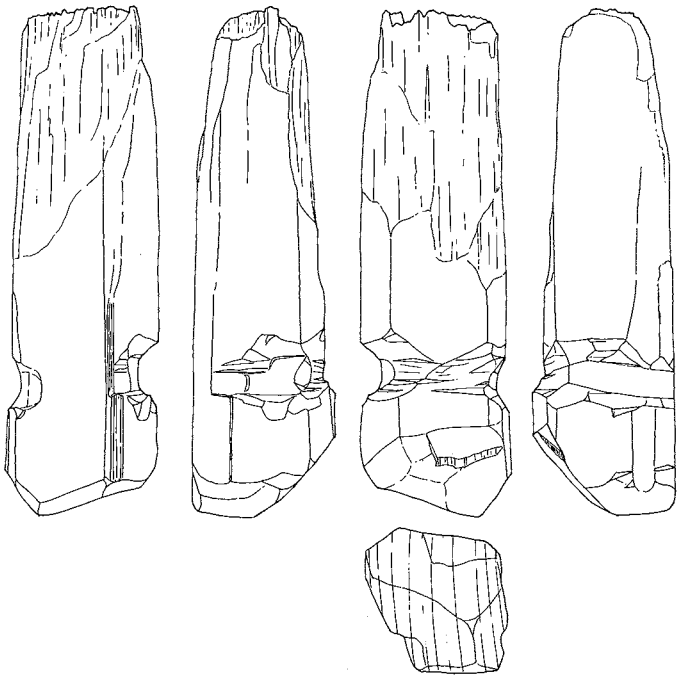
第27図　中世の遺物５　杭１　１～10：ＳＫ６　（１：２）



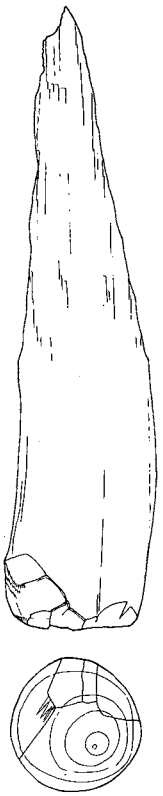
第28図　中世の遺物6　杭2　11～13：ＳＫ6，14：ＳＫ8，15～17：ピット　（1：3）



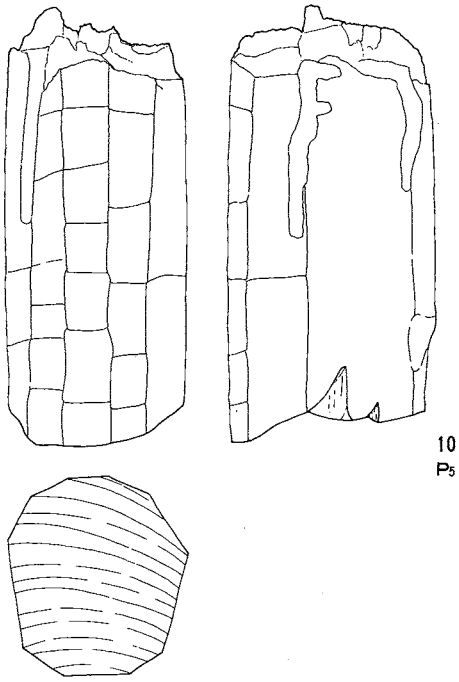
第29図　中世の遺物７　柱根１　（１：６）



8
P1



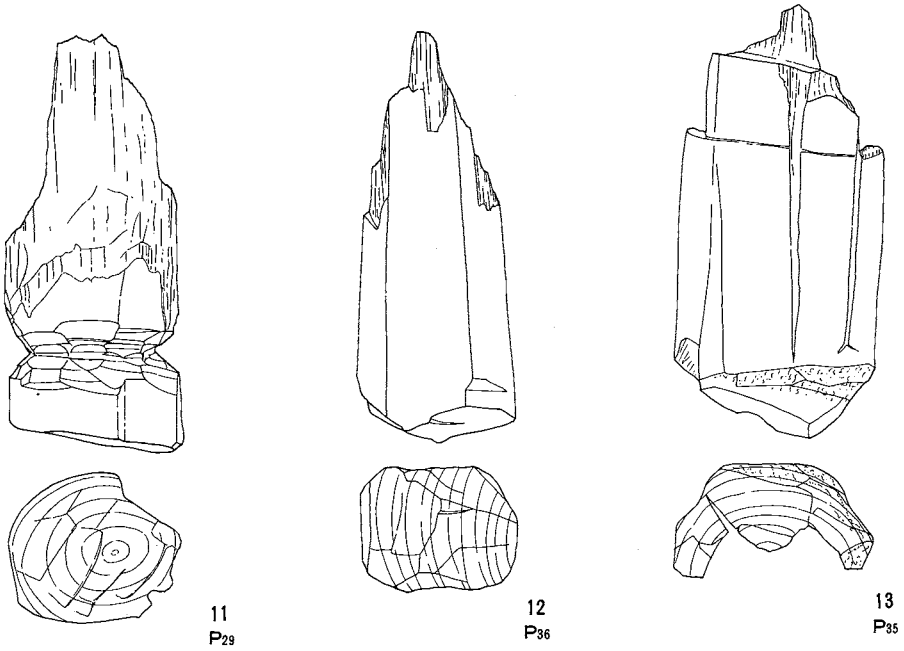
9
P4

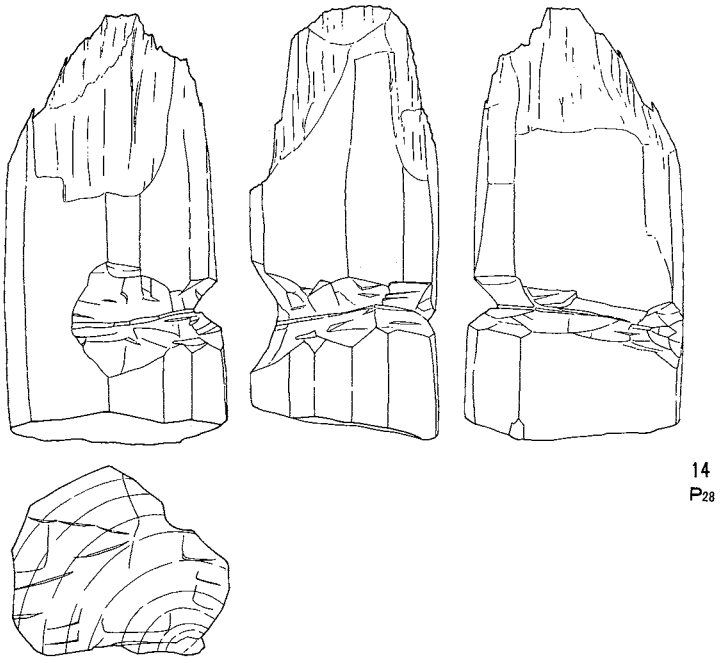


10
P5

0 5 10 20cm

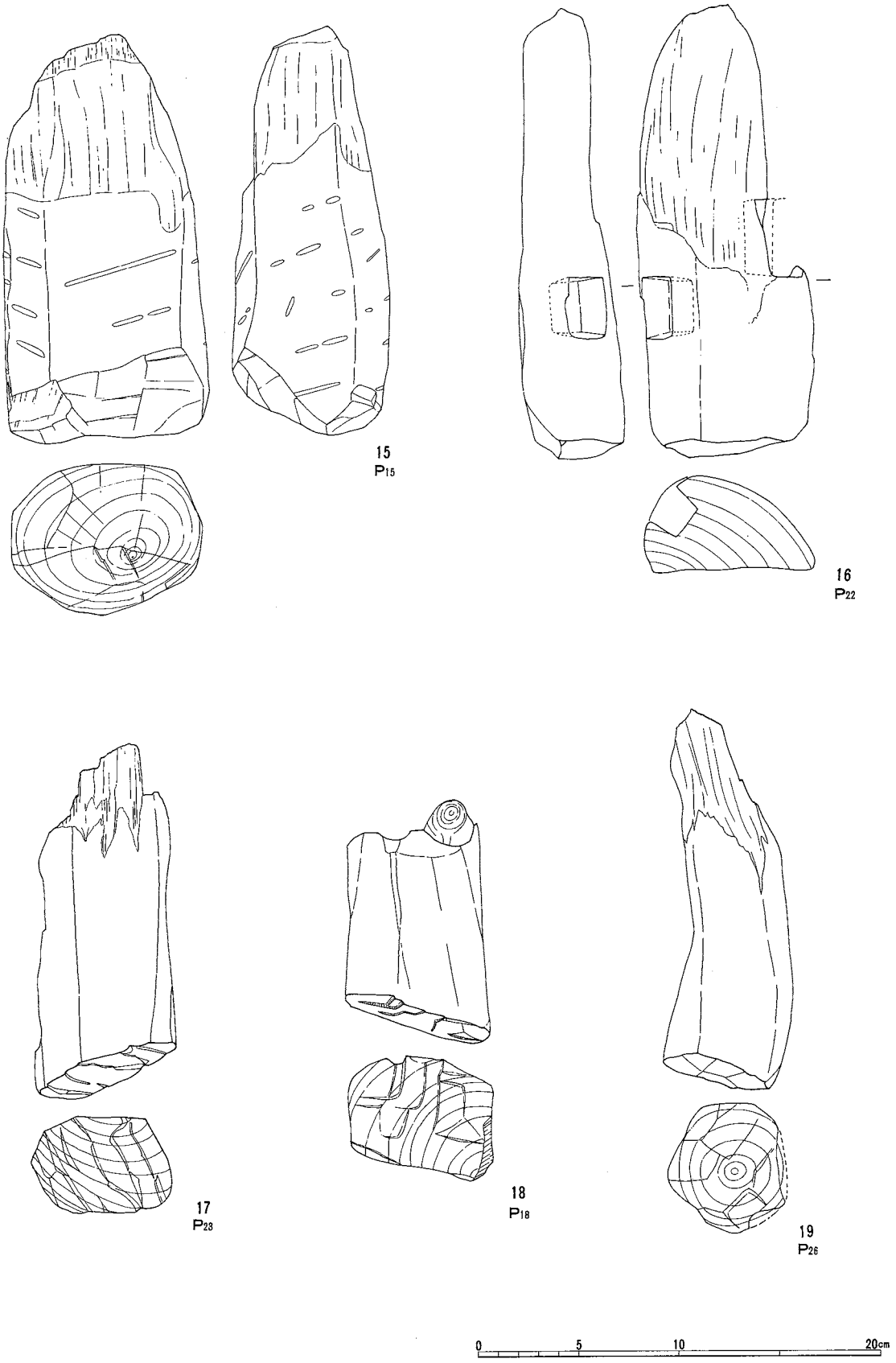
第30図　中世の遺物８　柱根２　（１：６）



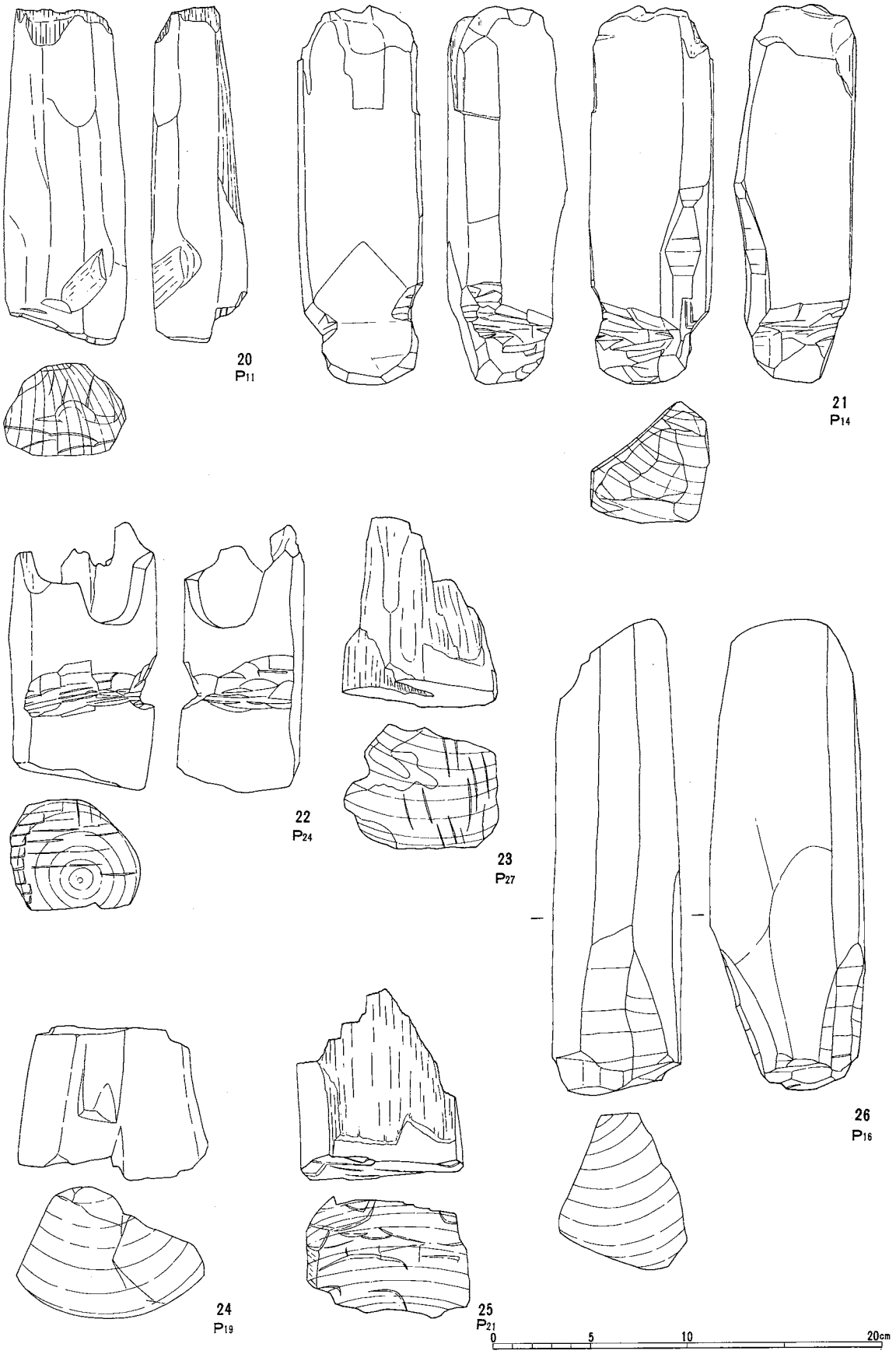


0 5 10 20cm

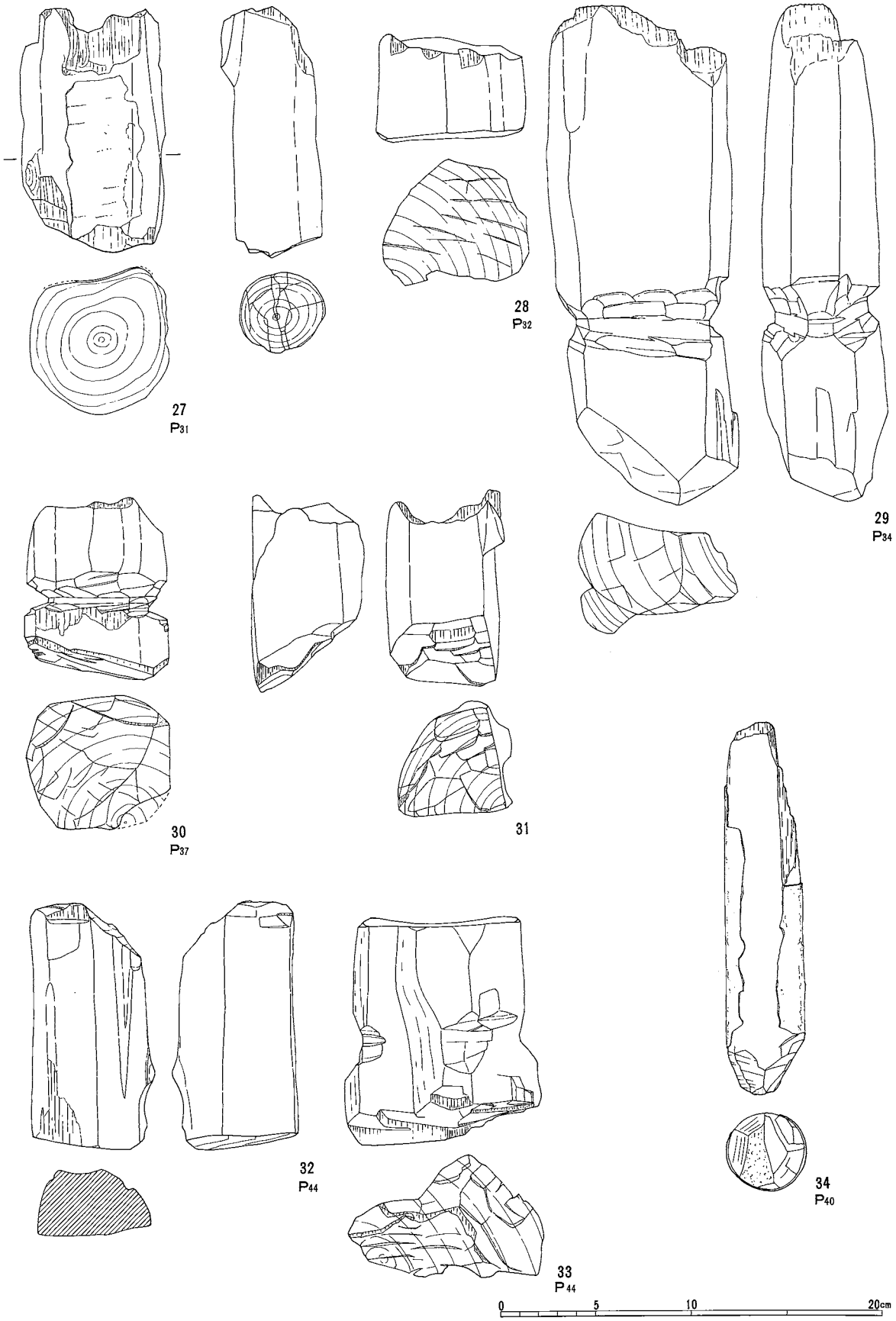
第31図　中世の遺物９　柱根３　（１：６）



第32図　中世の遺物10　柱根４　（１：６）



第33図　中世の遺物11　柱根５　（１：６）



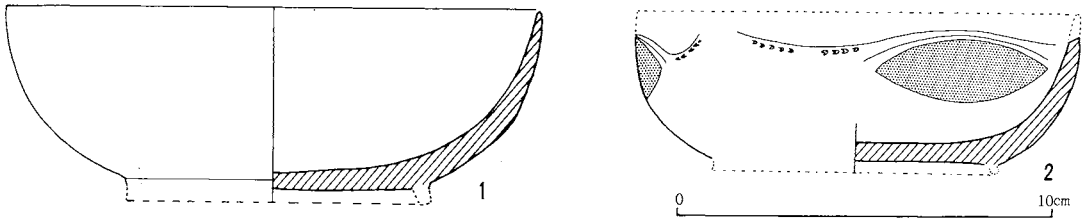
第34図　中世の遺物12　柱根６　（１：６）

27は丸太材を加工することなく、表皮のついたまま利用している。28はＰ32において２本検出されたもので、Ａは補助柱と考えられる。29は現存長51cmで、19×12cmの多面柱である。下端は両側より削り込み尖頭状となる。底面より19cm上位に幅広い切り込みを施している。手法・形態は８に似る。30は芯持ち材の多面柱で、下端より上位７cmの部位に全周にわたり切り込みが施される。11・14と同形態である。32・33はＰ44内出土した礎板である。両方とも上端は切断されているが、柱の転用材と考えられる。34は柱根というより杭かと思われる。

(9) 漆器椀（第35図、図版二十二）

１はＳＫ６出土で、口径14.1cm、器高5.4cm、底径7.8cmと推定される。高台部のみ欠失しているが、他はほぼ完形品である。器厚は５～７mmで、木地仕上げ・塗りも丁寧である。内面・外面ともに黒漆で、文様はない。

２は26Ｂ区で単独に出土したものである。口径11.8cm、器高4.4cm、底径7.8cmと推定される。口縁と高台を欠く。木地仕上げ・塗りは１よりさらに丁寧で、器面には光沢がある。内面は朱漆が塗られ、外面は黒漆である。文様は外面のみで、黒漆の上へ朱漆で三単位に凸レンズ状の文様が描かれ、その上部へ二本の長短の波状文と花弁状の文様が点列される。



第35図　中世の遺物13　漆器椀　１：ＳＫ６　２：26Ｂ　（１：２）

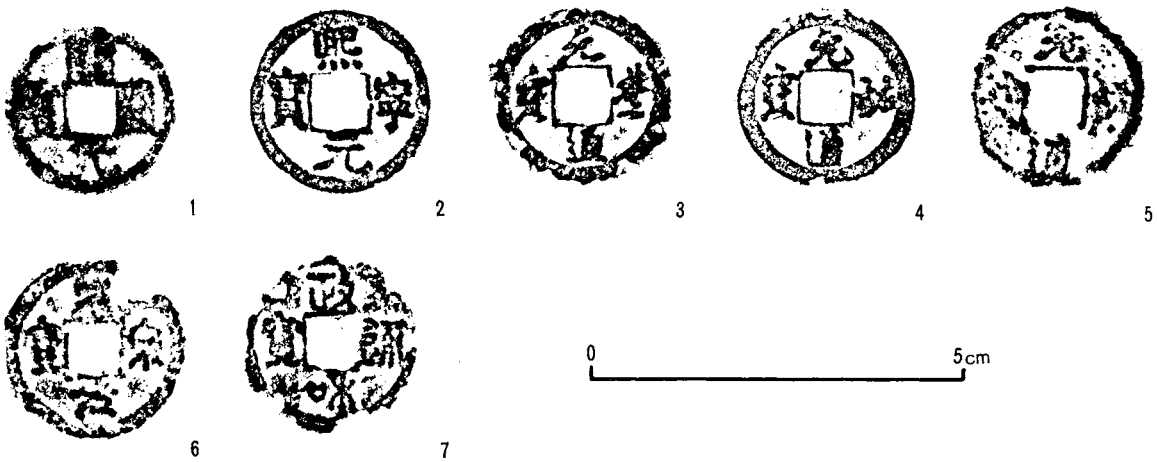
(10) 種　子（図版二十六 62）

種類鑑定を行っていないので特定できないが、梅の種子によく似た種子がＳＫ６・７より多量に出土している。

３．銭　貨（第36図、図版三十一 68）

渡来銭が７点出土している。木製品とは逆に水分の多い土中に埋れていたため遺存状態は悪い。すべてグリット一括品であり、遺構内より出土したものはない。

出土銭貨で最も初鋳年の古いものは「開通元寶」で、背面に「洛」の文字のある紀地銭と呼称されるものである。他は初鋳年1068年の「熙寧元寶」から1111年の「政和通寶」までの北宋銭が計６点出土している。



第36図　銭貨拓影図　（１：１）

第４表　　出土古銭一覧表

	銭 貨 名	初鋳年	書　体	出土地区	備　　考
1	開通元寳	845	隷	29　K	背面上部に「洛」
2	熙寧元寳	1068	楷	26　I	
3	元豊通寳	1078	行	28　C	
4	元祐通寳	1086	行	22　C	ＳＤ１
5	元□通寳		行	25　C	
6	聖宋元寳	1094	蒙	表	
7	政和通寳	1111	蒙	26　I	

４．小　括

(1)　陶磁器

中世の陶磁器の出土量は決して多くはないが、県内でも比較的調査されることの少ない時期であるだけに貴重な資料を提供した。(注３)

船載陶磁　白磁・青白磁・青磁がある。白磁碗（第23図１）は12世紀。

青白磁碗（23－２）はヘラによる文様がみられ、同様に12世紀に比定される。青磁碗は、内底に花文の碗（23－３）、蓮弁文碗（23－4・５）、櫛描文皿（23－６）があり、３は14世紀、４～６は13世紀頃に比定される。

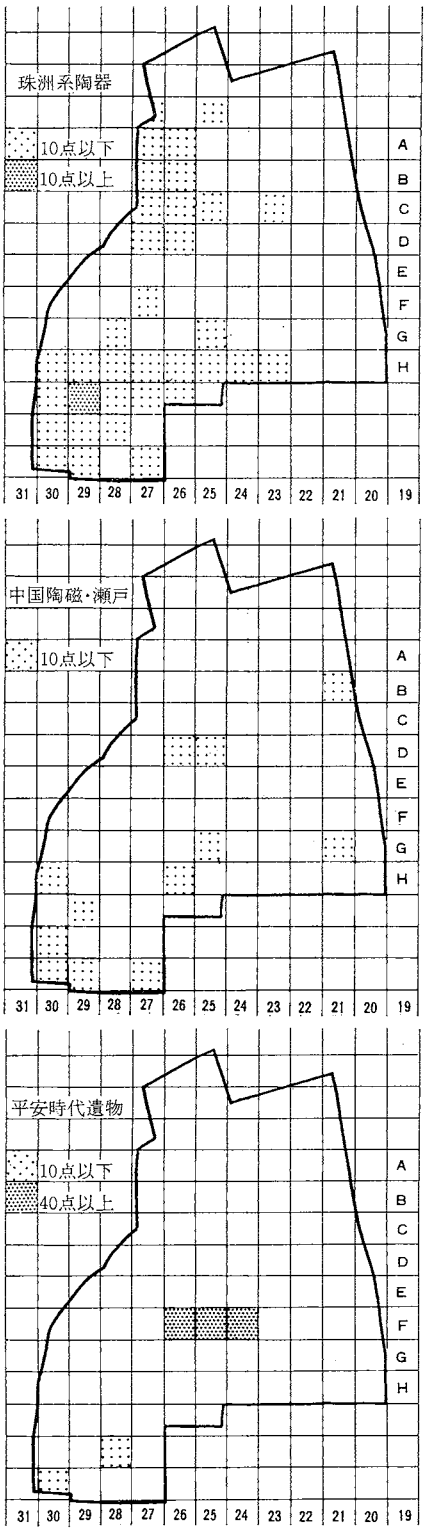
以上、出土した船載陶磁は少量ではあるが、すべて明代以前の南宋元代の所産と把握でき、12～14世紀に位置づけられる。

国内陶磁　古瀬戸　灰釉瓶子が出土しているが（23－６～10）、印花文（７・８）や体部上半に櫛目文のある（９）は、古瀬戸前期～中期にみられ、13世紀中葉～14世紀前葉に比定される。

珠洲系陶器　出土陶磁の中で最も出土量が多い。珠洲系陶器については遺物の項でも説明したとおり、基本的には珠洲窯で焼かれた珠洲焼と考えている。

珠洲焼の編年は吉岡康暢氏によって12世紀中葉～16世紀を三段階７期に細分している。Ⅰ期は12世紀中葉～13世紀初頭、Ⅱ期は13世紀前半～中葉、Ⅲ期は13世紀後半、Ⅳ期は14世紀、Ⅴ期15世紀前半、Ⅵ期15世紀後半、Ⅶ期16世紀前半とし、Ⅰ・Ⅱ期を創成期、Ⅲ～Ⅴ期を発展期、Ⅵ・Ⅶ期を終焉期とされている。

本遺跡出土例については、片口鉢が多いものの壺・甕が少量であり全体として器形のわかるものは少ない。



第37図　中世陶磁器及び平安時代遺物分布図

小形壺は口縁がやや開き気味で口縁端が外側に張り出し、断面三角形を呈する例（24－１～３）、多面体となる特徴的な壺Ｔ種（23－４）が存在している。こうした点は、吉岡氏編年のⅢ期馬緤窯およびⅣ期法住寺３号窯に近似するものと思われ、(注４)おおよそ13世紀後半～14世紀前半期に比定される。

次に片口鉢は、遺物の項で説明したとおり口縁端を外削ぎする例、内削ぎする例、ほぼ水平な例とバラエティーに富み、内面のおろし目についてもそれぞれ相違している。ここで特徴的な二・三の鉢についてみたい。24－13は

珠洲法住寺３号窯片口鉢ＩＡ類とした[注5]曲線文で、珠洲窯II期に比定されているように前期段階のものである。24－12は口縁端が丸味をもち、外端が外下方へ引き出されてしっかり面を取っており、器形もほぼ直線である点は、法住寺３号窯片口鉢IIＡ類に比定され、Ⅳ期の14世紀前半に位置づけられよう。また、24－11は口縁端が内削ぎに面をとった例で後出的な様相ではあるが、Ⅴ期以降にみられる例は丸味をもっておりやや雑な作りになる。本例は器壁も薄く、シャープに内削ぎに面をとっている。また整形も丁寧である。こうした点を考慮するならば、III期馬緤窯にも内削ぎする例も存在することから該期に位置づけられないだろうか。

以上簡単に陶磁器の編年について触れてきた。確実に15世紀と考えられる遺物は認められなく、その中心は13世紀～14世紀前半におくことができよう。

(2) 鳥形と木簡

ＳＫ６より出土した鳥形木製品・木簡・漆椀などのセットは、中世民間信仰の祭祀形態を知る上で貴重な資料となった。

鳥形木製品　中世の鳥形の出土は、石川県西川島遺跡群御館遺跡・同白山橋遺跡・散田ムロノ遺跡・新潟県馬場屋敷遺跡・静岡県小川城遺跡等で出土しているが、県内では初見と思われる。四柳氏によれば[注6]、鳥形は井戸廃棄に伴う祭り及び井戸以外の祭祀行為においても「引道役」をになっていたのではないかとされている。本遺跡出土例も呪符木簡が同一遺構より出土していることから、何らかの祭祀行為を行ったことは確かであろう。

木簡　呪符木簡については和田萃氏の論文に詳しい[注7]。それによれば「急急如律令」の呪句を記す呪符木簡は、道教的信仰の浸透により奈良時代～平安時代初期には出現し、中世まじないの世界において一般庶民の間で盛行した。「急急如律令」という呪文は「すみやかに律令（正しい）の如く去れ」との意で、「速やかに鬼よ去れ」「凶時に去を期待している」と解釈され[注8]、特に中世に至っては葬祭的な物忌の形態が加わり、浄土信仰と呪術的要素を持つ密教信仰との混然とした形へと変化する[注9]。

裏面にある「永仁四年□月□日」の紀年銘により1296年の□月□日に行為が行われたと推定でき、遺跡の年代も13世紀末前後に存続期間をおくことができる。

さて、鳥形・木簡等の出土したＳＫ５ではどのような祭祀行為が行われていたのであろうか。この場合、木簡とあたかも境をなすように地中に突き立てられた木杭が注目される。多くは径３㎝前後の小枝を利用したもので、杭としては貧弱なものも存在している。これを具体的な機能を持つものとして特定は出来ないが、少なくとも木簡と他との空間を隔てていることは明白である。そしてそれと相対するように鳥形が出土している。鳥形の北側で出土した不明木製品を祭祀に伴う木製品とすると、西に木簡、北に不明木製品、東に鳥形、南に漆椀が位置していると概念化することができる。こうした配置に注意された遺構には、石川県西川島遺跡群白山橋遺跡の祭祀遺物埋納遺構がある[注10]。それによれば「北に悪疫災禍を払う霊獣獅子頭と刀形・矢形、南の火きり臼と陽物の配置は陰陽五行思想にいう火陽のの理」にかない、「東に鳥形が位置するのは古代以来の神や神霊のおもむく方角」にあたるとされている。いまこの例をＳＫ６と対比させると、東端に位置する鳥形は同様であり、この神や神霊のおもむく方角に相対する西側に呪符木簡が位置することになる。南端で出土した漆椀もこうした配置意図があるものと考えたい。また多数出土した梅の実と思われる種子も関係するものであろう。

おそらく、杭状木製品によって仕切られた木簡に向って、種々の災厄（特定できない）を祓い流す行為の結果ではないだろうか。

出土木製品についてはまだ多くの調査が残っている。樹種の同定・漆器椀の塗膜層構成・柱根の年輪年代側定等である。今後の課題とし、報告すべく努力してゆきたい。

注

注１　五島美術館の竹内順一氏より高麗青磁ではないかとの指導をいただいた。今後の検討を要する。

注２　奈良国立文化財研究所の綾村宏氏に御配慮いただき赤外線テレビより判読していただいた。

注３　舶載陶磁・古瀬戸については、愛知県陶磁資料館の浅田貝由・仲野泰裕両氏並び名古屋市見晴考古資料館平出紀男氏に御教示をいただいたが、誤りがあれば筆者の責任である。

注４　吉岡康暢・平田天秋　1976「珠洲古窯跡」　珠洲市史所有

注５　高堀勝喜・橋本澄夫・平田天秋・吉岡康暢編　1977　「珠洲法住寺３号窯」石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会

注６　四柳嘉章　1987　「中世村落における信仰の諸形態」　西川島所有　石川県・穴水町教育委員会

注７　和田萃　1982　「呪符木簡の系譜」　木簡研究　４号　木簡学会

注８　水野正好氏より御教示を受けた。

注９　奥野義雄　1978　「物忌札とその世界」　どるめん　No.18　ＪＩＣＣ出版局

注10　四柳嘉章編　1987　「西川島」　石川県・穴水町教育委員会

第V章　総　　括

関田山脈の一角―黒岩山はギフチョウ、ヒメギフチョウの混棲地として国の天然記念物に指定されている。この黒岩山の山麓に発達した集落が飯山市顔戸である。顔戸地域は、往時より、先史時代の各種の遺物が出土している。従って、今回の圃場整備事業が施行されるにあたって、当初から釜渕地籍は発掘調査の対象とされていたのである。

調査開始期は、第Ⅲ章遺構の項に記述してあるとおり、当該地域が傾斜地の水田地帯であり、階段上に地形が改変されていて遺跡の破壊度が著しく調査は難渋をきわめたのである。しかしながら、地元作業員の皆さんの献身的な御協力、御努力により大きな成果をあげて発掘調査は終了した。改めて作業に従事された皆さんに感謝の念をささげたいと思う。

調査の結果、本遺跡は縄文、弥生、平安、中世の各時期にわたっていることはすでに記述してあるとおりである。それ故に古い時代の遺構ほど破壊の度合いは著しいことはいうまでもないことである。それ故に、縄文時代に関しては、遺構は殆ど検出し得なかった。今回の調査で出土した縄文土器、石器は、主として縄文後期前半のものが主体となっている。飯山地方では、後期の良好な遺跡は数少なく、飯山市東原、同宮中、野沢温泉村岡ノ峯、同東大滝の各遺跡を除けば、断片的に遺物の出土が知られているのみである。特に、後期初頭の出土はきわめて稀であって、数量的にも僅かである。従ってこの調査で得た資料は、飯山地方の縄文後期前半の土器型式のあり方を知る上で貴重なものとなるであろう。本報告では、時間的制約があってごく一部しか紹介し得なかったことはすでに記述したとおりである。しかしながら整理した資料から飯山地方の縄文後期前半期は、越後の後期文化の浸透があったことをよく物語っている。今後、当地方の後期前半期の土器研究に本遺跡の果す役割は大きい。なお、蛇足ながら周辺には、縄文中期後半、晩期前半の遺跡が数ヶ所存在しており、当地域が縄文中期後半から晩期にかけて居住するに格好の場所であったといえよう。

弥生文化についてみれば、関田山脈の山麓地帯、等高線で350～370ｍの範囲内に大部の弥生式遺跡が分布する。そして、現在の集落立地と重なり合っている。この範囲は、丁度涌水帯にあたっており、かつ外様平の肥沃な湿地帯を臨む所でもある。本遺跡もこの地帯に立地している。今回の調査では、先記したように弥生時代の遺構はほとんど後世に破壊されていた。ただ幸いなことに土器溜り一ヶ所が、平安時代の土壙に一部こわされながらも存在していた。この土器溜りから検出した土器は、小結の項に記してあるように千曲川下流域―飯山地方弥生時代中期後半に所属する良好な資料であった。飯山地方の弥生中期の編年は、昭和53年に調査した鍛冶田遺跡Ｄ地点、Ｃ地点出土土器を指標として小境―鍛冶田Ｄ地点―鍛冶田Ｃ地点と推移変遷する編年案を私達は組立てた。その後、当地方においては弥生文化期の調査は行われず、叙上の編年案を改変するにいたるだけの資料もなく現在にいたったのである。今回の調査の結果得た資料は、上記した編年案を補強化するとともに鍛冶田Ｄ地点出土土器の新しい要素について一つの重要な認識を私達にあたえてくれた。今後とも飯山地方の弥生中期の究明に努力し、一日も早く弥生中期の編年を確立したい。

平安時代については、飯山地方では北原―長者清水―鍛冶田Ａ―鍛冶田Ｃと推移する編年試案を用意しているが今回の資料は鍛冶田Ｃならびにそれよりも若干新しい地位にあたるものである。

以上、今回の調査で得た資料にもとづき、縄文時代、弥生時代、平安時代について述べた。そして、これらの各時代の遺物は当地方の考古学研究上いずれも重要なものであることはいうまでもない。しかし、今回の調査のハイライトは何といっても中世所属の遺構及び遺物であろう。特に年号を記した木簡、鳥形木製品、漆器椀、杭状木製品等が出土した遺構は貴重である。年号を記した木簡、鳥形木製品は県内では初めての出土である。この遺構、遺物については望月が第４節中世の項で詳述しているので今更ここで記す必要はあるまい。ただこれらの所属年代は木簡に記された年号、その他から鎌倉時末期としてよいであろう。この時期外様平の支配者として、常岩氏があげ

られる。この木簡に記された年から20数年後に飯山市太田北条に本拠を有したとされる「常岩弥六宗家」なる人物が歴史の舞台に登場する。このことについては、故江口善次氏が「外様村史」「太田村史」の中で詳細に記述しておられる。氏は両村史の中で、鎌倉を通じて外様平の支配者は、常岩氏と明言されている。

望月が触れているように、今回出土した木簡をはじめとする遺物が呪符的なものであるとすれば、外様平の支配の中で大きな災厄と考えられる事象が起っていたと考えてよいであろう。それは、いったい何であったのかは今後の重要な研究課題といえよう。いずれにしても、鎌倉時代末期に所属する木簡、鳥形木製品等の呪符的遺物が出土したことは、市河文書以外に当地方中世の歴史的軌跡を知る手懸りをもたなかった私達に一条の光明をあたえてくれたといってよいであろう。因みに常岩氏の本拠地とされる北条城は、建武2（1335）年、市河氏等に攻略されて城は破却され、常岩氏の消息が絶えたとされている。

ところで舶載の陶磁器（白磁、青磁、青白磁）や古瀬戸、珠洲系の陶器等が出土したことは、この当時すでにこのような製品を入手するに足りる経済力を保有した小領主層がこの地域に成長していたことを証明する資料であるとともに当時の物資交流の有様を如実に示している。当時の貴重品であるこれらの品々を入手できた人々は、外様平の支配者とされる常岩氏とどのような関係を有していたかは不明である。ただ、木簡をはじめとして各種の陶磁器を保有するに足りるだけの勢力をもった小領主と考えてよい人物が顔戸地区を基盤として成長していたと考えられよう。

珠洲系陶器については、昭和59年の温井長者清水遺跡調査を契機として、北信濃を中心としてその分布情況を私達は追求してきた。そして、今回の調査を通いて更に資料を集積し、その分布の有様をほぼ把握するにいたった。このことについては、近い内に望月が紹介するであろう。

今回の調査は多くの問題点を私達に投げかけた。特に中世―鎌倉期の重要な資料を得たことは、今後当地方の中世究明に一筋の光明をあたえたといえよう。

終りにあたって、本調査に種々と指導下さった笹沢浩氏（文化課指導主事）、協力頂いた圃場整備実行委員会、作業員の皆さんに心より感謝の念を捧げたい。

第２編　北顔戸遺跡

第Ⅰ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置

第１編釜渕遺跡の項で詳細に述ているので簡単に触れておきたい。

第三紀水成層を基盤とする関田山系は、信濃側においてその後の断層活動により1000ｍ内外の低山地でありながら、比較的急峻な山容を示している。遺跡の位置する顔戸地区は、黒岩山(938ｍ）の山麓にあり、比較的新しい扇状地上に位置している。この扇状地は近世の山地からの押出によりさらに厚く堆積し、丘陵状の地貌を呈している。

遺跡は、この扇状地の右扇端に立地しており、東側の広井川が形成した肥沃な低湿地帯に接している。

第２節　歴史的環境

本遺跡の立地する関田山脈の山麓および低湿地を狭んだ東側の長峰丘陵上には多くの遺跡が確認されている。

この関田山系と長峰丘陵によって狭められた外様平は、広井川の肥沃な低湿地帯を形成し飯山市内でも有数の穀倉地帯となっている。

外様平周辺における考古学研究は明治時代に溯り、顔戸出身の北沢量平や宮沢甚三郎などによって遺物の報告がなされている。その後、やはり顔戸出身の郷土史家栗岩英治が郷土の古代史について多くの論文を残している。しかし、学術的調査がほとんど行われず、遺跡も現集落内に存することにもより、部分的な報告にとどまっていた。

その後の基盤整備事業などの実施により、遺跡の宝庫でありながら飯山市内でも不明瞭な地域となっている。

現在までに判明している事は関田山系山麓の顔戸地区から北側の小境・北条方面にかけて弥生中期の大集落があったろうと予想されること。それ以前の縄文時代の遺跡は、小規模集落が点在し、大規模な遺跡は確認されていないこと。長峰丘陵上には、弥生中・後期・古墳時代の遺跡が多くあり、おそらく小首長の存在するような地域を形成していたであろうということ。平安～中世に至っては、「常岩牧」の中心地帯と推測されるように、開拓が本格的に始まっていたであろうということ。さらに、戦国時代の館・山城が多く存在し、いわゆる上杉謙信の「外様衆」の中心地帯であること等が挙げられる。

栗岩英治翁の碑

第38図　調　査　区　（1：1000）

第II章　調　　査

第1節　経　　過

調査は釜渕遺跡と併せて行なった。これは圃場整備事業の施行が年度内に終了するためには、11月の降雪時までに完了させなければならず、また梅雨時までに土砂の移動を行いたいとの要請のため止む得ない方法であった。

調査地区は現況が水田であり、扇状地に階段状に並ぶ。したがって地形改変が著しく、調査区の選定には苦慮した。そのため事前に地点を選定して試掘を行ったが、対象地区上半部はかなり削平されていた。そのため下半部の比較的地形改変が加えられていないと考えられる地点を選定した（A地区)。

A地区は、標高 327ｍを測り、南側へは急斜面で低湿地に接する部分で、一枚田である。東側の半分程はすでに削平されており、耕作土下は黄褐色粘土層の地山であった。遺構等は全く確認されず、さらに遺物も出土しなかった。西側部分は、逆に黒色土層が厚く堆積しており、約１ｍを調査したが地山面には達しなかった。

地表下約50cmのレベルに弥生中期土器片の出土する面があったものの、細片であり生活面も探し得なかった。

なお、A地区の調査によって遺構等の検出がないまま、釜渕の調査も継続しているため、北顔戸遺跡の調査は終了することとした。

８月中旬に入り、圃場整備が急ピッチで進められていたが、A地区東側90mの地点で多量の土器片が出土しているのを、現地視察をしていた田村調査員によって発見された（B地区)。

遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器で時代的には、弥生・古墳・平安の各期に亘っていた。

B地区は、上方（西）より一段下った面で、重機もぬかり込むほどの湿地であった。状況から居住空間とは考えられず、周辺部分であろうと考えられる。

第2節　遺　　物

１．A地区出土遺物（第39図、図版三十四 72）

A地区からは、遺物包含層（黒色土層）より、ポリ袋半分（数十点）ほどの土器片が出土している。土器は磨滅したものは少なく残りは良い。

出土品は弥生土器がほとんどだが、他に、平安ないし中世と思われる甕の小片がある。

(1)　弥生土器（第39図１～８）

弥生土器は、壺・甕がある。

壺（１～６）　壺は、いずれもヘラないし棒状工具による沈線文と、地文としての縄文をもつ。なお、４～６は同一個体と思われる。調整は、外面はいずれもヘラミガキで、内面は１・３がナデ、２・４～６は横ハケである。色調は、１・２が淡茶褐色、４～６は黒灰色を呈する。

甕（７・８）　甕はいずれも櫛描波状文をもち、内面はナデ、淡褐色を呈する。

小結　以上の弥生土器は、壺が中期栗林式的であり、甕は後期的である。

２．B地区出土遺物（第39～41図、図版三十四 73～三十五）

B地区からは、遺物包含層（黒色土層）より、弥生土器・古墳時代の土器・平安時代の土器が、コンテナ１箱分出土している。A地区同様に磨滅したものは少なく、土器の残りは良い。

(1) 弥生土器（第39図９～19、第40図20・21）

弥生土器は、壺・甕・高杯がある。

壺（９～15）　壺はいずれも、ヘラないし棒状工具による沈線文と、地文としての縄文をもち、11・13は沈線間に刺突文を加え、12は櫛描平行文を加えている。

内面の調整は、９～11・15がナデ、12～14が横ハケ。

色調は、９・15が淡褐色、10が茶褐色、13が暗茶褐色、11・12・14が淡褐色を呈する。

なお、11は外面に赤色塗彩されている。また、図示していない出土品の中に赤色塗彩された壺破片が目立つ。

甕（16～19）　16・17は櫛描の懸垂横帯文をもつもので、16は縄文を地文とし、17は櫛描波状文を地文とする。16は鍛冶田Ｃ地点に通有の甕である。18は櫛描平行線文をもつ。

19は小型ないしミニチュアと思われる甕の口縁部で、頸部に櫛描平行線文をめぐらし、口縁部に櫛描波状文をめぐらす。

内面の調整は、16は口縁から頸部にかけては横ナデ、体部は横ハケ。17は横ハケ。18・19はナデ。

色調は、16・17が茶褐色。18・19が淡黄褐色を呈する。

高杯（18・19）　18は赤色塗彩された口縁部片で、口縁部が一部突出する。内外面ともにていねいなミガキが施され、胎色は淡褐色を呈する。口径約22.0cm。

19は脚裾部で、赤色塗彩されていないが、赤橙色を呈している。外面はていねいなミガキ、内面裾部は横ナデ、同脚柱部はハケののちナデを加えている。裾径15.4cm。

小詰　以上の弥生土器は、中期的なものと後期的なものの両方を含んでいる。そして、赤色塗彩されたものが目立つことや、中期末に編年される鍛冶田Ｃ地点に通有の甕（16）がみられることなどから、釜渕遺跡と異なり、中期後葉～後期にわたっていることが推定される。

(2) 古墳時代の土器（第40図20～24）

古墳時代の土器は、二重口縁壺（20）、坩（21）、低脚杯（22）、高杯（23・24）などの土師器が少量あり、須恵器はない。

二重口縁壺（20）　口縁部小片である。古式の二重口縁壺は頸部が垂直に近く、かつ長く立ちあがり、口縁部も大きく開くが、本例は、短く外方に開く新しい様相を呈している。

内外面とも横ナデで、淡黄褐色を呈する。

坩（21）　大型の坩と思われるが、上下逆にすれば弥生後期の壺の可能性もある。外面はていねいな縦ヘラミガキで、赤色塗彩が施される。内面はハケののちナデ。赤橙色を呈する。

低脚杯（22）　一応低脚杯としておいたが、上下逆にすれば、弥生土器の蓋かもしれない。低脚杯杯とすれば、浅く大きく開く杯部と、短い脚部をもつものとなる。外面はナデ。内面はヘラケズリ。淡黄褐色を呈する。

高杯（23・24）　23は裾部小片で、薄手のものである。外面はミガキ。内面は横ナデ。淡黄褐色を呈する。

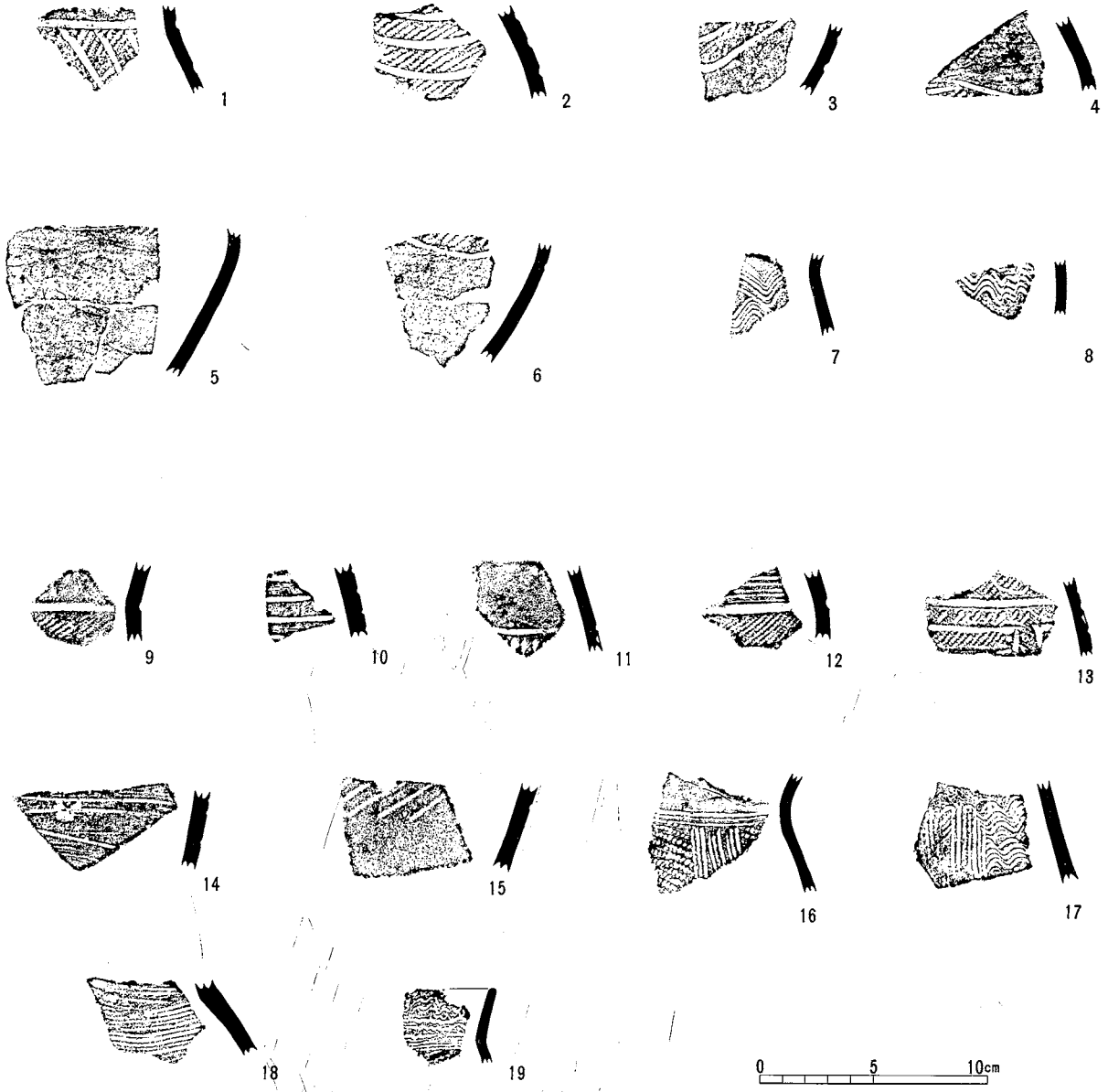
24は脚部で、やや中ぶくらみの脚部から、段をもたずに裾部へ続く形態のものである。杯部との接合は、杯部にほぞを設ける型式のものと推定される。外面はヘラミガキ、内面は一部にハケを施す。赤橙色を呈する。

小詰　以上の古墳時代の土器は、二重口縁壺や高杯の形態から、概ね和泉期後半のものと思われる。

(3) 平安時代の土器（第40・41図）

平安時代の土器は、完成品で出土した２点（第　図35・36）の他、土師器杯・甕、須恵器杯・甕などがある。

土師器杯（25・26）　25・26ともに内面が黒色処理される所謂黒色土器で、図示していない杯の破片も黒色土器がほとんどである。25は大型で深い形態のもので、外面はロクロナデ、内面はていねいなヘラミガキを施す。淡褐色を呈する。口径15.0cm、器高5.5cm。



第39図　出土遺物１　１～８：Ａ地区　９～19：Ｂ地区　（１：３）

26は底部片で、底部は手持ちヘラケズリが施される。なお、図示してない杯片で底部調整の確認できたものは２点あり、１点は手持ちヘラケズリ、１点はロクロヘラケズリである。

土師器甕（27～29・36）　甕は口縁部の形態から、外反するもの（27）、直線的に外傾し口縁端面をもつもの（28）、端部をつまみ上げるもの（29）、内湾ぎみで頸部がやや凹むもの（36）の４タイプがあり、内湾ぎみで頸部が凹むものが多い。

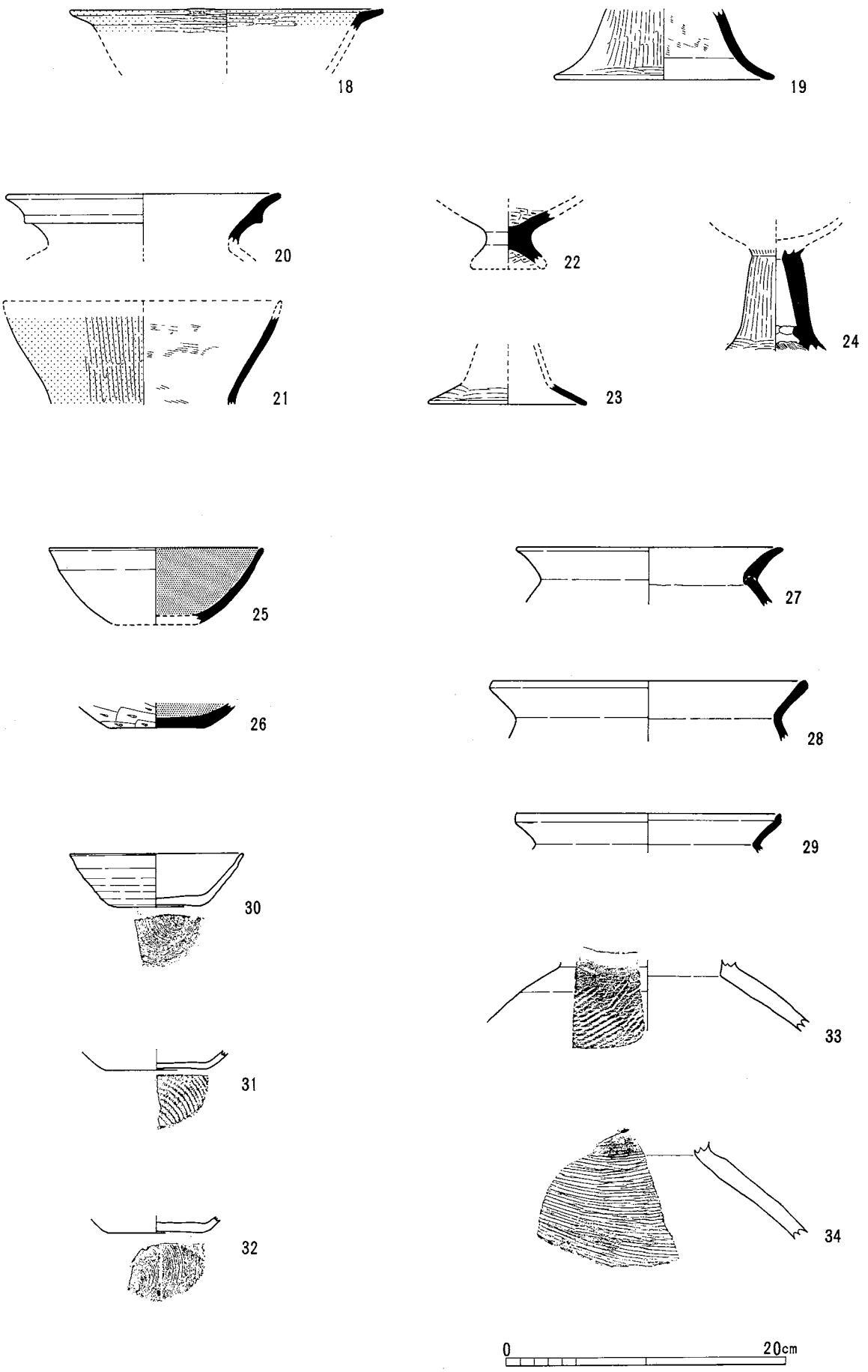
いずれもロクロ成形されており、全体にロクロナデの痕跡がよく残っている。36は体部下半および底部にヘラケズリを加えている。

色調はいずれも淡褐色系統で、27・36は炭化物の付着が著しい。

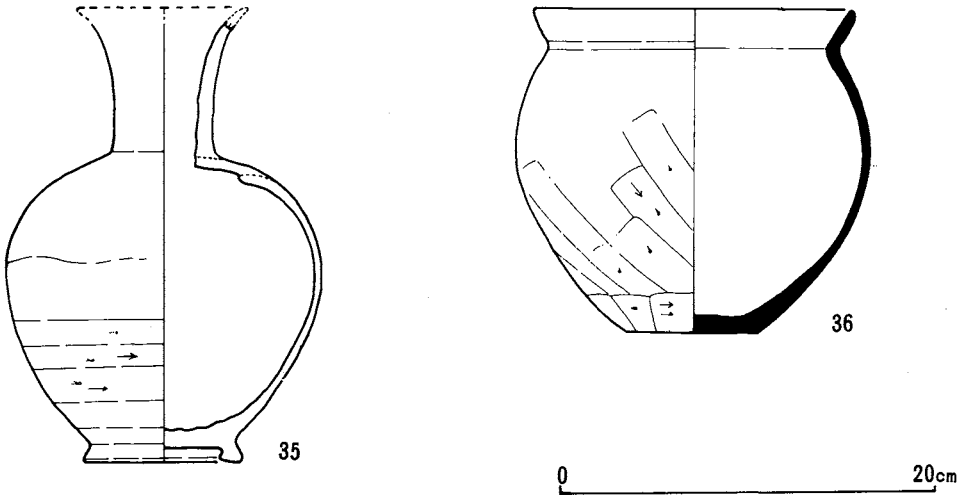
完形の36は口径17.0cm、胴最大径18.6cm、器高17.2cmである。

須恵器杯（30～32）　全形のわかるものは30のみで、小さな底部から直線的に外に立ちあがる形態のものである。いずれもロクロ成形で、底部の切りはなしは、30・31がロクロ糸切り、31は静止糸切りと推定される。

焼成は、31が青灰色で堅徴である他は、焼きが概してあまく、淡灰色を呈するものが多い。30は口径12.2cm、器高



第40図　出土遺物２　Ｂ地区　（１：４）



第41図　北顔戸出土遺物３　Ｂ地区　（１：４）

3.8cm。

なお、32の底部外面にはヘラ記号「＋」がある。

須恵器甕（33・34）　いずれも頸がすぼまり、肩の張る形態のものと推定される。体部外面には平行叩きが施されるが、34は叩き板の木目に対して斜めに叩き目をケズリ込んだのか、あるいは叩き板に縄をまいたのか、所謂叩き状を呈している。

色調は、両者とも表面は灰色だが、断面内側は赤味を帯びている。

須恵器壺（35）　口縁端部を欠くほかは完形である。胴部が球形に近い形態のもので、胴部下半が直線的にならない。ロクロナデの後、胴部外面下半にロクロケズリを加える。高台は貼り付け高台で、底部の切りはなしは静止糸切りと推定される痕跡がかすかに残る。

また、上半部には緑灰色の自然釉がかかる。

小結　以上の平安時代の土器は、土師器杯の形態・底部調整方法、須恵器杯の多くあること、須恵器壺の形態などから、飯山市旭町遺跡群北原遺跡出土品に類似しており、９世紀後半～10世紀前半の年代があてられる。

第3章　まとめ

今回の北顔戸遺跡の調査は、調査体制が不充分であったことに加え、調査地が階段状の水田でかつ谷状地のため明確な遺構等が検出できず、充分な成果を得ることができなかった。

しかし、今回の発掘によって以下の知見を得ることができた。

弥生時代には、関田山脈東麓の扇状地に遺跡が密集してあることがこれまでの分布調査等で知られていたが、今回の調査で、現況では人々の居住地に適さないと思われる地点から、残りの良好な弥生時代中・後期の土器が出土したことから、関田山脈東麓の扇状地にはさらに濃密な遺跡が分布することが推定されるようになった。外様平の弥生時代の開拓は、きびしい冬期の自然条件にありながら、私達の予想を越えて盛んであったのだろう。

また、居住地に適さない所という私達の先入観に左右されず、努めて発掘を行うべきであることを痛感している。

古墳時代前半期（和泉期後半）の土器の出土は、少量ながらも、当地における集落の存在を予想させることとなった。これまで外様平を始め飯山地方の古墳時代の生活跡は、類例が少なく、未だ調査・研究の途についたばかりの段階であり、今回の前半期土器の出土は少量ながらも、外様平ひいては北信濃の古墳文化の解明の良好な資料になると考えている。

平安時代中期（９世紀後半～10世紀代）は、都では藤原摂関家が栄華を極めた時代であり、地方は「荘園」が相ついで設置された時代と言われている。

飯山地方の平安時代における遺跡の急増は、この「荘園」にかかわる可能性が高いと指摘されている[注1]が、今回の調査で出土した土器はまさにこの時期にあたり、しかも、飯山地方の編年では今のところ最も古い北原遺跡段階(9世紀後半～10世紀前半）にあたり、当地の平安時代の開発が飯山でも早い段階であることを物語っている。

なお、調査員田村が採集した須恵器の壺と土師器の甕は、重機による圃場整備作業中にもかかわらず、ほぼ完形に復元された優品であり、貴重な文化財となった。

また、今回の調査では明確な遺物は出土しなかったが、当遺跡の北側には「顔戸館（ごうどたて）」と呼ばれる館跡が良好に残されている。中心地および周辺部の調査が今後重要となろう。

以上、今回の発掘の成果を簡単に述べてきた。限られた調査体制・期間の中で、一定の成果が得られたように思う。しかし、今後の調査体制・調査方法の再検討がなされなければならないことを痛感している。

注１　飯山市教育委員会　1980　『長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡調査報告書』

飯山市埋蔵文化財調査報告　第16集

釜渕・北顔戸　遺跡

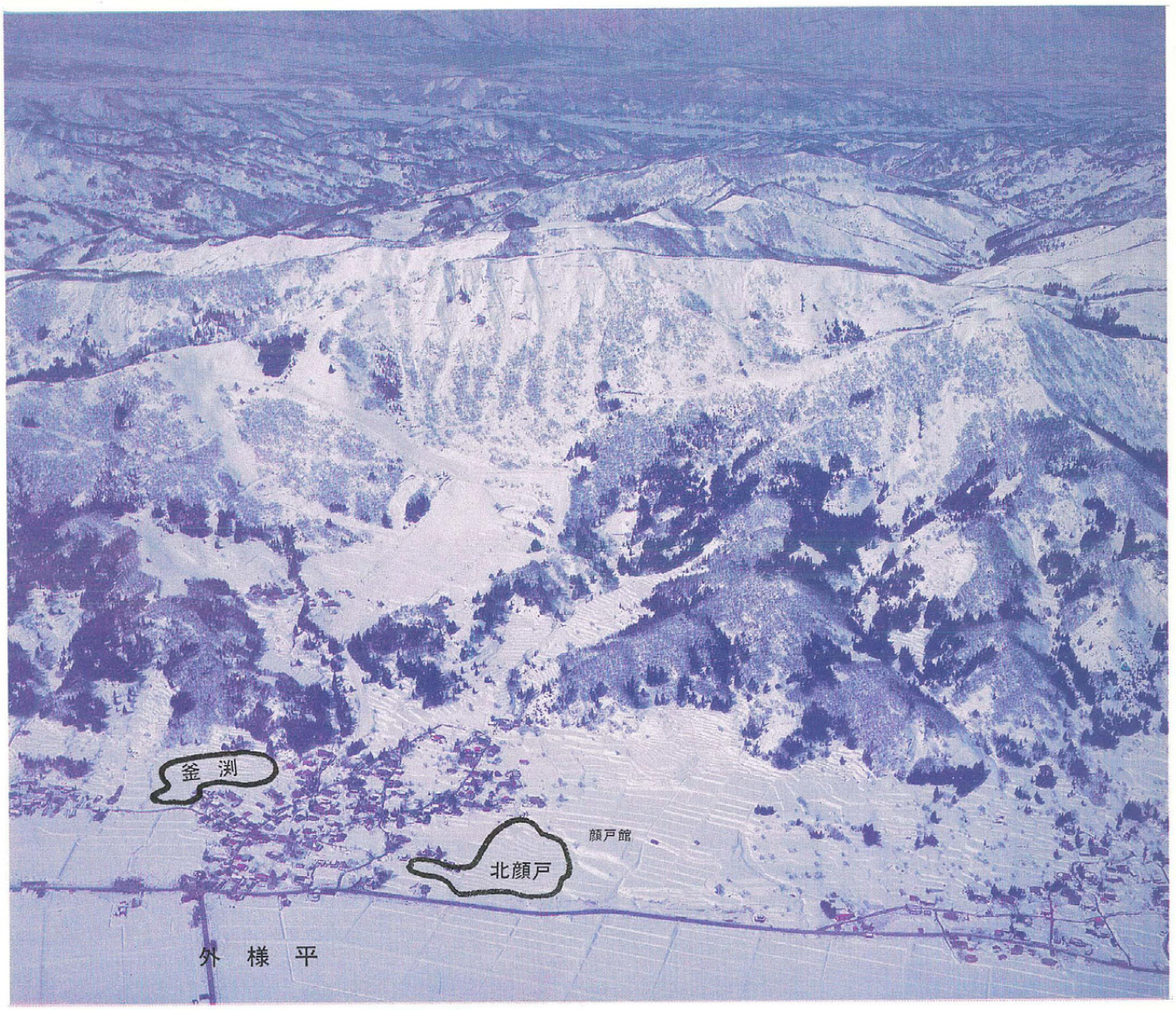
昭和63年３月25日　印刷
昭和63年３月31日　発行

編集・発行　飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1110－1

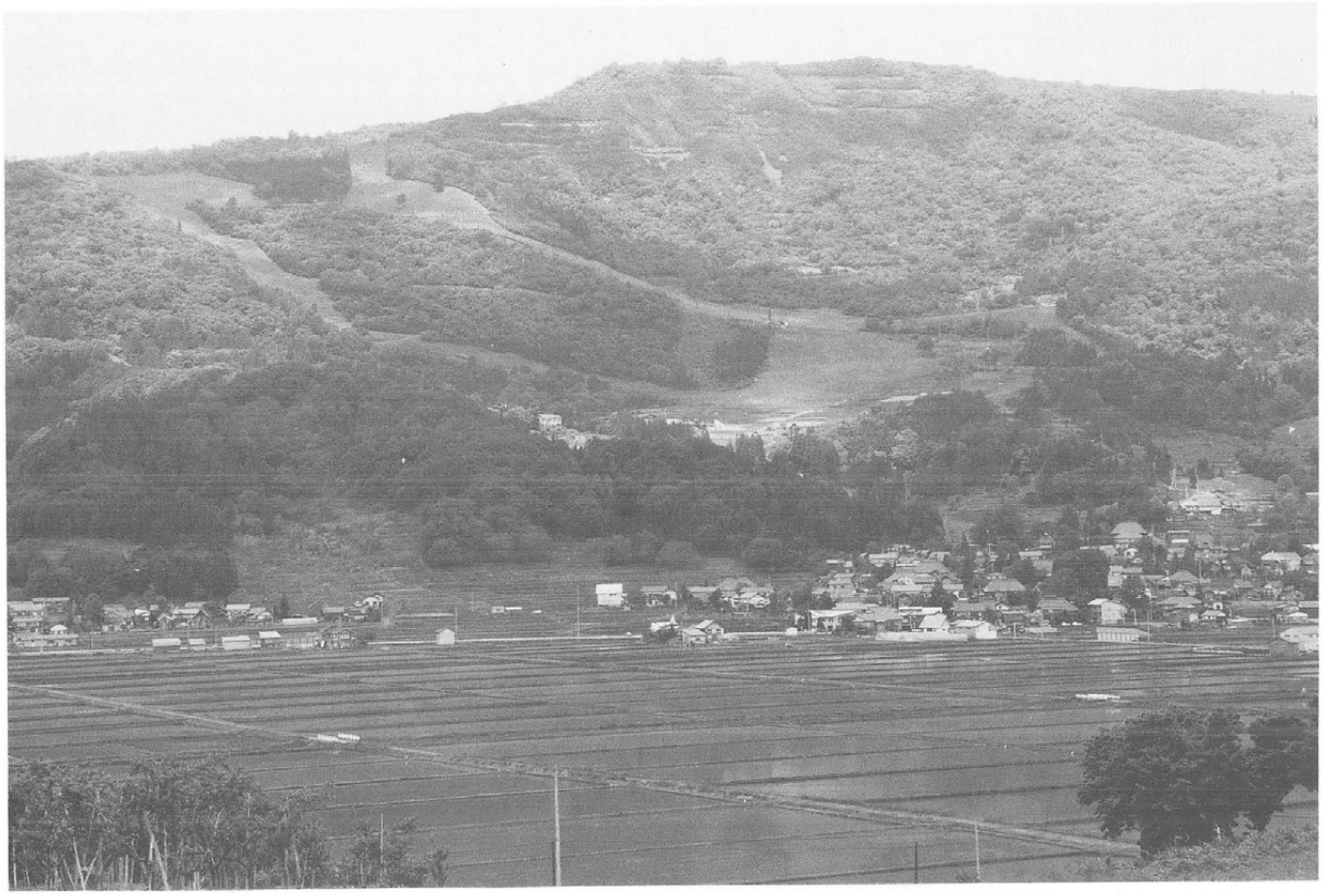
印　　刷　㈲岸田孔版印刷所
長野県飯山市大字常盤5733－1

PLATE

釜渕遺跡



1　遺跡付近の航空写真



2　遠　　景

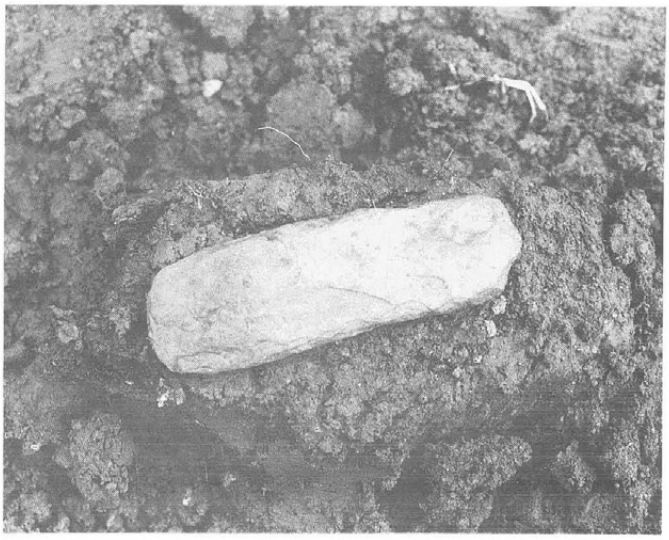
3　近　　景

4　調査開始式

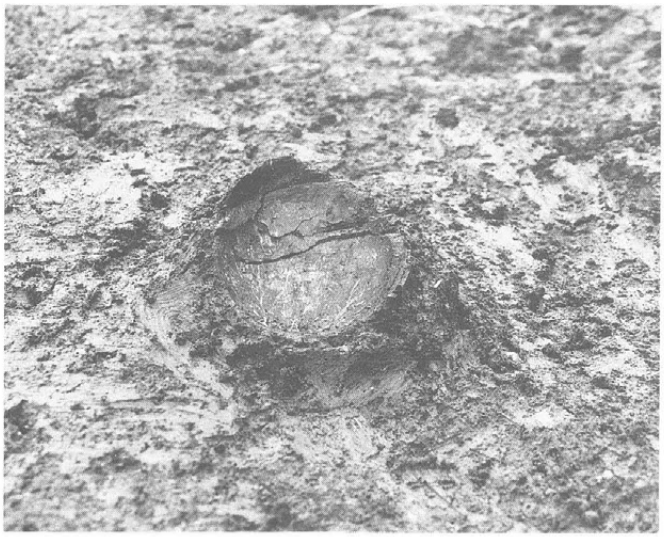
5　Ⅰ区調査風景

6　Ⅱ区調査風景

7　打製石斧出土状態



8　打製石斧出土状態



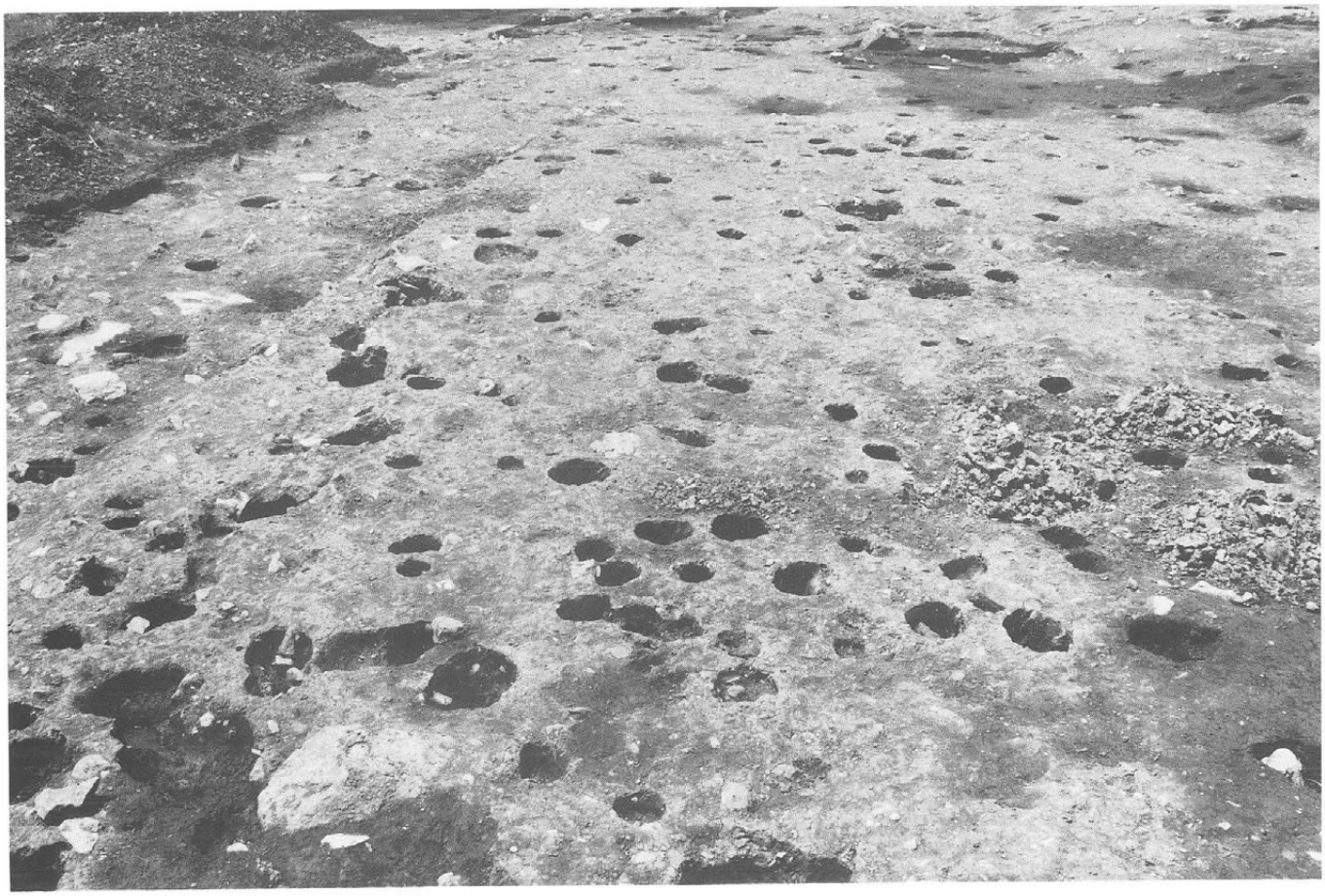
9　漆椀出土状態

10　木簡状木製品出土状態

11　柱根出土状態

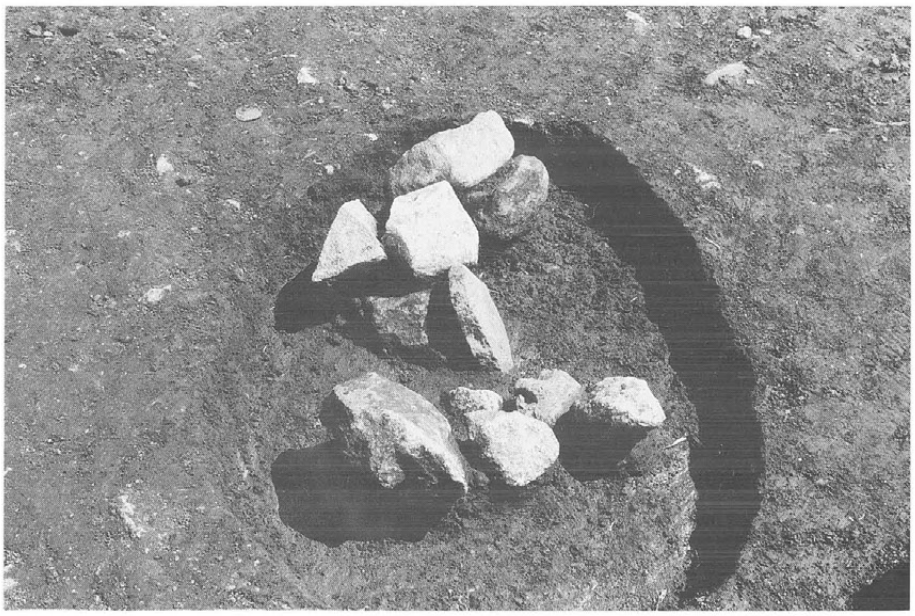
12　P44礎板出土状態

13 遺　構



14 ＳＢ２

図版六



15　ＳＫ１

16　ＳＫ２

17　ＳＫ３

ＳＫ４（弥生）

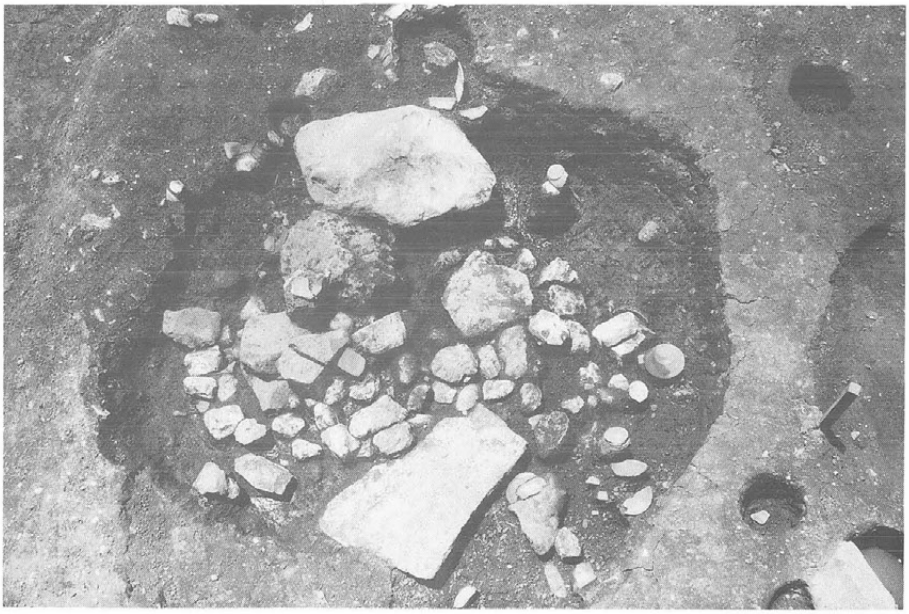
18　遺物出土状態

19　遺物出土状態

20　遺物出土状態

図版八

ＳＫ５（平安）



21　遺物出土状態

22　遺物出土状態

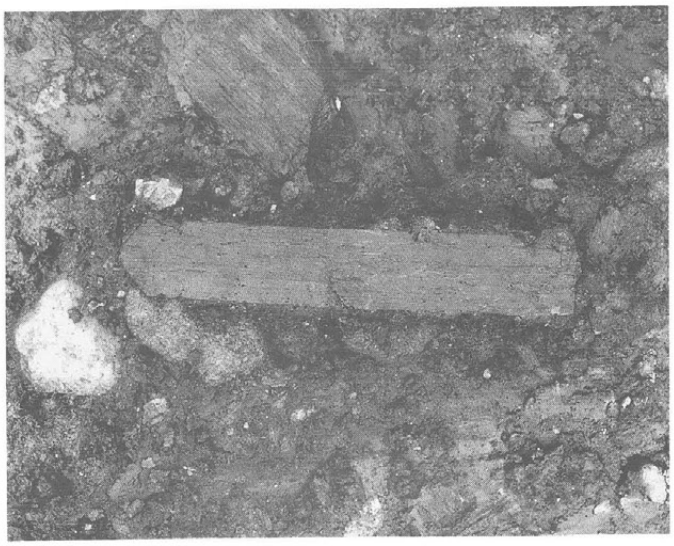
23　調査風景

ＳＫ６（中世）

24　鳥形・不明木製品出土状態

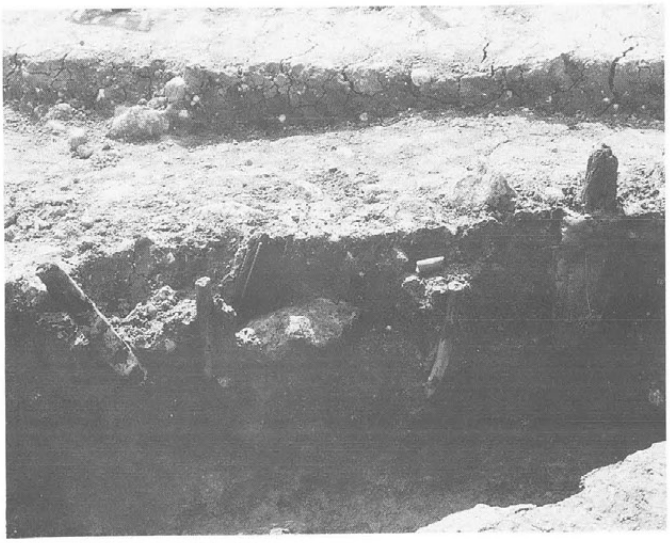
25　鳥形出土状態

26　木製品出土状態



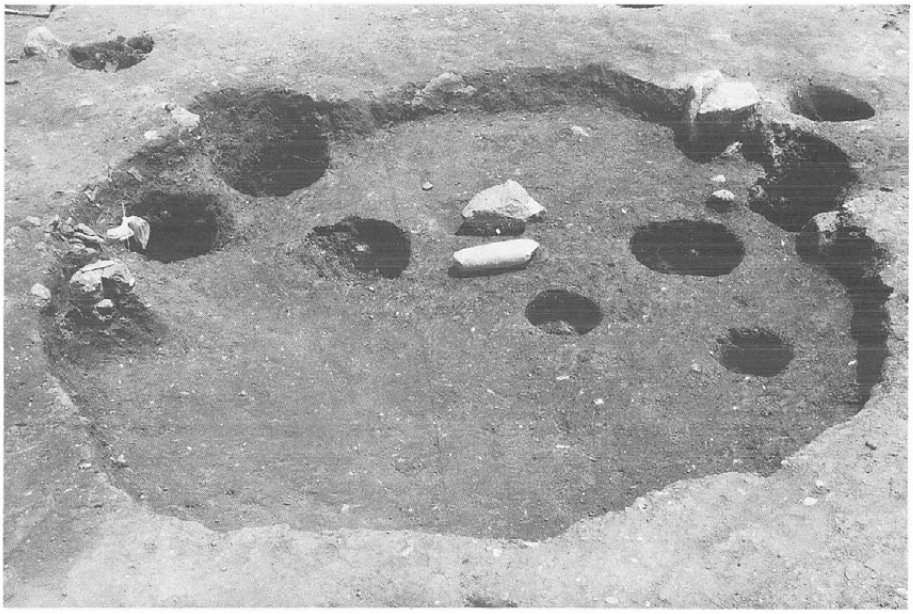
27　木簡出土状態

28　漆椀出土状態

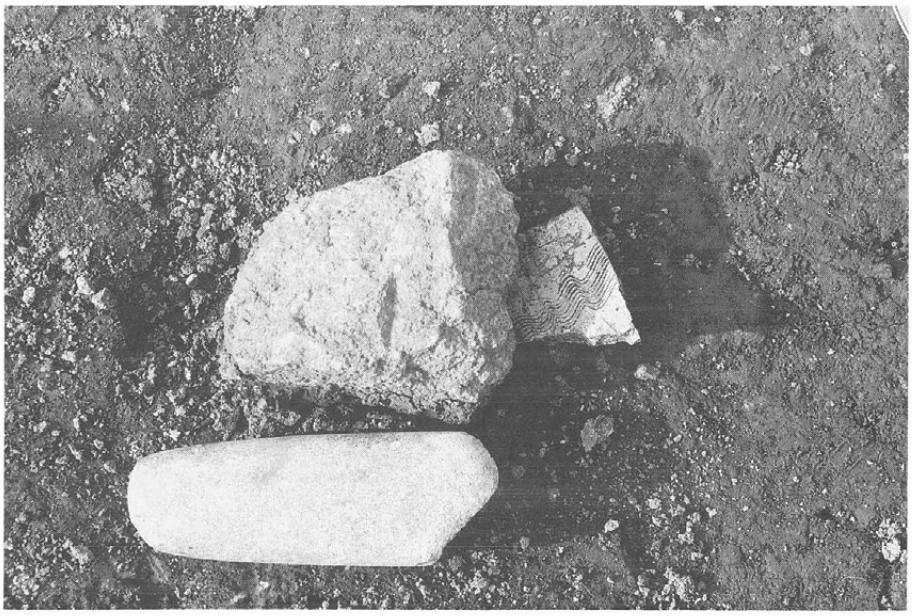


29　杭打ち込み状態

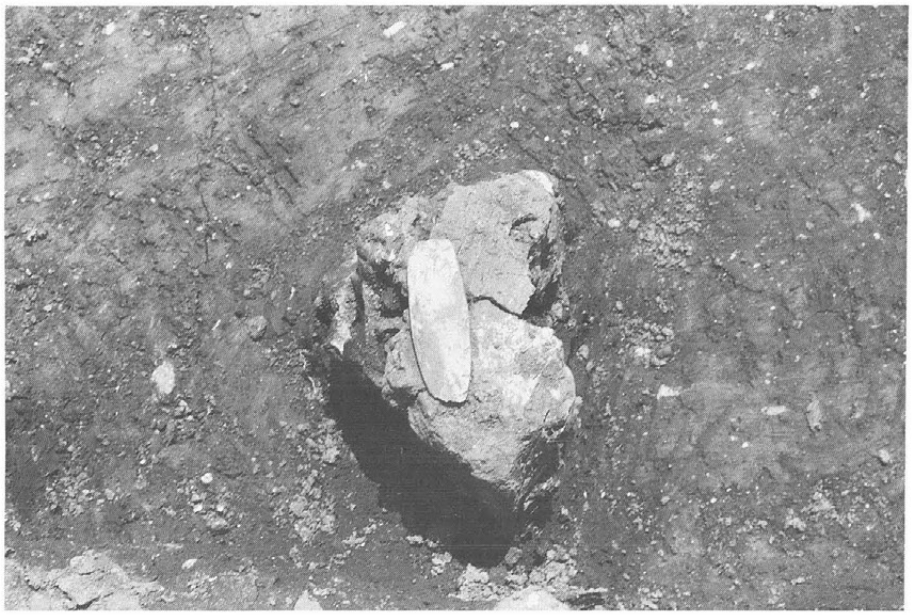
ＳＫ７（中世）



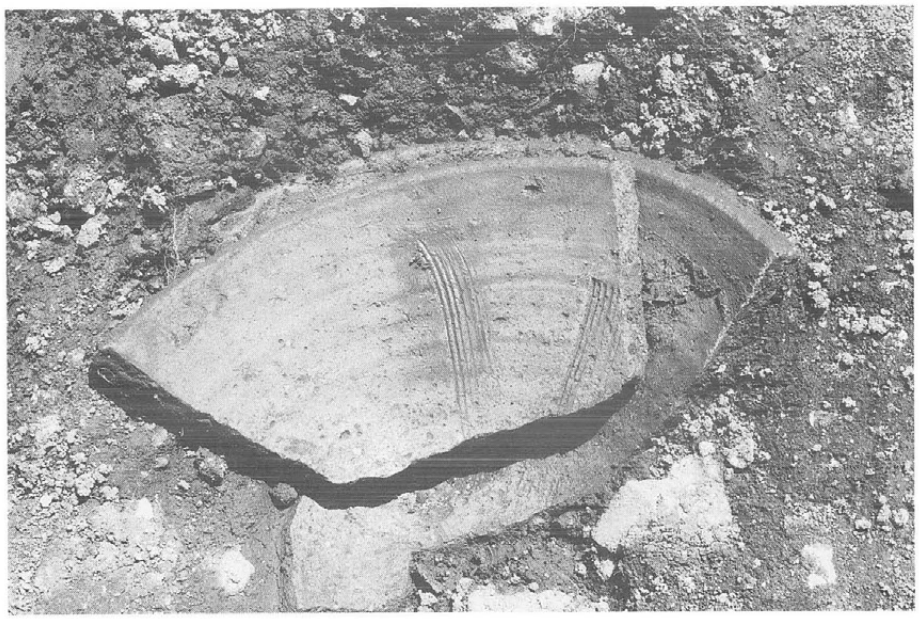
30　遺　構



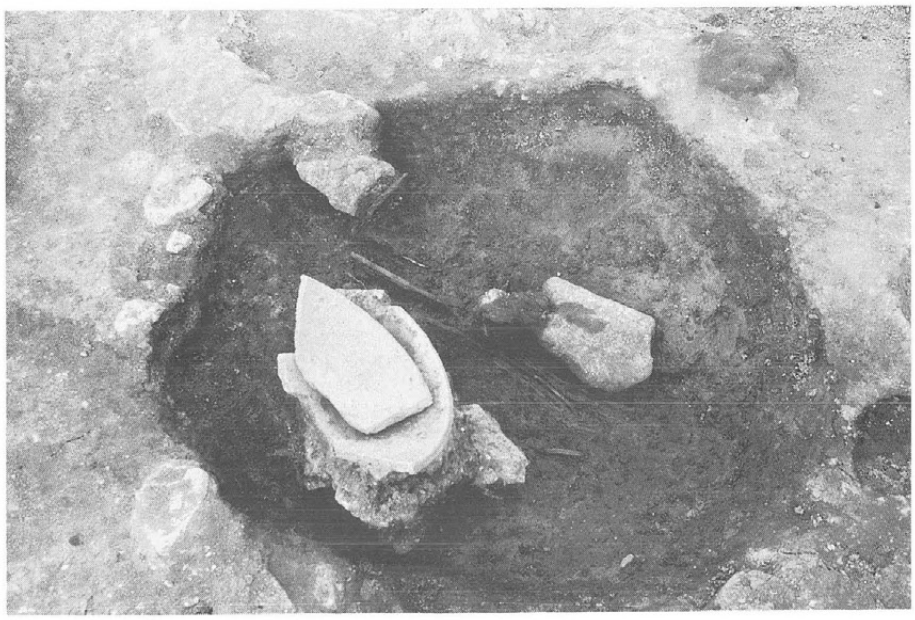
31　珠洲系陶器片・
大型蛤刃石斧出土状態



32　小型磨製石斧出土状態

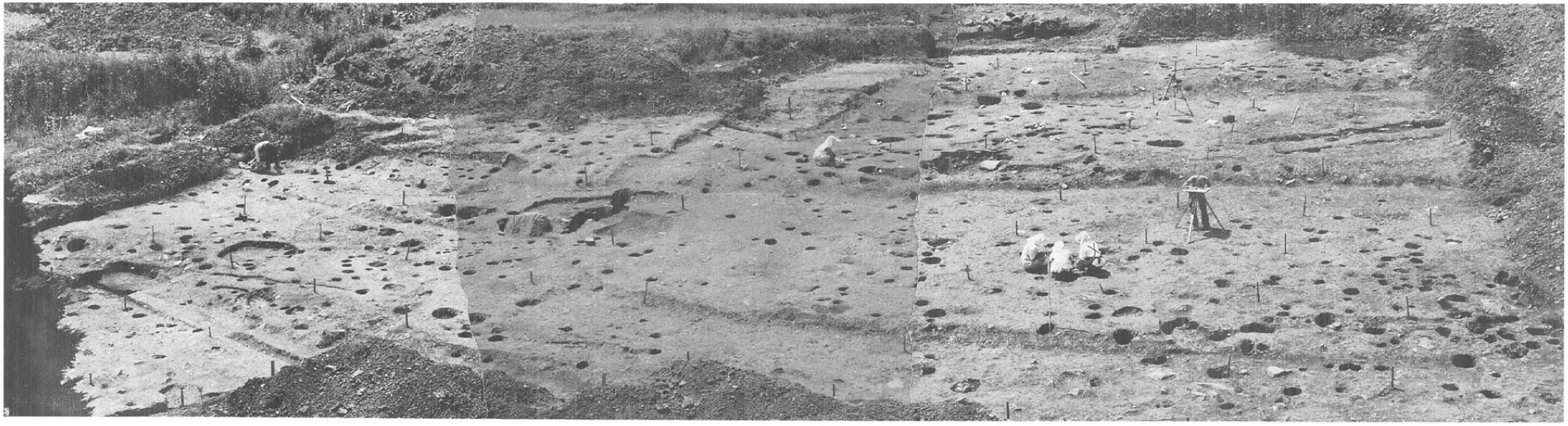


33　ＳＫ８（中世）
珠洲系陶器(鉢)出土状態



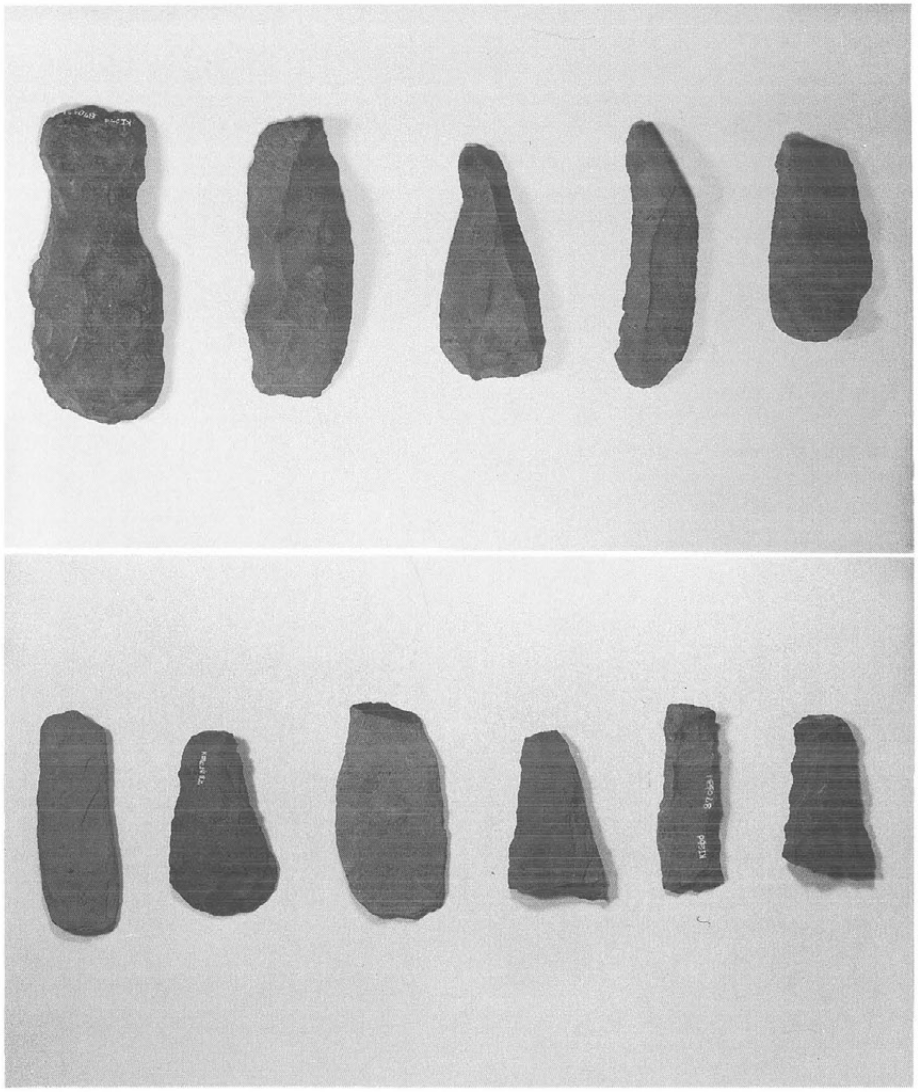
34　ＳＫ８　遺物出土状態

35　ＳＫ９（中世）

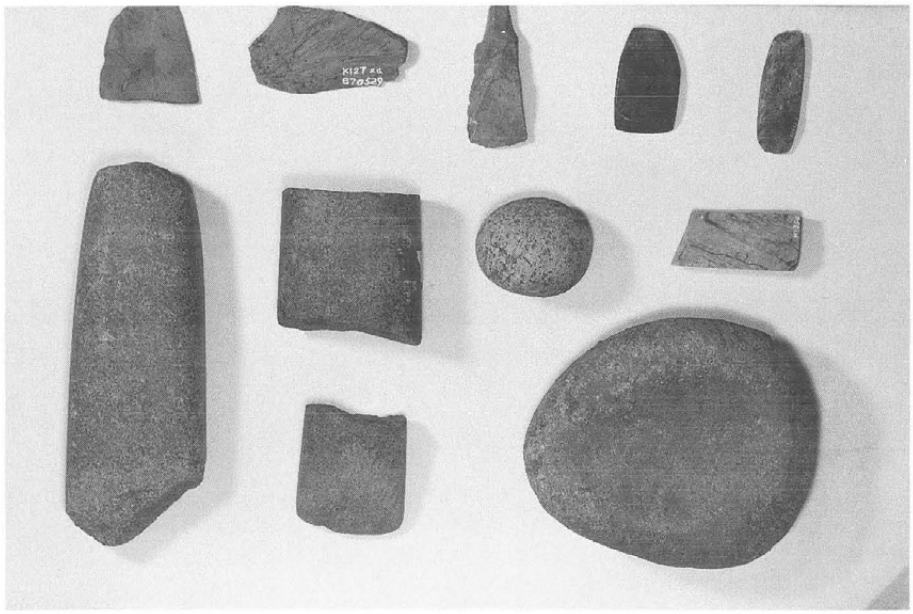


36　遺構全体図

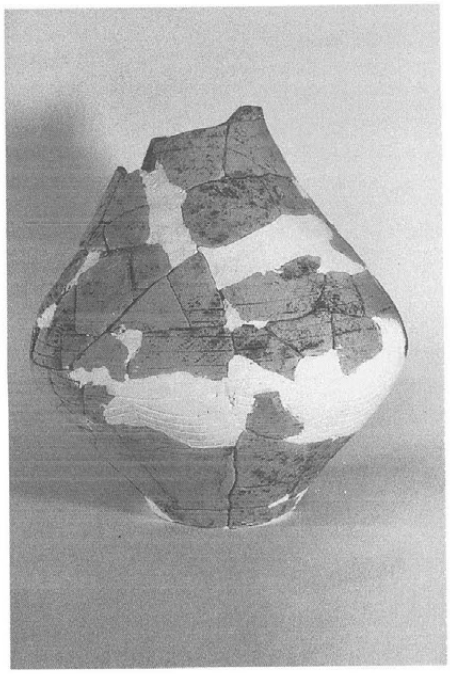
37　遺構全体図



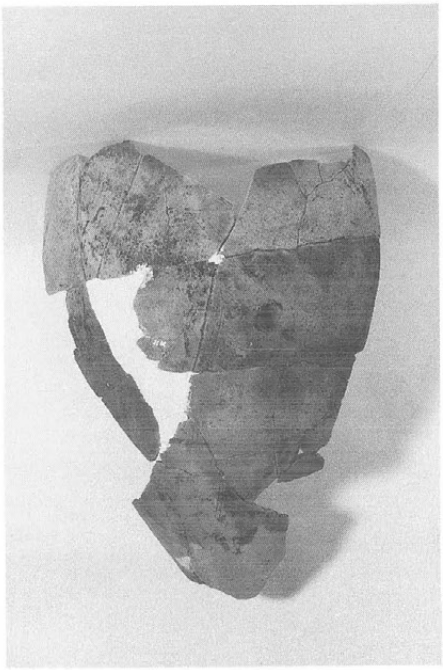
38　打製石斧



39　打製・磨製石器



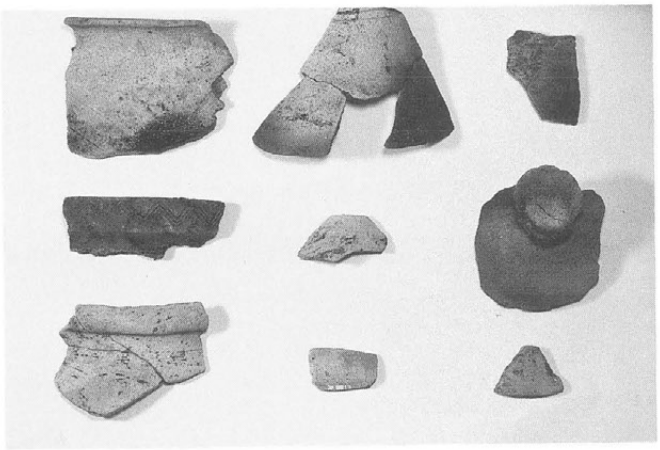
20－1



20－7

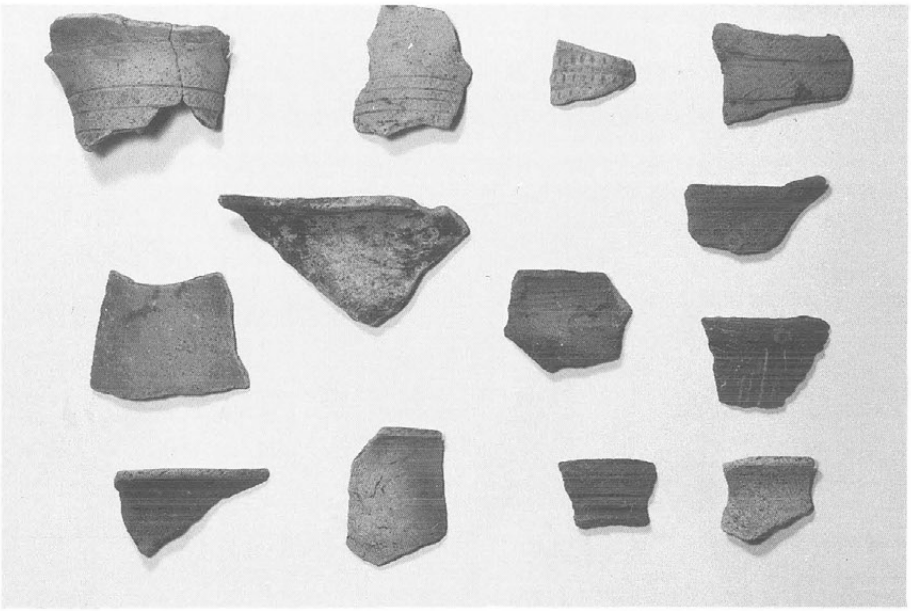
20－4

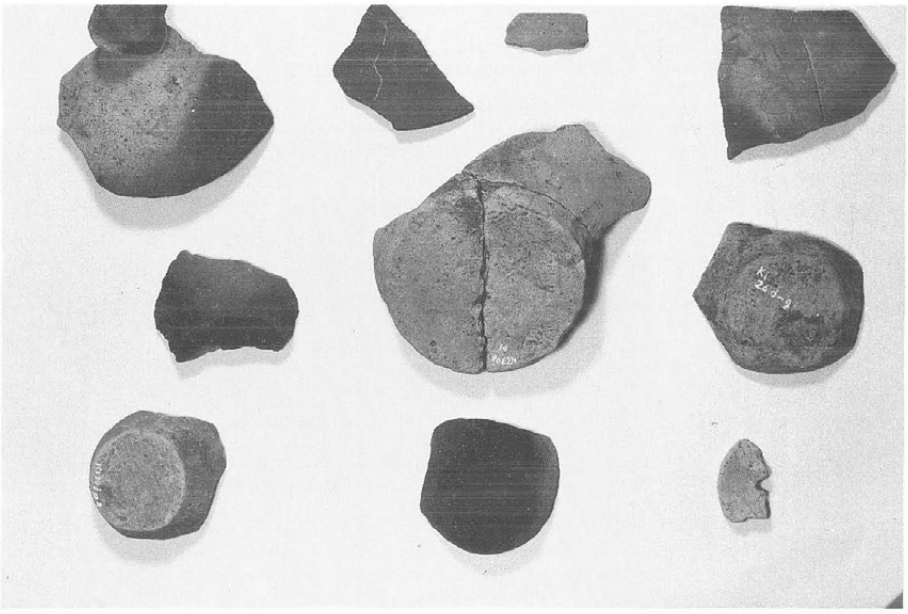
20－13



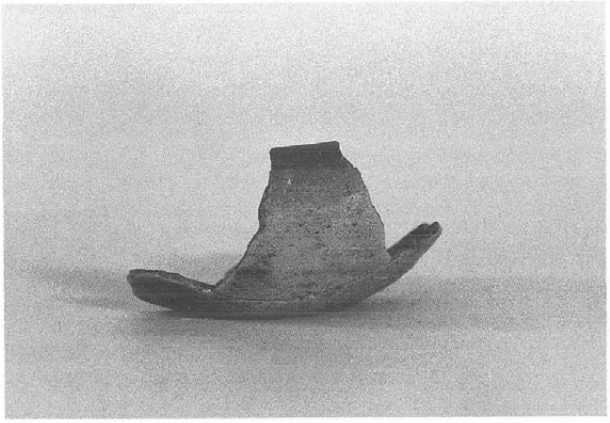
20－12

図版十六

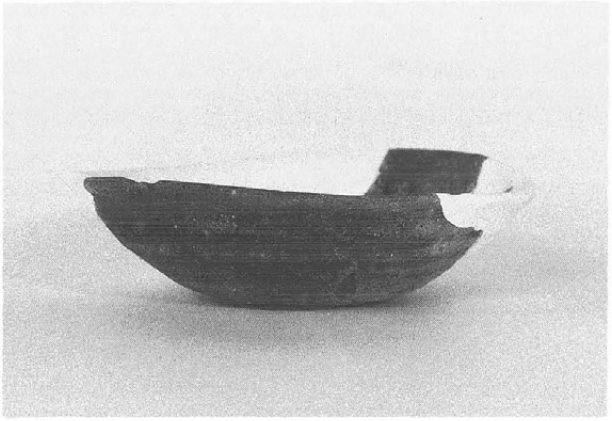




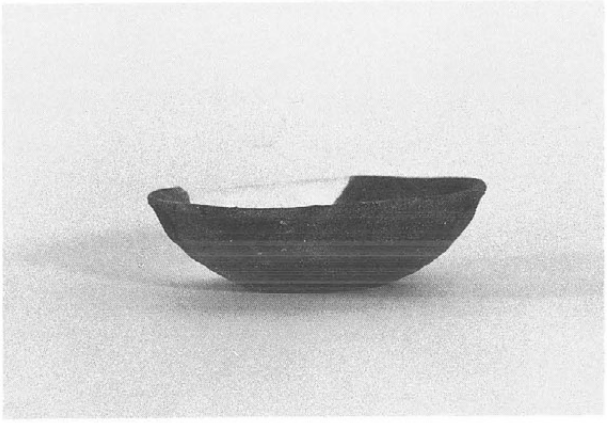
41　遺構外出土弥生式土器（20－17～38）



22－1

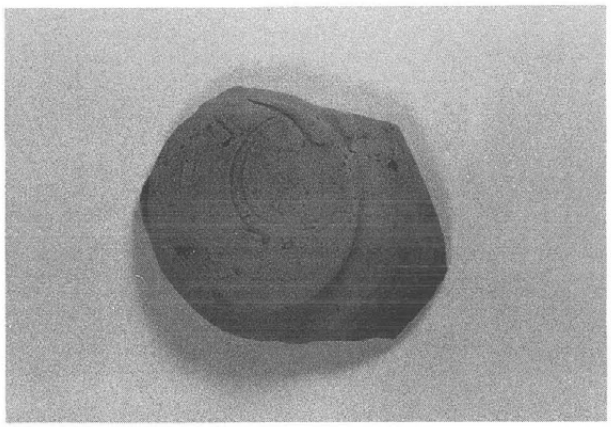


22－5

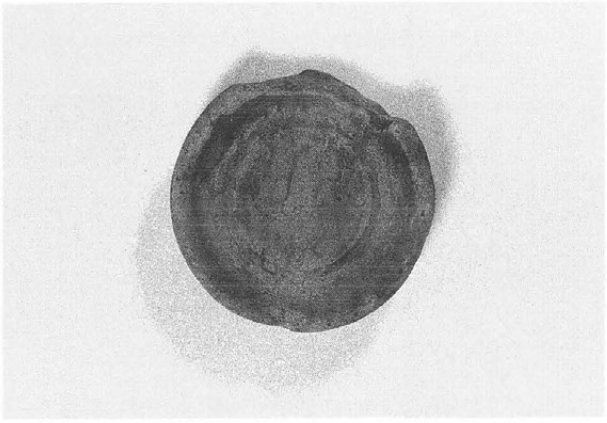


22－6

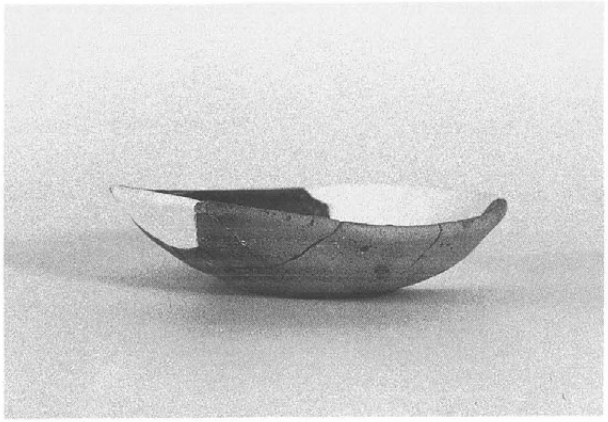
22－7



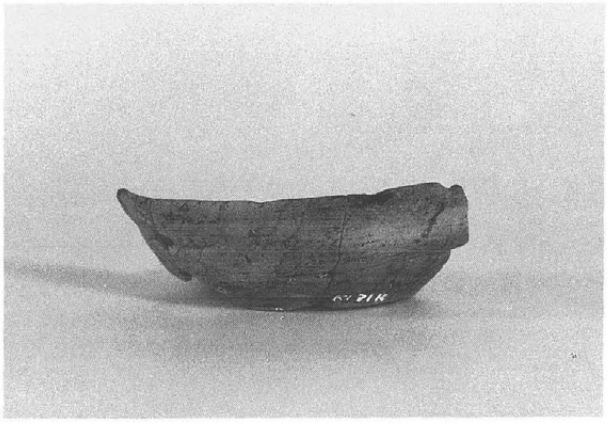
22－11



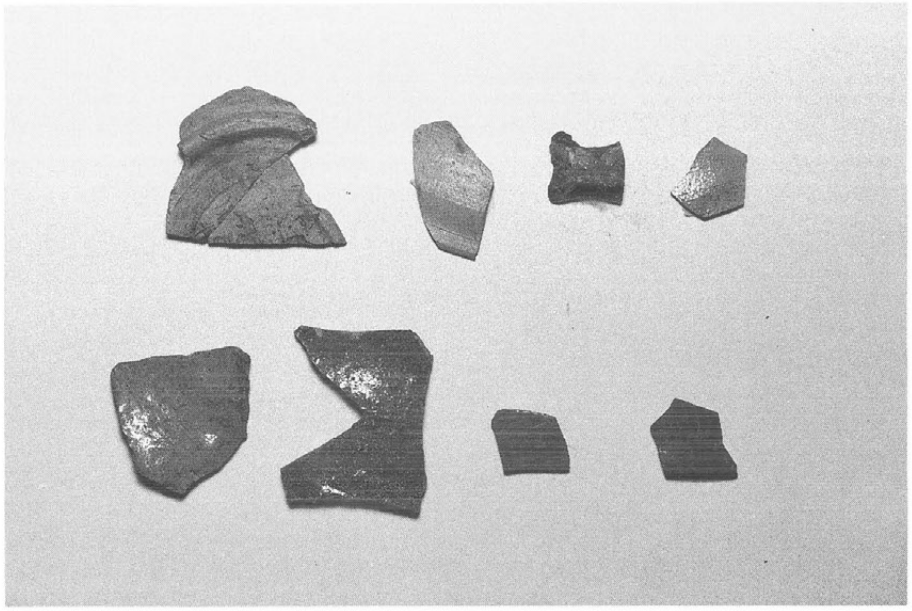
22－13



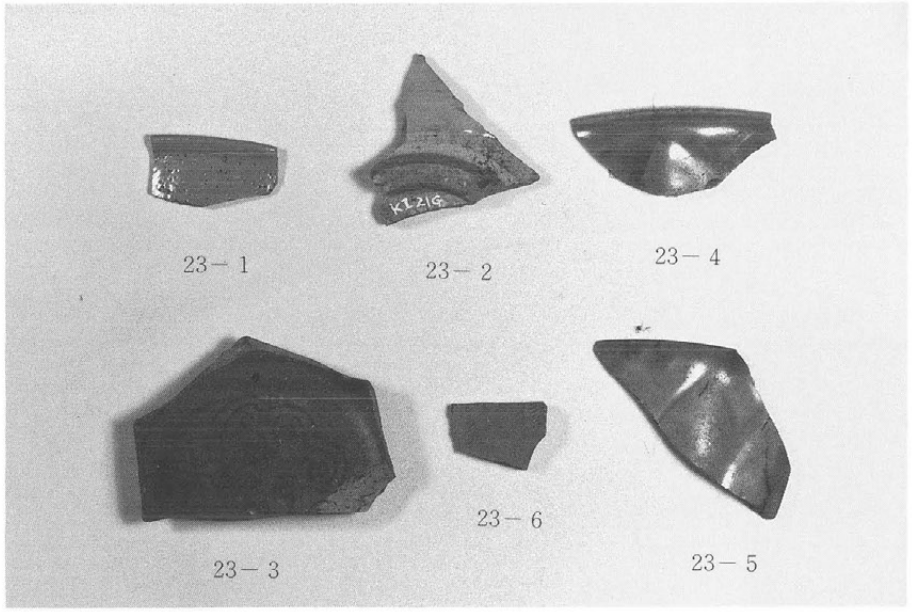
22－22



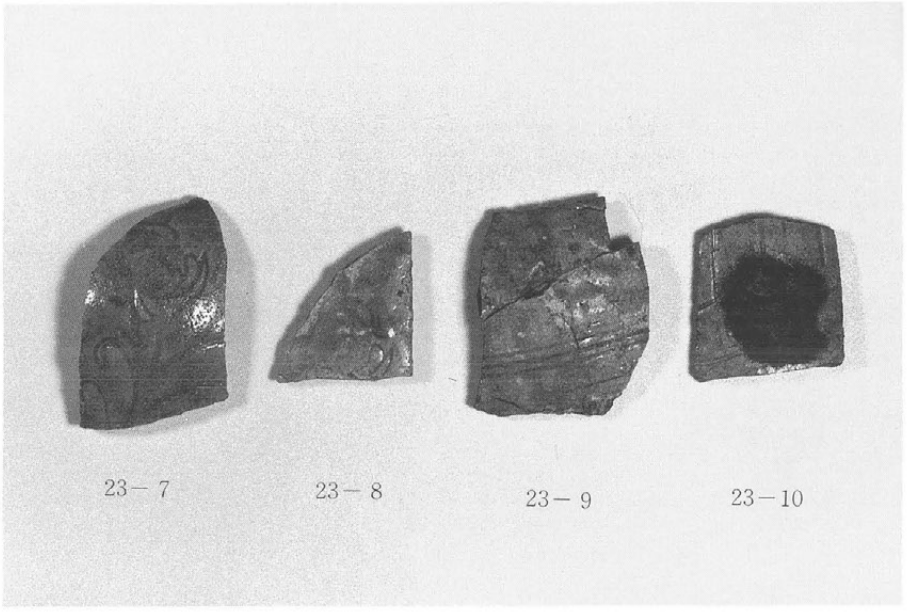
22－23



43　平安時代の陶器（灰釉・緑釉陶器）

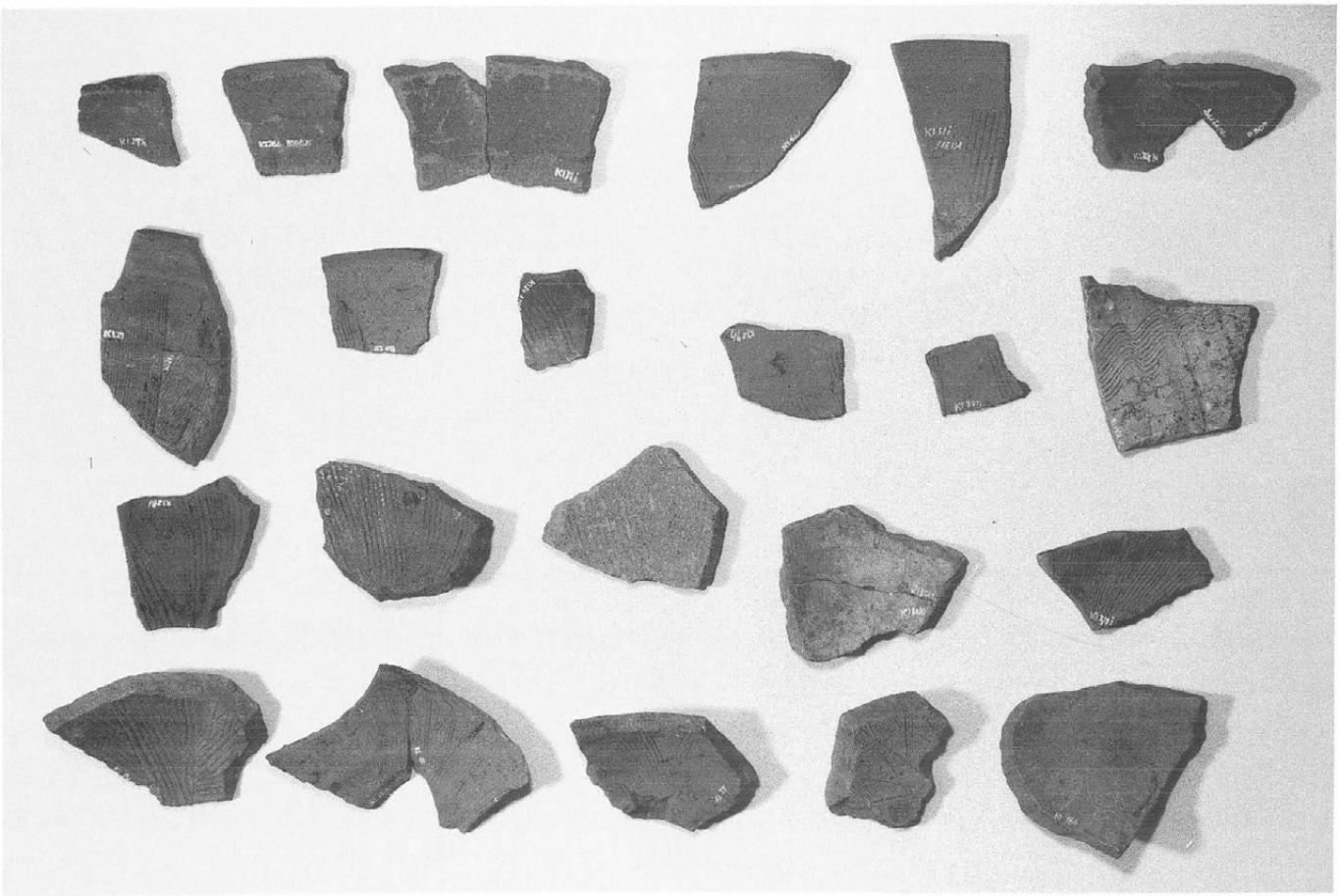


44　中世の中国陶磁

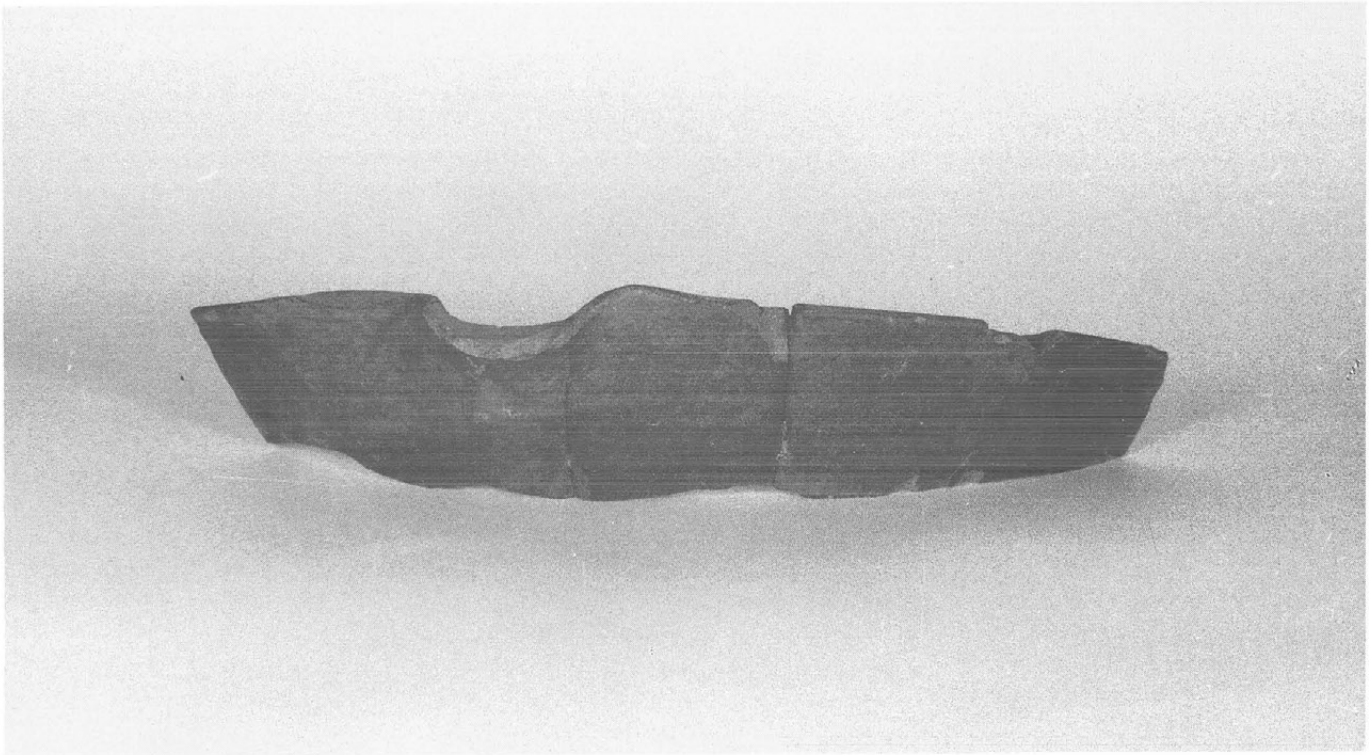


45　古瀬戸

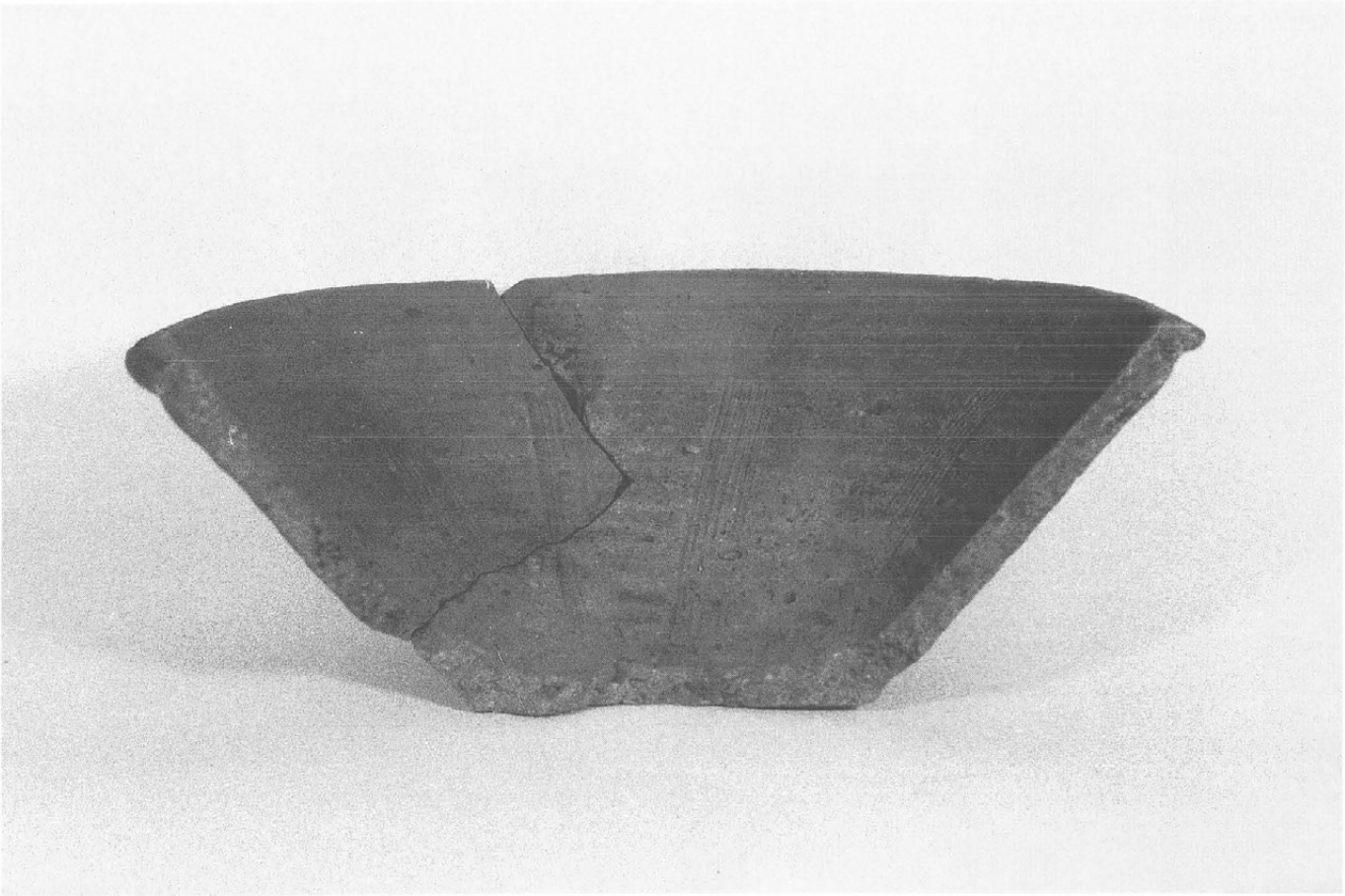
46　珠洲系陶器（甕・壺）



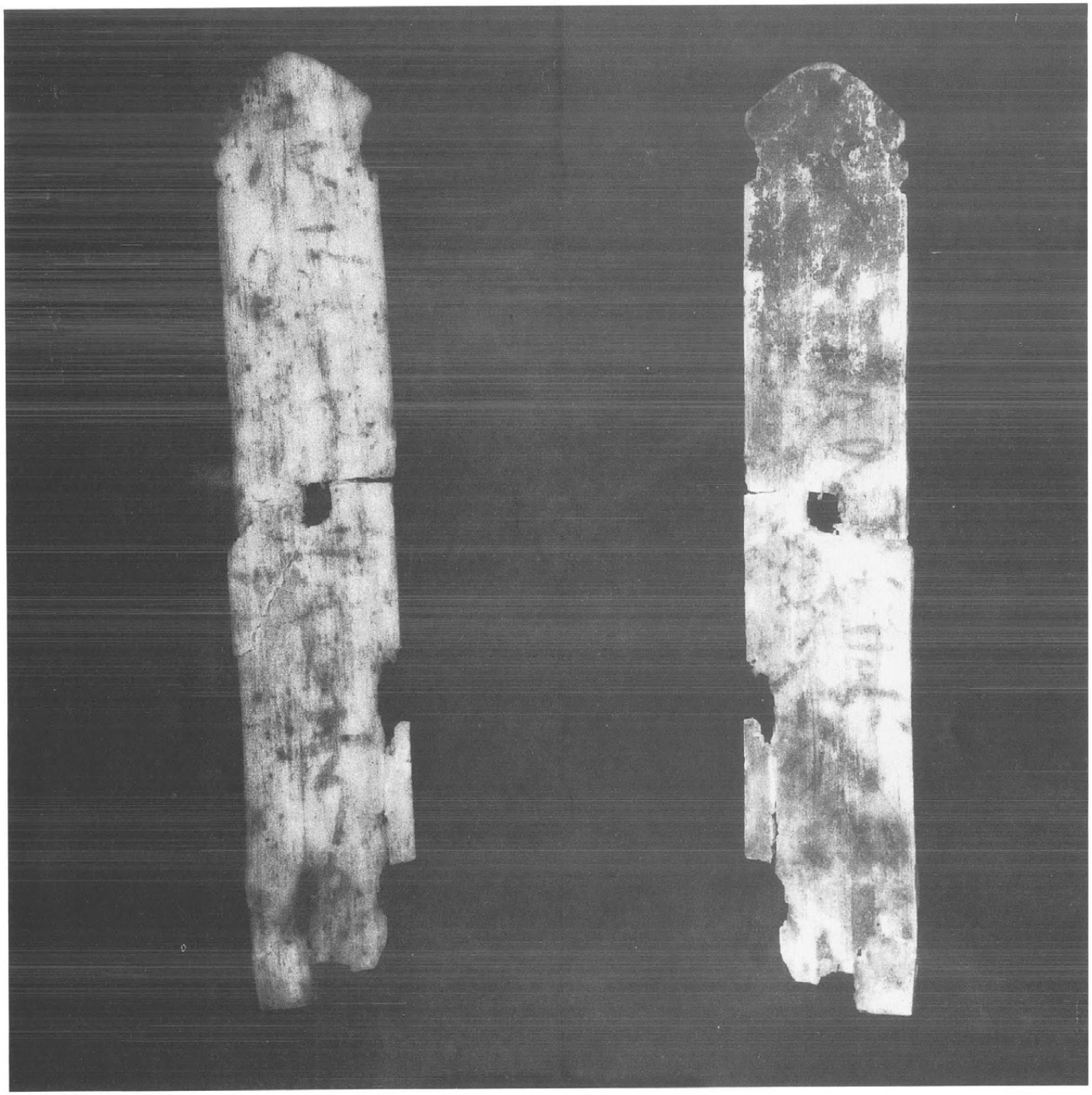
47　珠洲系陶器（片口鉢）



24－11

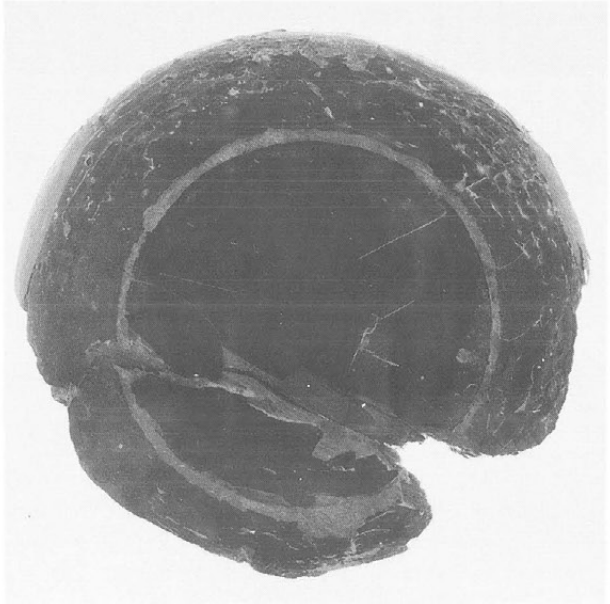


24－13

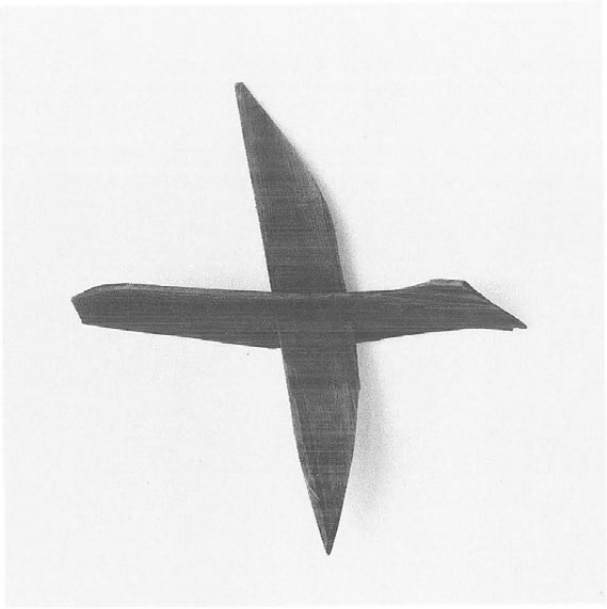


49　ＳＫ６出土木簡

50　ＳＫ６出土漆器椀

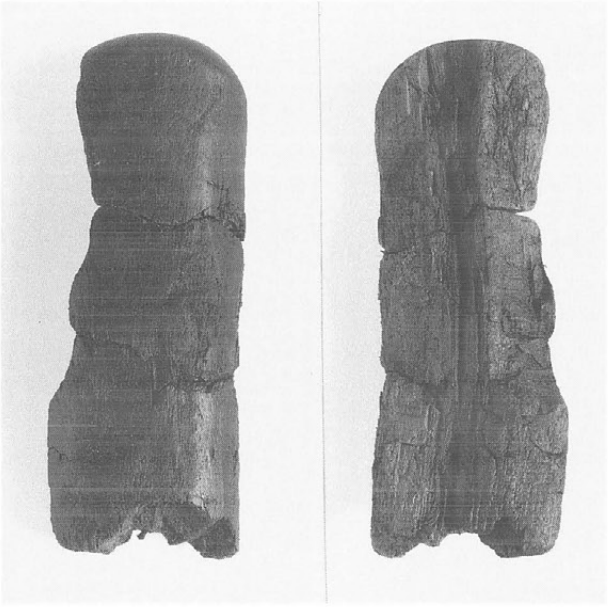


51　26Ｅ出土漆器椀



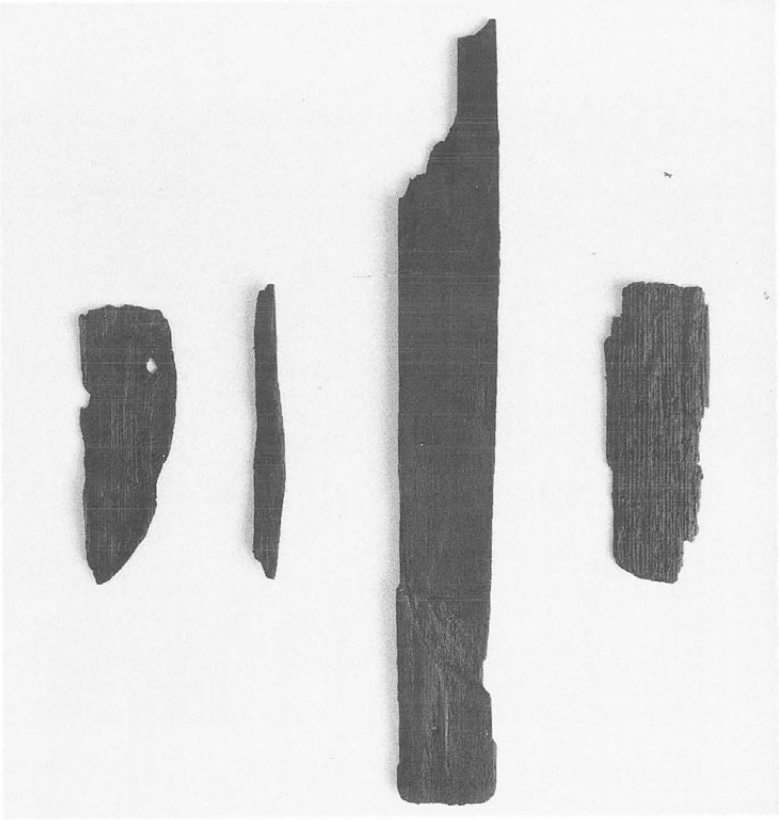
26－1

52 ＳＫ６出土鳥形



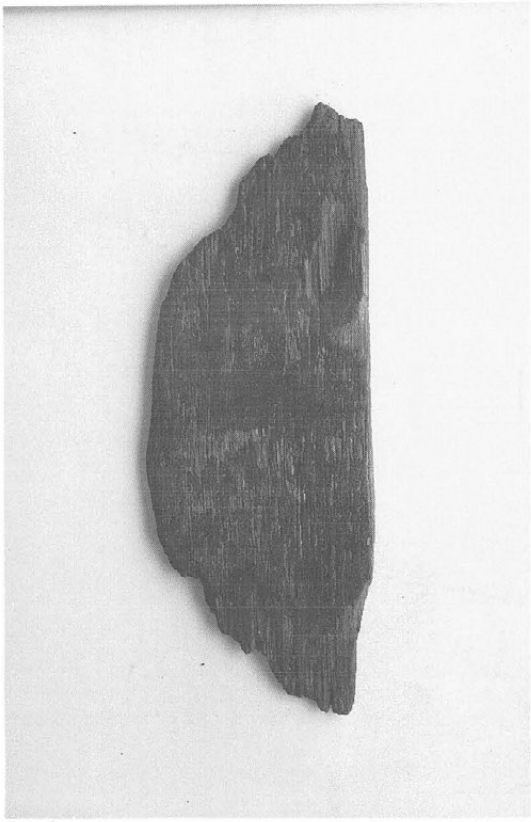
26－6

53 ＳＫ６出土木製品



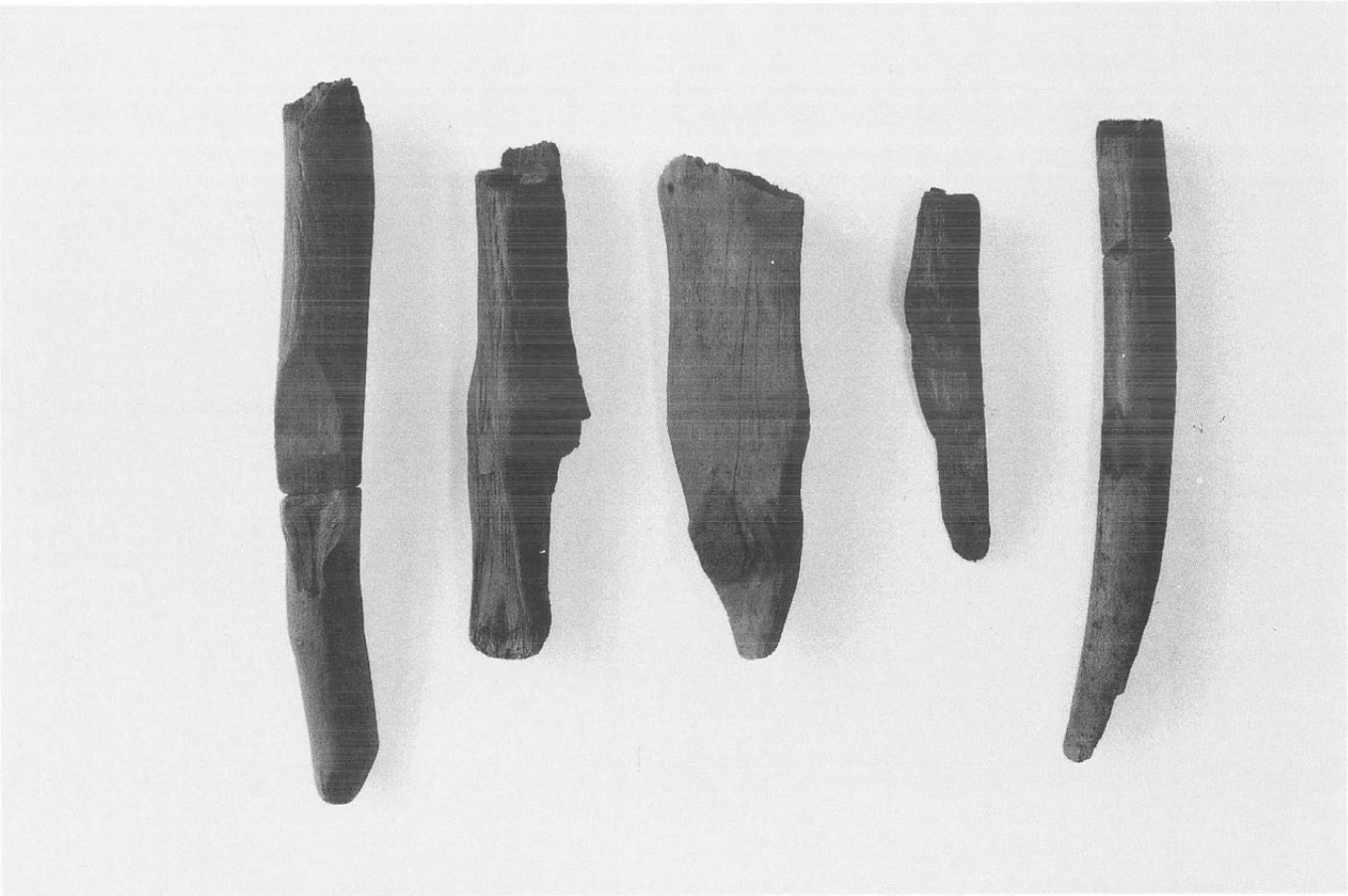
26－3・4・7

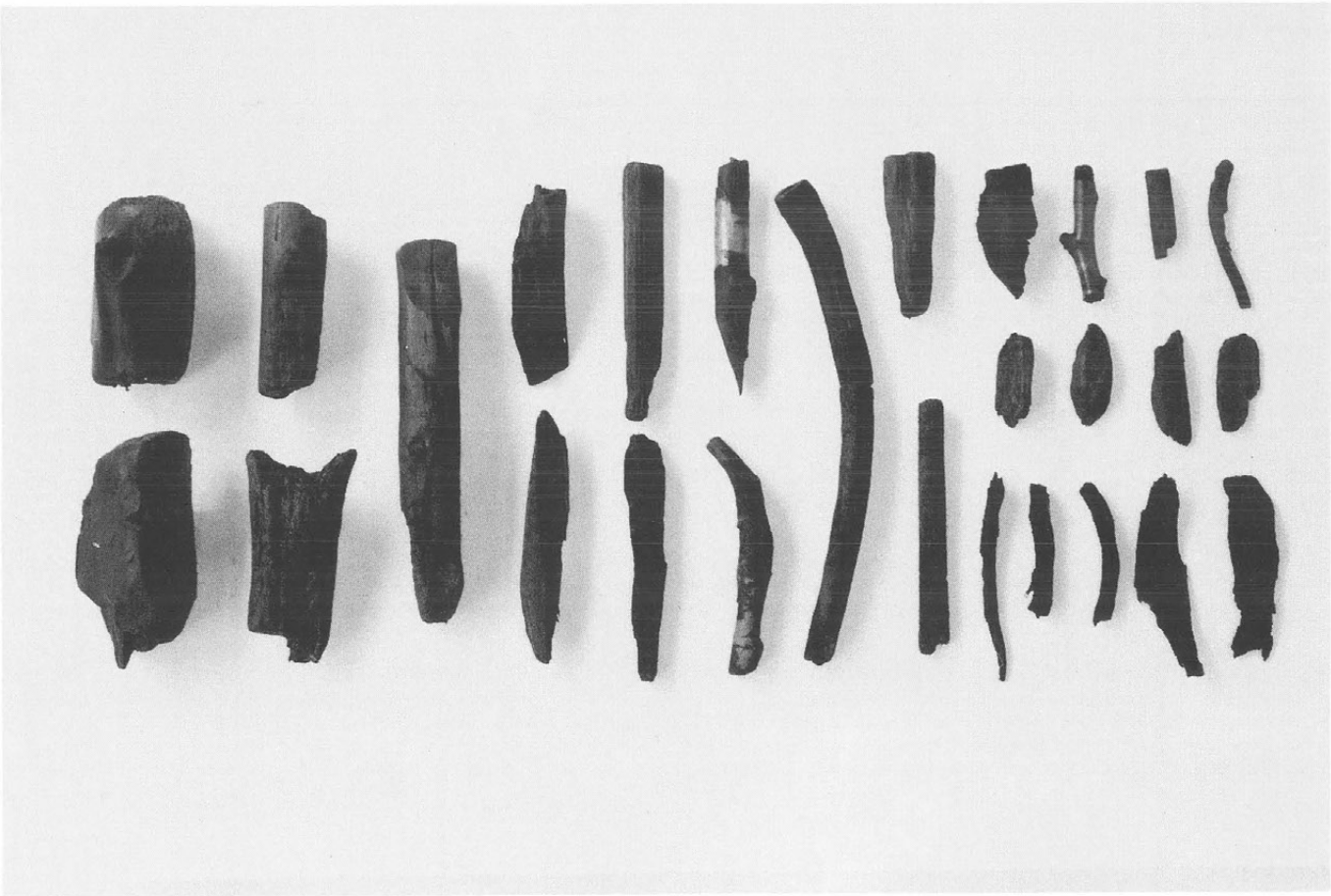
54 木製品



26－8

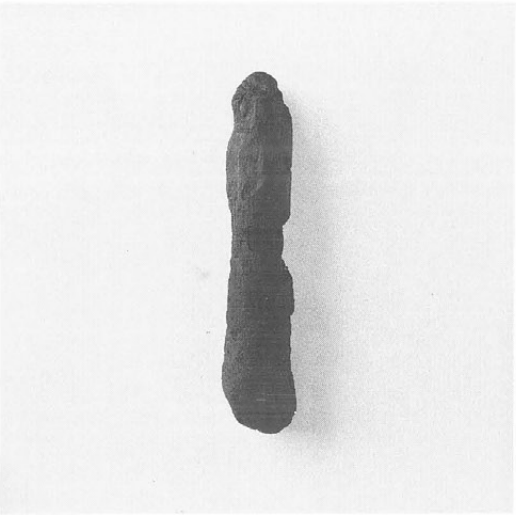
55 曲　物



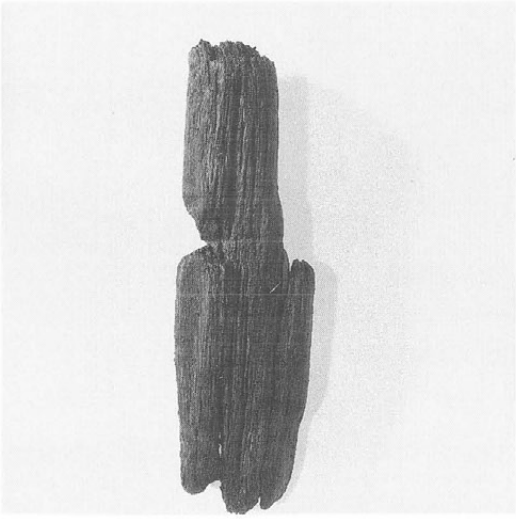


56　ＳＫ６出土　杭 ほか

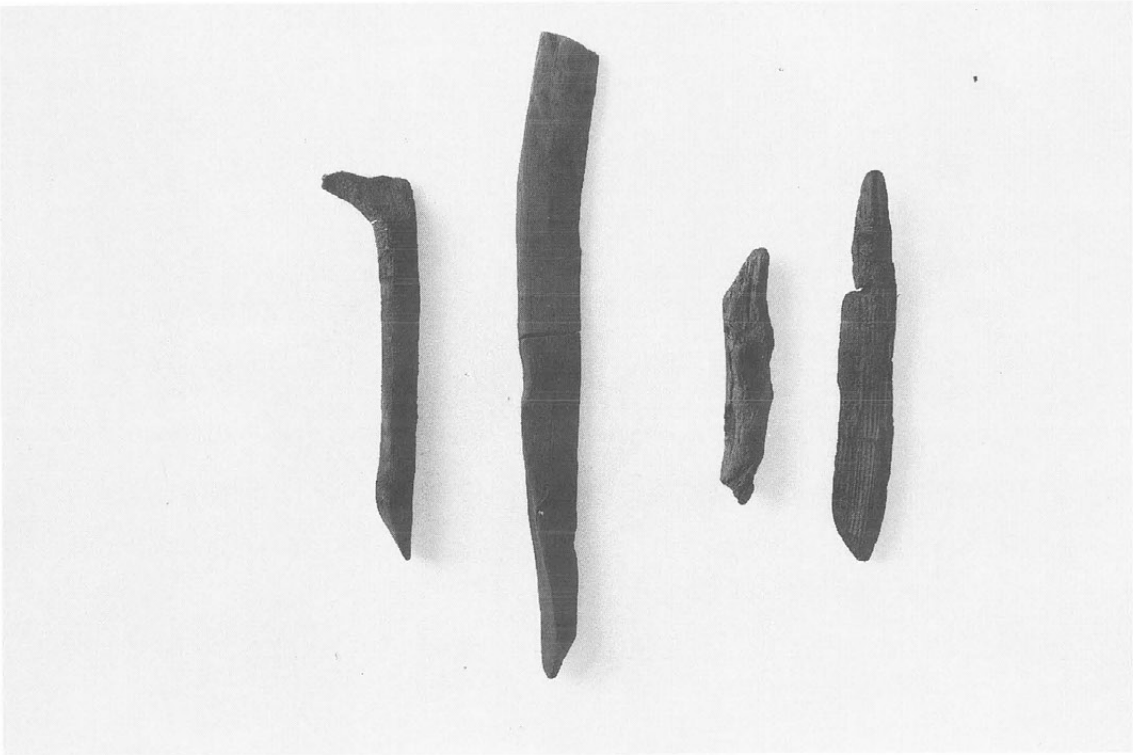
57　ＳＫ６出土杭



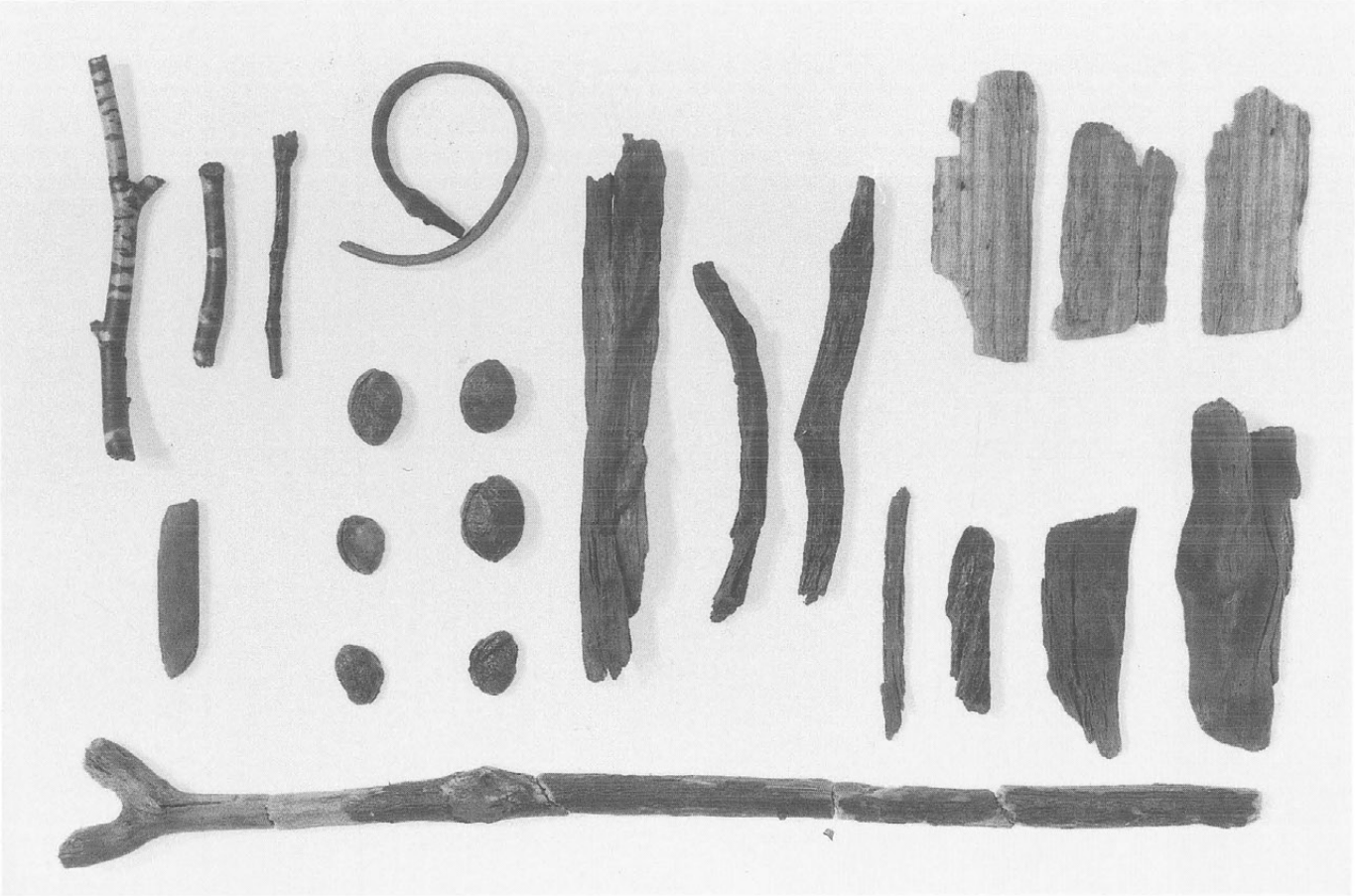
58　木製品



59　木製品

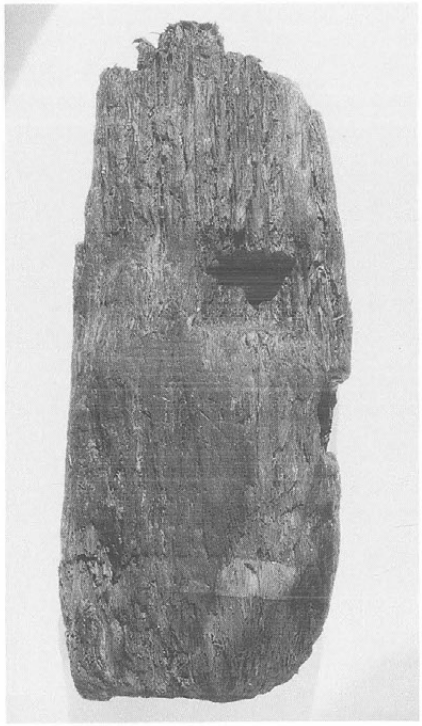


60　木製品

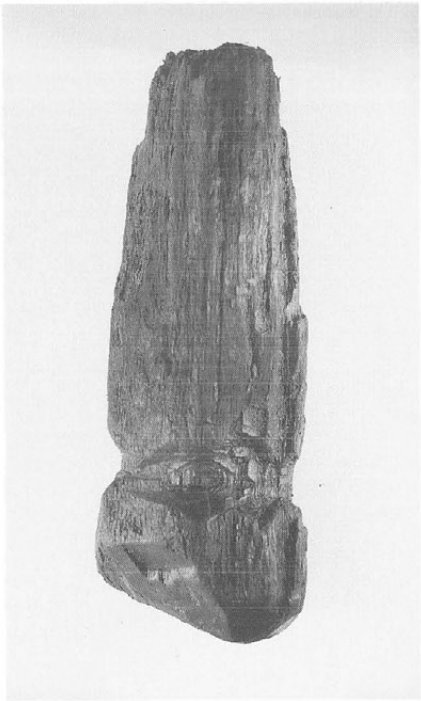


61　ＳＫ８出土木製品

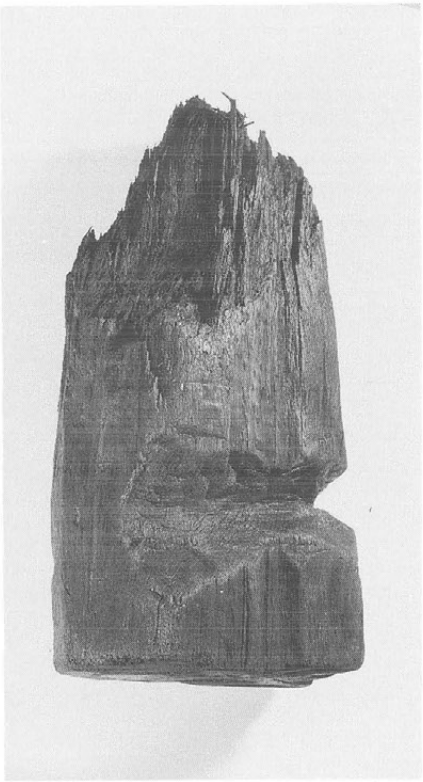
62　ＳＫ６・８出土種子



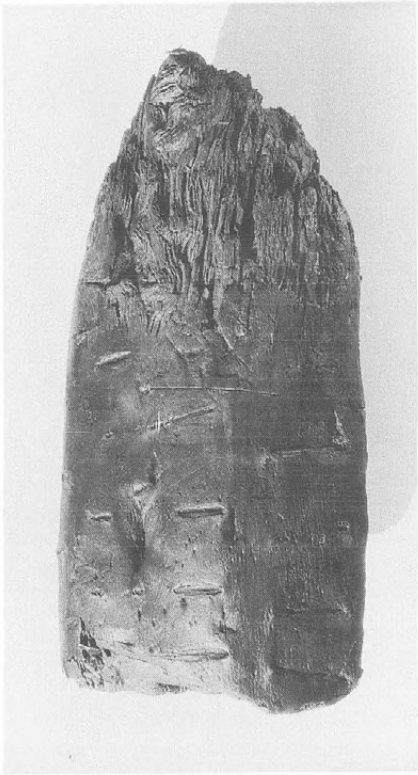
30－1



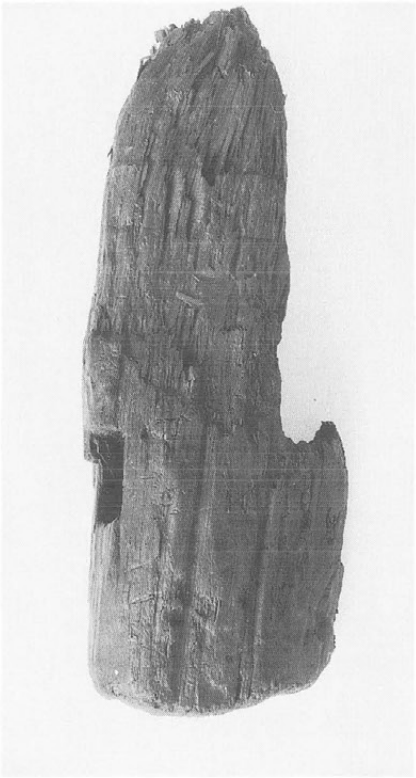
31－8



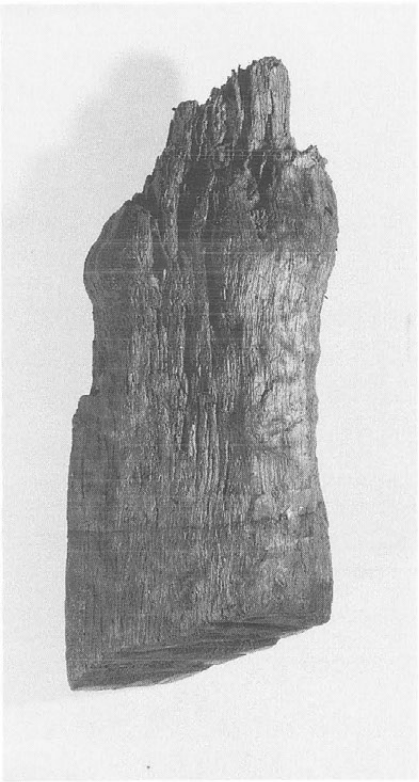
32－14



35－15



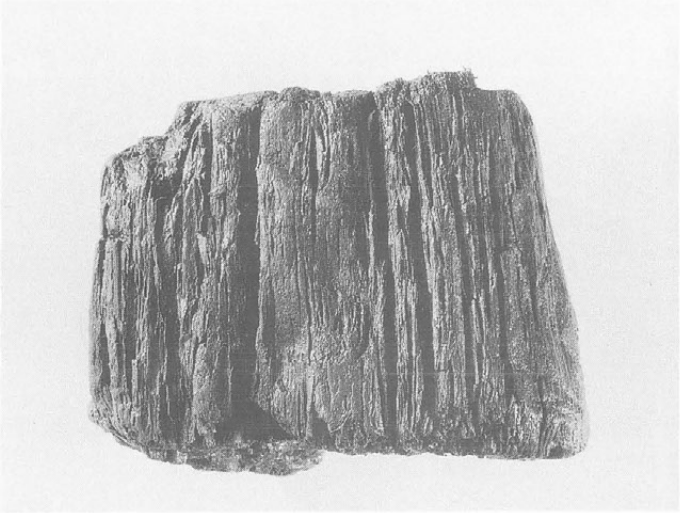
33－16



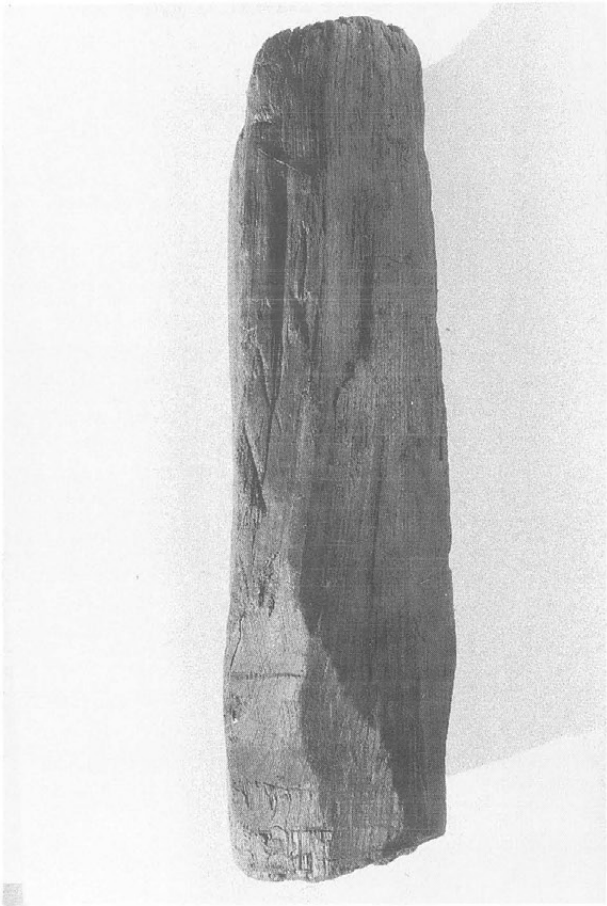
33－17

33－18

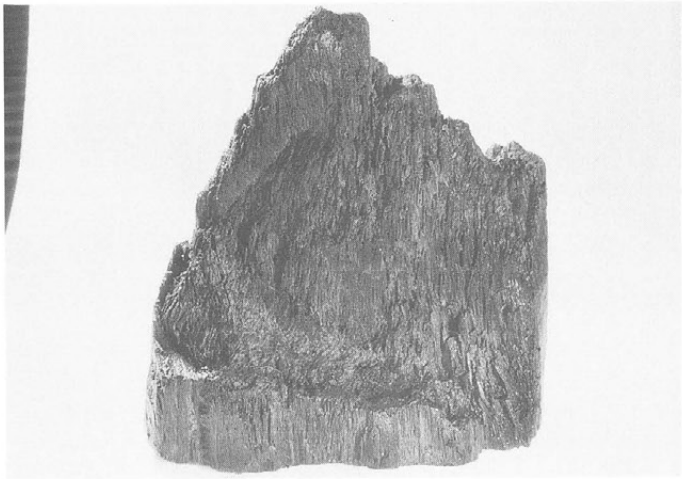
34－22



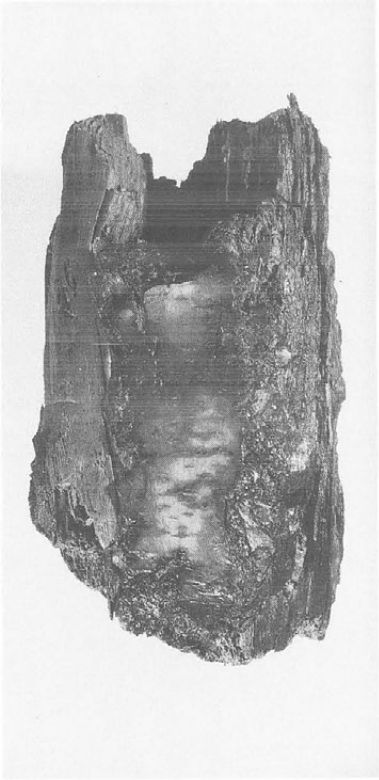
34－24

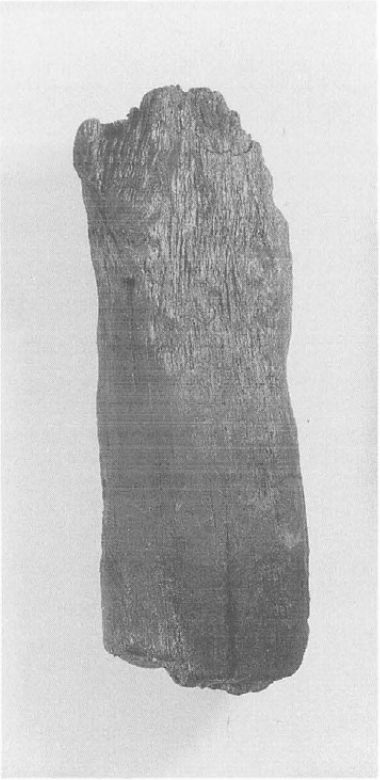


34－26

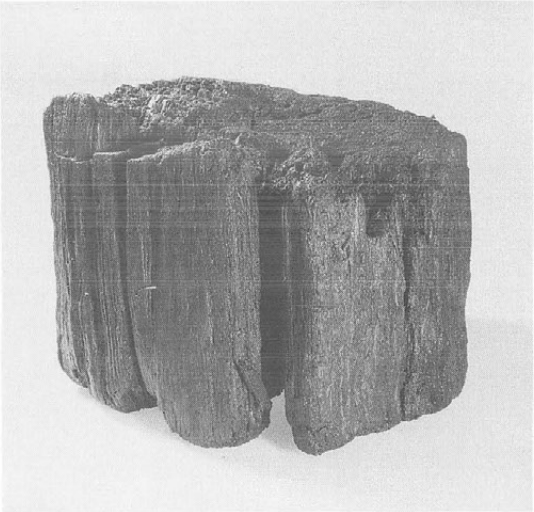


34－25



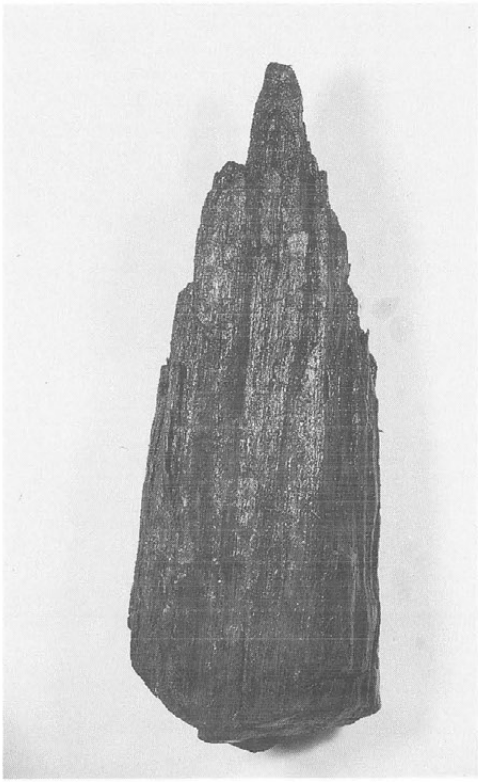


35－27

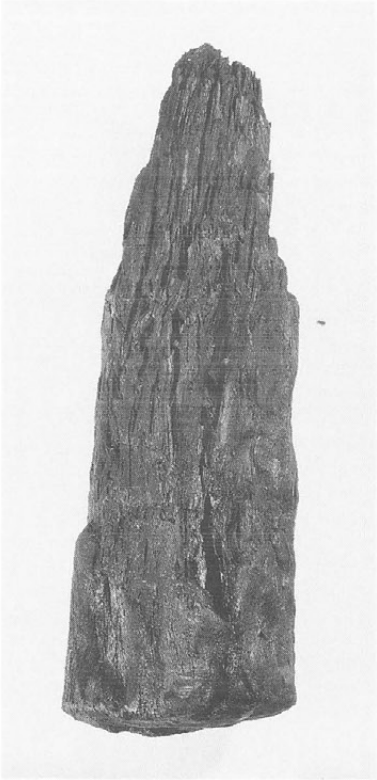


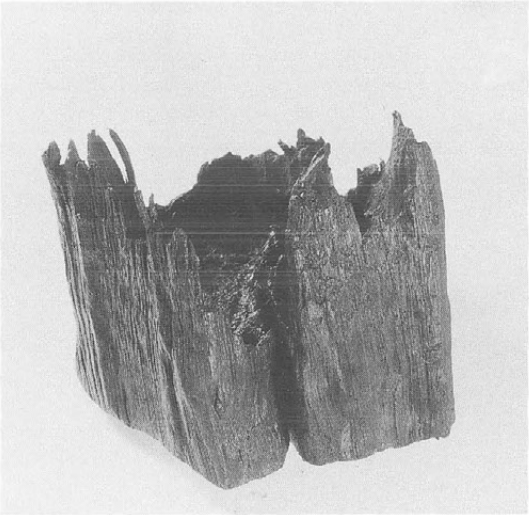
35－28

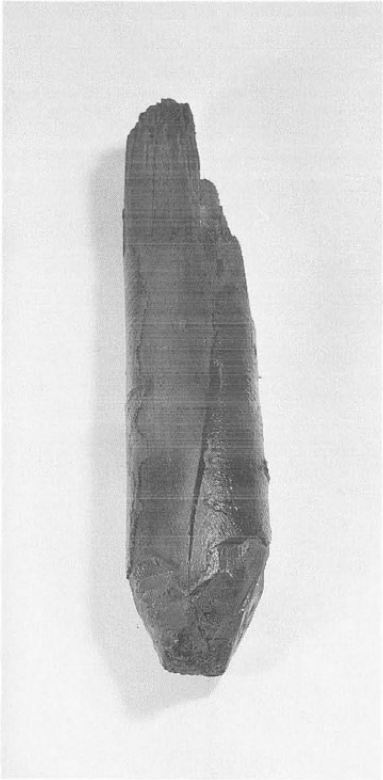
35－29



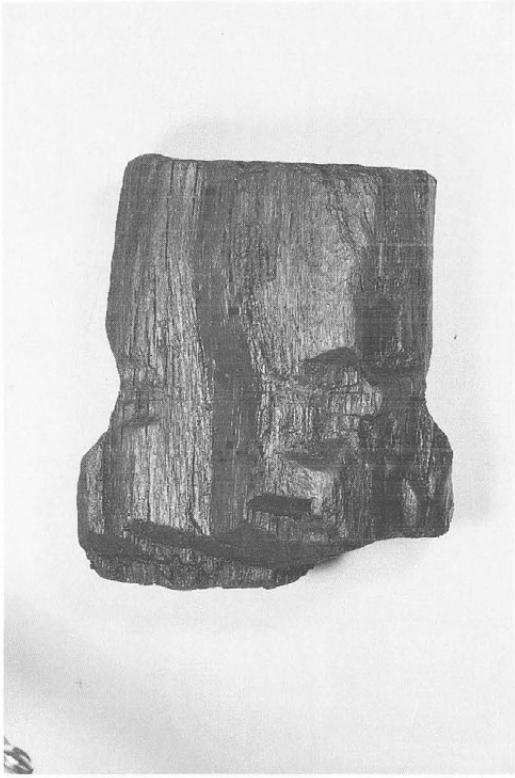
32－12



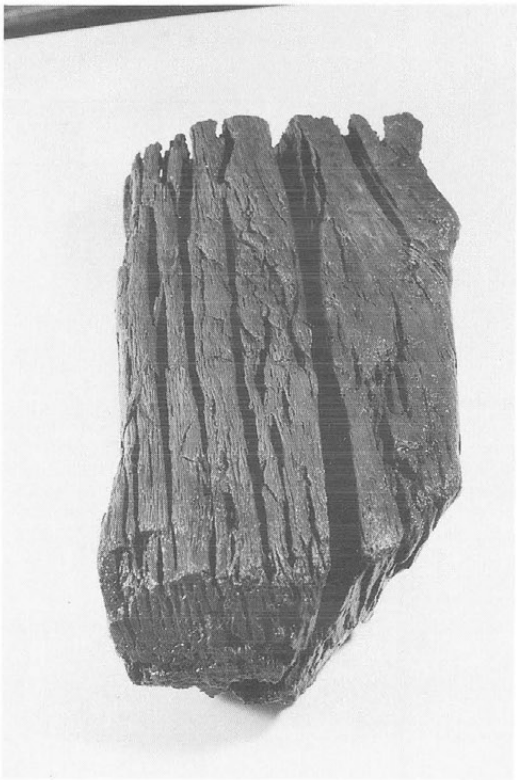




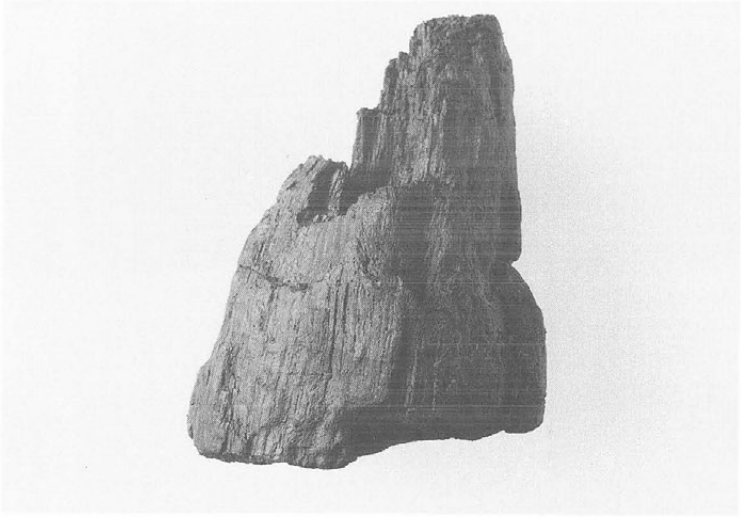
35－34



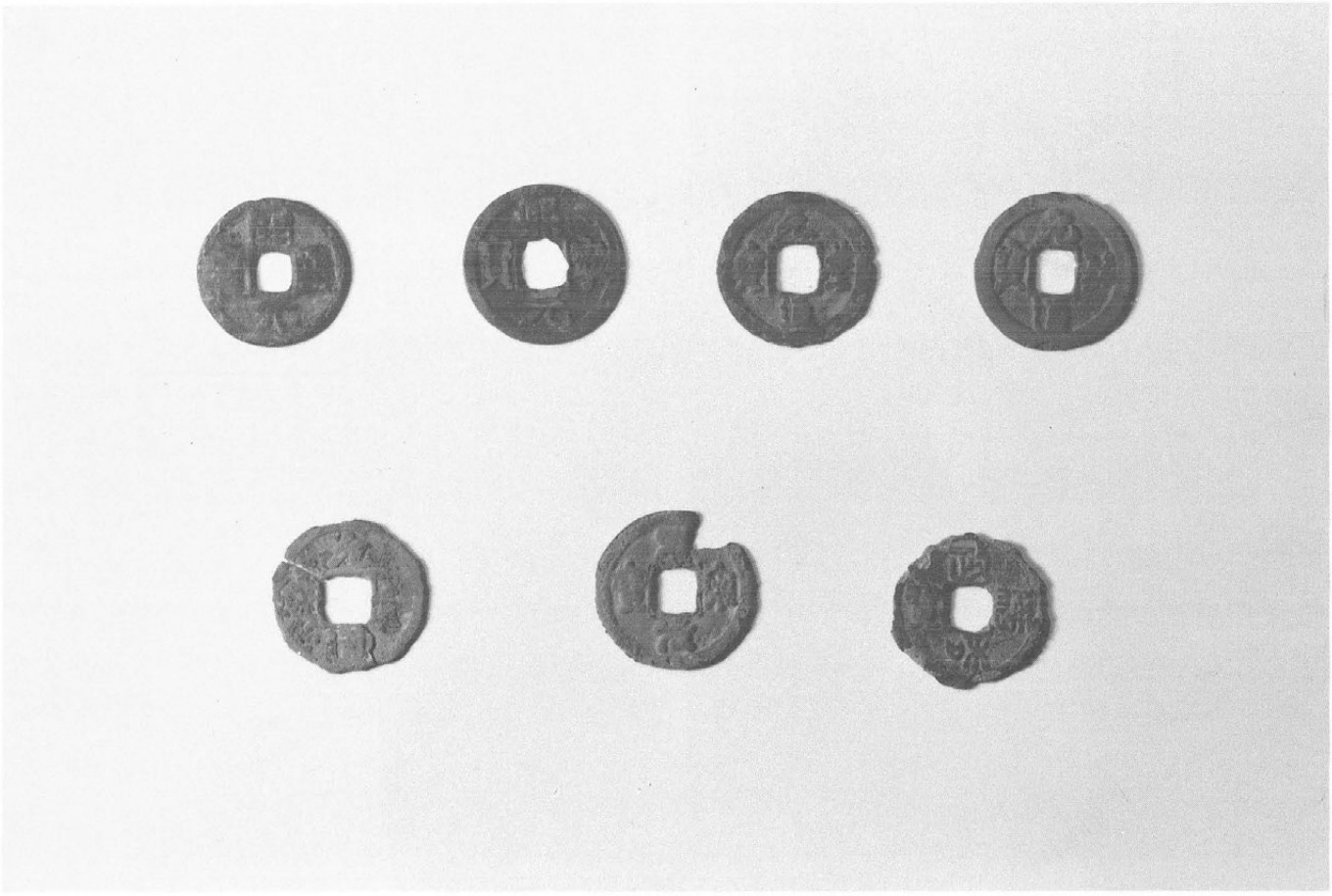
35－33



35－32



67 柱　根



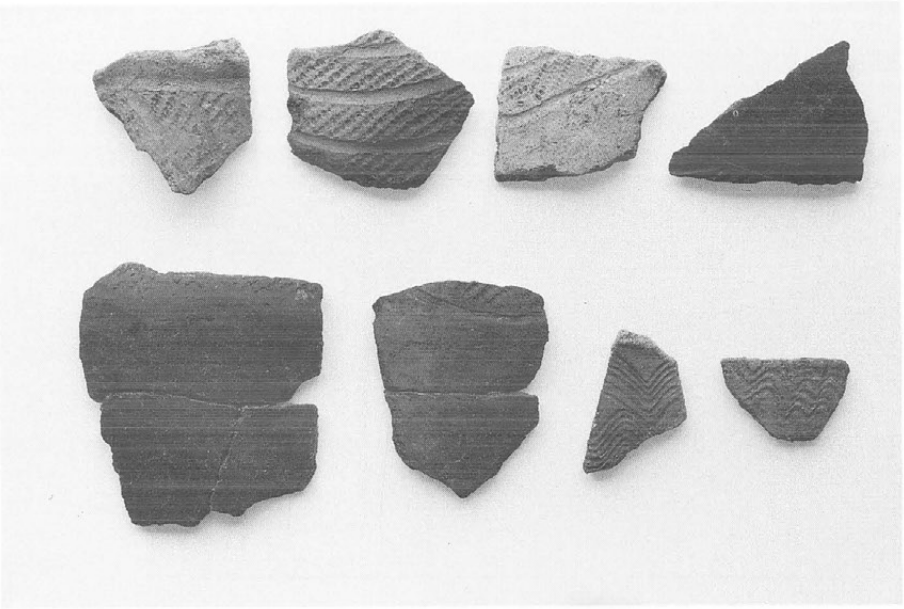
68 銭　貨

図版三十二

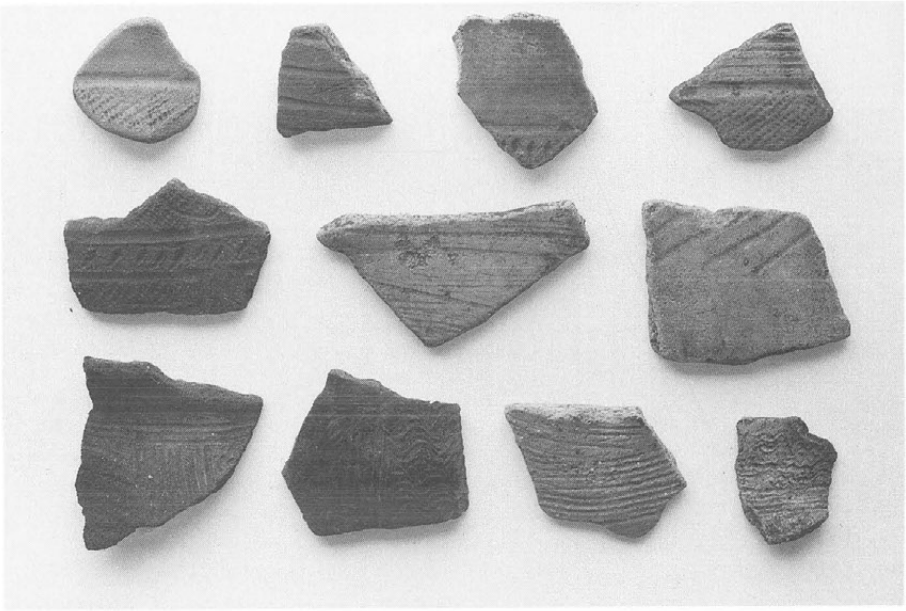
北顔戸遺跡

70 遠　景

71 近　景



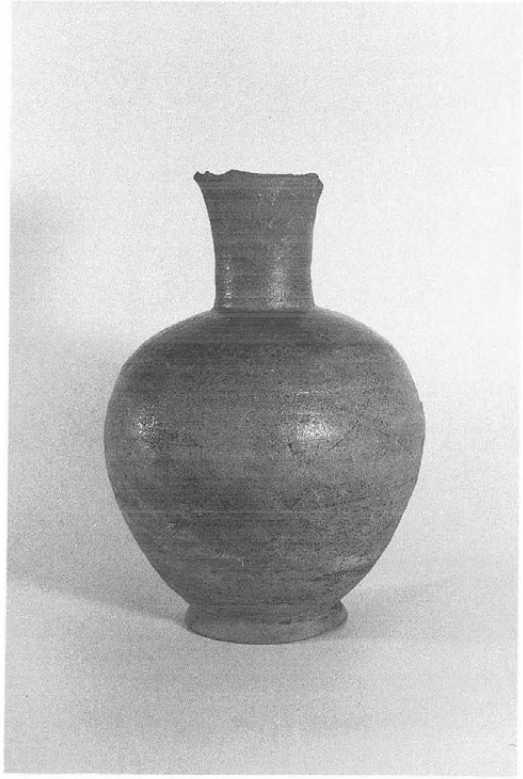
72　A地区（弥生式土器）



73　B地区（弥生式土器）

74　B地区（古式土師器）

75　B地区（平安時代の土器）



76　B地区（須恵器長頸壺）

77　B地区（土師器甕）